42603
教科書文庫
4
810
57-1925
2000 301850

Kodak Gray Scale

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

資料室
教科書文庫
4
810
51-1925
2000301850
375.9
Ka9

大正十四年一月二十二日
文部省檢定濟
師範學校國語科用

師範國文新選

垣内松三 編

広島大学図書
2000301850

社會式株
院書治明

一　縱に學年を貫き横に學期に亙りて特に全篇の組織に留意せり。

一　教材の選擇に關しては作品の本質と學習の態度とを考慮せり。

一　小學國定讀本の研究と聯關して學習と應用との融合を圖れり。

一　原作の更改は教科書としての用意に出づ原作家の諒恕を乞ふ。

廣島大學圖書之印
廣島大學教育
44857
図書

目次

一　明治神宮……溝口白羊……一
二　二百十日……夏目漱石……一〇
三　いり日……高濱虚子……二一
四　眞淵と宣長……佐々木信綱……二五
五　轡十文字……菊池寛……三一
六　畫師の苦心……柳澤淇園……三五
七　名工柿右衞門の村を訪ふ……吉田絃二郎……四〇
八　鬼作左……新井白石……五五
九　森の繪……吉村冬彦……六二
一〇　山鳴……芥川龍之介……六七
一一　繪馬堂……饗庭篁村……八四
一二　一萬里を隔てて……正木不如丘……九〇
一三　椰子の實……島崎藤村……九四
一四　饗宴席上の木乃伊……石井重美……九六
一五　イソップより……（イソップ物語）……一〇八
一六　俚諺……一一二
一七　兒獅子の話……マーデン……一一三
一八　感想二題……阿部次郎……一一七
一九　否の一語……中村正直……一二五
二〇　林檎の味……三浦修吾……一三七
二一　茶話三題……薄田泣菫……一三五
二二　都市美論……佐藤功一……一四四

二三　三人の訪問者……島崎藤村……一五五
二四　微妙な心境……相馬御風……一六二
二五　俳句評釋……沼波瓊音……一七二
二六　天杯下賜……一八二
二七　橋辨慶……（謠曲）……一八五
二八　長柄堤の訣別……坪内逍遙……一九〇
二九　愛國心……大島正德……一九九

附錄

尋常小學　國語讀本教材研究（その二）文體一覽表

廣島大學圖書之印

師範國文新選　卷二

溝口白羊

一　明治神宮

快美な色彩の反射と和かな感觸とを持つた秋の陽光に包まれてゐる代々木の森。私はそれを仰ぎながら、そして何處からともなく高く匂つて來る新しい檜の香を嗅ぎながら、幾度そこを通つたことであらう。森の中からは、時として石を切るらしい金屬的の響は無數の蟻の集團が大きな餌を引くやうに、六七丈もある大きな獻木を牛車に載せて、多數の人夫が汗みどろになりながら、曳々聲して森の中へ引入れるのを見たこともあつた。あの中に明治神宮

(一) 名は駒造。早稲田大學出身。
(二) 東京府豐多摩郡代々幡町字代代木。

が建つのだと思ふと、私の心は莊嚴な或衝動を感ずると同時に、生みの親に對するやうな强い懷かしさが充溢した。そして毎日のやうに其處を通る度に、工程が目に見えて段々捗どつて、基礎工事が終り、小屋組みが出來て、殿舍の次第に整うて行くのが、たまらないほど嬉しく思はれた。

その明治神宮がとう〳〵竣工を告げた。

かつて赤土の露出してゐる上に、鋭く尖つた大理石が幾つも竝んで、烈しい日に光つてゐるのを見た處には、今清々しい小砂利を敷きつめた參道の白い線が、常緑の森の中に長く續き、その以前、まばらな松林の中から耕地の廣く展開してゐるのが遠望された御料地は、いつの間にやら、すつかり見違へる程美しい景色に化して、森嚴と幽邃との趣を兼ね備へた鬱蒼たる密林の中から、謂はゆる流造素木の神殿の見えつ隠れつしてゐるのが、何ともいへぬ神々

しい感じを起させる。

神域よ。眞に神のいまし給ふに適した莊嚴と靜寂と幽雅との領土よ。私は初めて神宮の神苑に立つた時、今更のやうに强烈な感激に打たれた。

何者の力が此の新しい建設の事業を完成させたのであらう。造營局の記錄の上には、大正四年四月以來、直接造營の事に當つた延人員が約百數十萬人であるとか、用材の總計が尺〆一萬九千本であるとかいふやうな細密な數字的計算が擧げてあるが、さういふ數字を高く超越して、隠れた部面に働いた强い力こそ實に此の神宮の基礎を磐石の固きに築き上げたのである。卽ち限りもなく高い明治天皇の御聖德と、慈愛海の如き昭憲皇太后の御懿德と、そしてこの二柱の大神の御惠に對へ奉る國民の至純な感謝の念と、此の三つの者が陰に陽に工程を捗どらせて、此の大工事を完成する

に至らしめたことは、何人も疑ふことの出來ない明瞭な事實であるといはねばならぬ。

嗚呼純粹な至誠の動機から出た全國青年團の造營奉仕、千里の遠方から眞心をこめて輸送して來た無數の獻木、これ等は何事を語つて居るか。實に此の神宮の御苑を形成する一株の樹木、神殿を組織する一本の柱にも、悉く國民の燃えるやうな熱誠がこもつて居るのである。かくして全國民の誠意の結晶たるこの宮居に、國民崇敬の標的たる明治天皇並に昭憲皇太后の神靈が宿らせ給ふのである。何といふ美しい、尊い事實であらう。

今までの神社に曾て見たことのない明治神宮獨自の特色は、實にこゝに在るのである。私は表參道を一直線に進んで、神宮橋畔の第一鳥居の前に來て、遠く神域の中を望み見た刹那に、第一に此の事を直感した。そして一歩々々美しい小砂利の上を神殿に近く蹈

入るに隨つて、愈〻肅然たる心持になつて、深く襟をかき合はせた。

參道の兩側には盡きることを知らない密林がどこまでも續いて、行くに隨つて段々濃くなつてゐる。鳥居から約一町ばかり奥へはひつて神橋の處へ來ると、何處からともなく清冽な水の落ちる音が聞えて來る。

岡山萬成(一)産の石で出來てゐるといふ勾欄に凭つて下を見ると、溪流の趣を模した景致のよい小流の兩岸、筑波(二)山の國有林から發掘した自然石の配立する處に、淺野侯爵から獻納した數十株の楓が、今しも紅於の影を水面に落して、美しい秋の眺を織つてゐる。此處は神苑の中で獨り人工味の加つた處で、神苑の殆ど總べてが纖細な技巧を排した自然的の大觀を呈してゐる中に、特殊の庭園趣味を發揮してゐる。

神橋を渡ると、兩側は一帶の杉並木になつてゐて、その左側の並

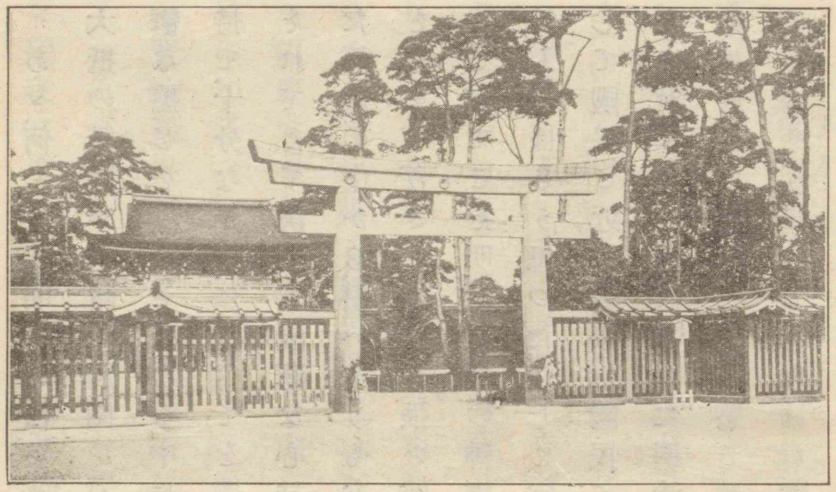
(一) 岡山縣御津郡石井村字萬成。
(二) 茨城縣筑波郡にある山。

木が斷えた處に、一千七百四十の樹齡を重ねたといはれる直立六丈餘の臺灣產の檜の古木で造られた大鳥居が立つてゐる。明神鳥居としては實に日本第一のもので、高さは三丈九尺に達してゐるとの事だ。

此の鳥居の立つてゐる處は、南方原宿(二)方面から來てゐる幅員八間の南參道と、北方千駄ケ谷(一)から來てゐる幅員六間の北參道との接合點で、此の處から左折すれば、道は更に十間の幅員に擴大されて、西を指すこと百五十間、其の道の盡きた處で右を見ると、眼界はぱつと急に廣く且明るくなつて、約一町の北方に、亭々として高く聳えた松の疎林を背景にした、土佐繪のやうな神殿の檜皮葺を拜する事が出來る。

御社殿は樓門・拜殿・本殿等の建造物を合はせて、その總坪數六百五十坪。本殿は全部、木曾御料林產の檜材を以て造られてゐる。近く

(一) 東京府豐多摩郡千駄ケ谷町字原宿。
(二) 東京府豐多摩郡千駄ケ谷町字千駄ケ谷。



明治神宮

拜殿にのぼつて拜すると、芳しい檜の香氣が強く鼻を撲つて、如何にも神の新しい宮居らしい一種の崇高な感じに打たれる。

拜殿から中門を通して奥は卽ち神靈のおはします內々院で、衆庶の漫りに窺ふことを許されない神聖な場所である。

何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ

私は默禱を終へて始めて向を見た。

(三) 西行法師が伊勢神宮に詣でて詠める歌。

あゝ、何といふ明るい、快い感じを持つた社殿だらう。今まで見た大抵の社殿が、皆暗い周圍から來る鈍い光波の中に、靜寂な、併し陰鬱な感じを漂はせてゐる中に、此の神宮ばかりは隱す所のない心持で、十分な光線に總べてを開放し、總べてを暴露して見せてゐる。それでゐて決して淺薄な心持はせず、却つて一層深く、大きくされた靜寂の中から、譬へやうもない莊嚴な感じが滲透して來て、自然と頭を下げさせる樣な强い威壓の力が迫り寄るやうに思はれる。

これでこそ明治天皇の神靈を奉祀した宮だといふことが出來ると、私はさう思つた。久しく宮廷に蟠つてゐた一切の舊弊を排除して、國民と近く觸接し、國民と新しく協力して、新文明を吸收しようとおつとめ遊ばされた明治天皇の、活動的進步的の濶達な御氣象に對して、その明るい感じが、いかにもぴつたりと呼吸を合はせてゐるやうで嬉しく思はれた。

拜殿を中心にして、左右に均齊を保ちながら、長く兩翼を張つた廻廊に現れる幾多の列柱、そして其の奥に續いて便殿の遠く望まれる心持、それらの總べてが、又たとしへもない莊嚴美を語つてゐる。

拜殿を下りて西神門から出てゆくと、約一町に亙る森林帶があつて、その向廣く開けた廣野の中に、目の覺めるやうな芝生が一面に綠の色を展べてゐる。嚴肅から優雅への急轉が、其處にも見られる。こゝらへ來ると、周圍の林苑は著しく庭園風を帶びてゐて、樹林を組成する色々の樹類の中に落葉樹の交つてゐるのが、少からず目につく。

寶物殿へ行くまでの道にはずつと長い間、さうした色彩が續いてゐる。寶物殿は其の形式を中古に採り、其の材料と建築の方法とを現代に採つた鐵筋コンクリート石張の建築で、その建坪は實に

五百十六坪、之に使用した八幡製鐵所製の鐵材は約十二萬貫に及んだといはれてゐる。

後は一帶の密林で、前には優雅な橋梁を架けた池水を控へ、その池塘を廻つて楓樹が美しく植ゑられ、いかにも面白い風情である。

私はこれらを一わたり拜見してまはつて、涙ぐましい程の強い感激に打たれながら、夕暮近く御苑を出た。振返つて見ると、神殿のあたりはすつかりもう深い靄に包まれて、こんもりと生ひ茂つてゐる森が、妙に嚴肅な氣分を起させた。（明治神宮紀）

二　二百十日

夏目漱石*

「あの音は壯烈だな。」

「足の下が、もう搖れて居る樣だ。おい、一寸地面へ耳をつけて聽いて見給へ。」

*名は金之助。文學博士。大正五年歿、年五十。

「どんなだい。」

「非常な音だ。慥かに足の下が唸つてる。」

「其の割に烟が來ないな。」

「風の所爲だ。北風だから、右へ吹きつけるんだ。」

「樹が多いから、方角が分らない。もう少し登つたら見當がつくだらう。」

しばらくは雜木林の間を行く。道幅は三尺に足らぬ。いくら仲が善くても、並んで歩く譯には行かぬ。圭さんは大きな足を悠々と振つて、先へ行く。碌さんは小さな體軀をすぼめて、小股に後から跟いて行く。跟いて行きながら、圭さんの足跡の大きいのに感心して居る。感心しながら歩いて行くと、段々後れて仕舞ふ。

路は左右に曲折して爪先上りだから、三十分と立たぬうちに、圭さんの影を見失つた。樹と樹の間をすかして見ても、何も見えぬ。山

を下りる人は一人もない。上るものにも全く出會はない。只所々に馬の足跡がある。たまに草鞋の切れが茨にかゝつてゐる。其の外に、人の氣色は更に無い。饂飩腹の碌さんは少々心細くなつた。

昨日の澄切つた空に引換へて、今朝宿を立つ時からの霧模樣には少し懸念もあつたが、晴れさへすればと、好い加減な事を賴みにして、どう〳〵阿蘇*の社までは漕附けた。白木の宮に禰宜の鳴らす拍手が、森閑と立つ杉の梢に響いた時、見上げる空から、ぽつりと何やら額に落ちた。今朝がた、饂飩を煮る湯氣が障子の破れから吹いて、白く右へ靡いた頃から、午過ぎは雨かなとも思はれた。

雜木林を小半里程來たら、怪しい空がどう〳〵持切れなくなつたと見えて、梢に滴る雨の音が、さあと北の方へ走る。後から、すぐ新しい音が耳を掠めて、翻る木の葉と共に、又北の方へ走る。碌さんは首を縮めて、「ちえつ。」と舌打をした。

*官幣大社。熊本縣阿蘇郡宮地村に在り。神武天皇の御孫健磐龍命を祀る。

一時間程で林は盡きる。盡きると云はうよりは、一度に消えると云ふ方が適當であらう。振返る後は知らず、貫いて來た一筋道の外は、東も西も茫々たる青草が波を打つて、幾段となく連なる後から、むく〳〵と黑い烟が持上つて來る。噴火口こそ見えないが烟の出るのはつい鼻の先である。

林が盡きて、青い原を半町と行かぬ所に、大入道の圭さんが空を仰いで立つてゐる。蝙蝠傘は疊んだ儘帽子さへ被らずに、毬栗頭をぬつくと草から上へ突出して、地形を見廻してゐる樣子だ。

「おうい。少し待つて吳れ。」

「おうい。暴れて來たぞ。暴れて來たぞう。しつかりしろう。」

「しつかりするから、少し待つてくれえ。」と、碌さんは一所懸命に草の中を這上る。漸く追ひつく碌さんを待受けて、

「おい、何を愚圖々々してゐるんだ。」と、圭さんが遣つつける。

「だから饂飩ぢや駄目だと云つたんだ。あゝ苦しい。おい、君の顔はどうしたんだ。眞黑だ。」

「さうか。君のも眞黑だ。」

圭さんは、無雜作に白地の浴衣の片袖で、頭から顔を撫でまはす。碌さんは腰からハンケチを出す。

「なる程、拭くと、着物がどす黑くなる。」

「僕のハンケチもこんなだ。」

「ひどいものだな。」と圭さんは雨の中に坊主頭を曝しながら、空模様を見まはす。

「よなだ。よなが雨に溶けて降つてくるんだ。そら、其の薄の上を見給へ。」と碌さんが指をさす。長い薄の葉は一面に灰を浴びて、濡れながら靡く。

「成程。」

*火山灰。

「困つたな、こりや。」

「なあに大丈夫だ。ついそこだもの。あの烟の出る所を目當にして行けば、譯は無い。」

「譯は無ささうだが、是ぢや路が分らないぜ。」

「だから、さつきから待つて居たのさ。こゝを左へ行くか、右へ行くかと云ふ、丁度股の所なんだ。」

「成程、兩方とも路になつてるね。併し烟の見當から云ふと、左へ曲る方が好ささうだ。」

「君はさう思ふか。僕は右へ行く積りだ。」

「どうして。」

「どうしてつて、右の方には馬の足跡があるが、左の方には少しもない。」

「さうかい。」と、碌さんは、身體を前に曲げながら、蔽ひかゝる草を押

分けて、五六歩、左の方へ進んだが、すぐに取つて返して、

「駄目な樣だ、足跡は一つも見當らない。」と云つた。

「無いだらう。」

「そつちには有るかい。」

「うん、たつた二つ有る。」

「二つきりかい。」

「さうさ、たつた二つだ。そら其處と此處に。」と圭さんは繻子張の蝙蝠傘の先で、かぶさる薄の下に、幽かに殘る馬の足跡を見せる。

「是だけかい。心細いな。」

「なに大丈夫だ。天佑ぢやないか。」

「君の天佑はあてにならない事夥しいよ。」

「なに是が天佑さ。」と圭さんが云ひ了らぬうちに、雨を捲いて颯と おろす一陣の風が、碌さんの麥藁帽を遠慮なく吹込めて、五六間先

擬人法

まで飛ばして行く。眼に餘る青草は、風を受けて一度に向へ靡いて、見るうちに色が變ると思ふと、又靡き返して故の態に戻る。

「痛快だ。風の飛んで行く足跡が草の上に見える。あれを見給へ。」と、圭さんが幾重となく起伏する青い草の海を指す。

「痛快でもないぜ。帽子が飛んぢまつた。」

「帽子が飛んだ。いゝぢやないか、帽子が飛んだつて取つて來るさ。取つて來てやらうか。」

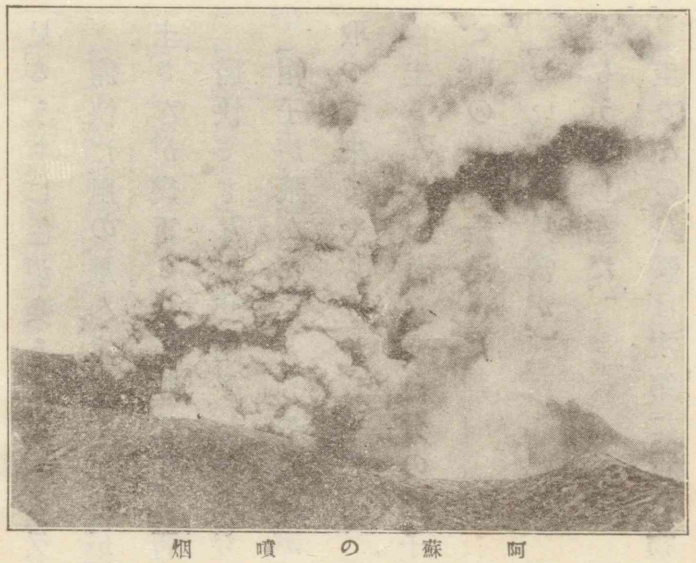
圭さんは、いきなり、自分の帽子の上に蝙蝠傘を重しに置いて、颯と薄の中へ飛込んだ。

「おい此の見當か。」

「もう少し左だ。」

圭さんの身體は次第に青い物の中に、深くはまつて行く。仕舞には首だけになつた。あとに殘つた碌さんは又心配になる。

「おうい、大丈夫か。」



阿蘇の噴烟

「何だあ。」と向の首から聲が出る。

「大丈夫かよう。」

やがて圭さんの首が見えなくなつた。

「おうい。」

鼻の先から出る黑烟は、鼠色の圓柱の各部が絶間なく蠕動（ぜんどう）を起しつゝある如く、むく〳〵と捲上つて、半空から大氣の裡に溶込んで、碌さんの頭の上へ容赦なく雨と共に落ちてくる。碌さんは悄然（しよんぼり）として首の消えた方

角を見詰めて居る。

暫くすると、丸で見當の違つた半町程先に、圭さんの首が忽然（にはかに）と現れた。

「帽子はないぞう。」

「帽子は入らないよう。早く歸つてこうい。」

圭さんは坊主頭を振立てながら、薄の中を泳いで來る。

「おい、何處へ飛ばしたんだい。」

「何處だか相談が纏らないうちに飛ばしちまつたんだ。帽子はいいが、歩くのは厭になつたよ。」

「もう厭になつたのか。まだ歩かないぢやないか。」

「あの烟と、この雨を見ると、何だか物凄くつて、歩く元氣がなくなるね。」

「今から駄々を捏ねちや仕方がない。——壯快ぢやないか、あのむ

く〳〵烟の出てくる所は。」

「あのむく〳〵が氣味が悪いんだ。」

「冗談云つちやいけない。あの烟の側へ行くんだよ。さうして、あの中を覗き込むんだよ。」

「考へると全く餘計な事だね。」

「兎も角も歩かう。」

暫くして圭さんは立止つて、黑い烟の方を見る。

濛々と天地を鎖す秋雨を突拔いて、百里の底から沸騰る濃いものが渦を捲き渦を捲いて、幾百噸の量とも知れず立揚る。其の幾百噸の烟の一分子が、悉く震動して爆發するかと思はれる程の音が、遠い〳〵奥の方から濃いものと共に頭の上へ躍り上つて來る。

雨と風のなかに、毛蟲のやうな眉を攢めて、餘念もなく眺めて居た圭さんが、非常な落附いた調子で、

「雄大だらう、君。」と云つた。

「全く雄大だ。」と碌さんも眞面目で答へた。

圭さんはのつそりと踵を廻らした。碌さんは默然として跟いて行く。空にあるものは、烟と雨と風と雲である。地にあるものは、青い薄と女郎花と處々にわびしく交る桔梗のみである。二人は乾々として無人の境を行く。（二百十日）

三　いり日

高濱虛子*

富士山の頂に夕燒の雲がある。富士山の頂を起點にして墨が跳ねたやうになつてゐる一なすりの雲で、それが赤く燒けてゐる。赤く燒けてゐるといつても、斯んなにも赤く燒けるものかと思はれる程燒けてゐる。燒けてゐるといふよりも焦げてゐる。黑光りに焦げてゐる。さうして其の雲の緣の光りつたらない。片々の雲が燃立

※名は清。俳人。

つて、燃えてしまつて、光になつて、唯黄色く、白い光になつて、其の赤く燒けてゐる雲の縁をさゝべり取つてゐるやうにも見える。

此の一なすりの雲のほかは、其の邊には全く雲が無い。富士山の項は正しい形をして大空に浮出たやうになつてゐる。眞青な夕暮の空に薄墨色の形をして、くつきりと浮出たやうになつてゐる。さうして此の一なすりの雲が、項から煙でも吐いてゐるやうに、片方に跳ね靡いてゐるほかは、全く其の邊には雲は無い。

が、それよりもずつと離れたところに雲がある。富士山の項の一抹の雲を一寸筆の先で跳ねたものとすれば、其の筆勢が餘つたかの如く、大空の眞唯中に濃い長い一線を劃して雲がある。其の雲も眞赤に燒けてゐる。

それから空一面の亂雲だ。頭上見渡す限り一面の亂雲だ。其の雲も眞赤に燒けてゐる。

富士山の背中に今太陽は沒しつゝある。其の光が眞先に富士山の項の雲を射て、それから暫くは大空で、空洞の大空で、それから大空の眞唯中にある濃い長い雲に及んで、それからは大空一面にはびこつてゐる亂雲に及んで、今や天地が眞赤に燒けて焦げて爛れてゐるのだ。

さうだ、車窓の人々の顏も赤く輝いてゐる。——今私の乘つてゐる汽車は大船驛を通過しつゝある。——手にしてゐる書物の面まで赤く輝いてゐる。まして窓外の稻田などは、黄熟してゐる稻が愈眞黄色に光つてゐる。稻田の中を走つてゐる一つの街道も黄色く光り輝いてゐる。

夕燒だ。

偉大なる秋の夕燒の景色だ。

斯ういふ光景に私は屢出逢つた。これは今年の秋に限つた景色ではないのであらうが、しかも今年の秋には屢出逢つた。それはちやうど四時三十五分に東京驛を出る汽車に乘ると、大船驛を通過する頃が恰も夕暮となる。天氣のいゝ日、明日も晴天だと豫想されるやうな日は、此の夕燒の光景が目の前に展開するのである。

それが此の頃になると――冬の初め頃になると――同じく東京驛を四時三十五分に出る汽車に乘ると、乘る時に早太陽は百萬の人家の上に沈みつゝある。

眞赤な太陽は片雲の無い西の空に光り輝いて、人家の上に落ちつゝある。洋館の窓硝子が照り映えて百面の鏡を並べたやうになる。これが今日の太陽の最後の輝であるといはんばかりに派手に、立派に。

汽車の動くに連れて鐵骨の大建物が眼の前に現れる。まだ黑い鐵骨が縱横に渡されてゐるばかりの七階の大建物が現れる。さうして赤く沈みつゝある太陽は、ちやうど此の鐵骨の向側にあつて、大空の眞赤に燒け爛れてゐるのが、恰も鐵骨が燒け爛れてゐるやうに見える。（朝の庭）

【國語讀本卷十一、十七、「松坂の一夜」參照。】

四　眞淵と宣長

佐々木信綱

時は夏の半、いやとこせ」と長閑やかに唄ひ連れゆく御伊勢參の群も、春先ほどには騷がしからぬ伊勢松阪なる日野町の西側、古本の老舗柏屋兵助の店先に「御免」といつて腰をかけたのは、本居舜庵といふ、魚町の年若い小兒科醫であつた。醫師を業とはしてゐるものの、名は宣長といつて皇國學の書やら、漢籍やらを、常に買ふ、この店の常華客であるから、主人は笑ましげに出迎へたが、手をうつて、「あゝ、殘念なことをしなされた。あなたがよく名前をいつておいで

(一) 文學博士。東京帝國大學講師。

(二) 名は宣長。國學四大人の一人。享和元年歿、年七十二。

になる、江戸の岡部(一)先生が、今の先、若いお弟子と供を連れてお立寄になつたに。」といふ。舜庵は、いつものゆつくりした調子とは違つて、「先生がどうして此處へ。」とあわたゞしく問ふ。

主人は、「何でも田安(二)様の御用で、山城から大和とお廻りになつて、歸途に參宮をなさらうといふので、一昨日あの新上屋へお着きになつたところ、少しお足に浮腫が出たとやらで御逗留。今朝はもうお宜しいので、御出立の途中、何か古い本は無いかと暫くお休みになりました。」舜庵、「それは殘念なことであるどうかしてお目にかゝりたいが。」「迹を追うてお出でなされませ、

賀茂眞淵

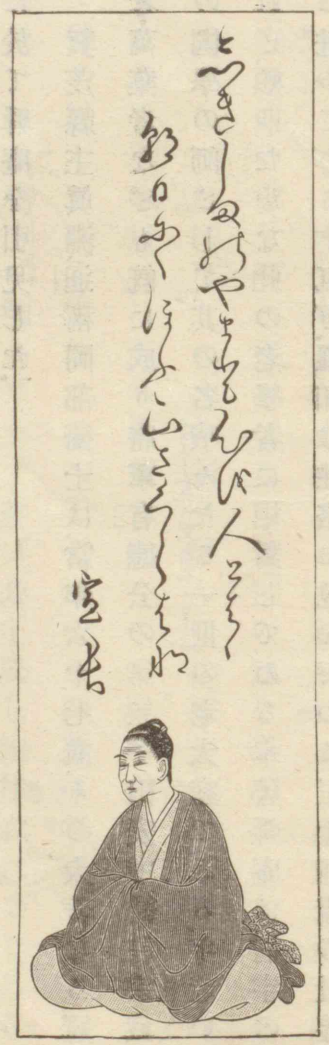
(一) 岡部衞士は賀茂眞淵の通稱。國學四大人の一人。明和六年歿、年七十三。

(二) 田安宗武。

追付けませう。」と主人がいふので、舜庵は一行の樣子を大急ぎで聽取つて迹を追うた。

跡を追うて、松阪の市街を離れ、次の宿(宿ノ澤山ある所)なる垣鼻(かきはな)村の先まで行つたが、どうもそれらしい人に追ひつき得なかつたので、すご〳〵と我が家に戻つて來た。

數日の後、岡部衞士(エジ)は神宮の參拜を濟ませ、二見が浦から鳥羽の日和見(ヒヨリミ)山に遊んで夕暮に再び松阪の本陣新上屋に宿つた。若し歸



途に又泊られたなら、どうか知らせて貰ひたい。」と賴んでおいた舜庵は、夜に入つて新上屋からの使を得たので、取るものも取敢へず旅宿を訪うた。同行の弟子の村田春郷(一)は二十五、その弟の春海(二)は十八の若盛で、早くも別室にくつろいでゐた。衞士は仄暗い行燈の下に於て舜庵を引見した。

賀茂縣主眞淵、通稱岡部衞士は、當年六十七歳、その大著なる冠辭考・萬葉考なども既に成り、將軍有德公(三)の第二子田安中納言宗武卿の國學の師として、其の名嘖々たる一世の老大家である。年老いたれど、頗ゆたかな此の老學者に相對してゐる本居舜庵は、眉宇の間に迸つてゐる才氣を、溫和な性格に包んでゐる三十四歳の壯年、而も、彼は二十三歳の時、京都に遊學して醫術を學び、二十八歳にして松阪に歸つて、醫を業としてゐたが、京都ではたゞ醫術を學んだのみでなく、契沖(四)の著書を讀破し、國學の蘊蓄も深かつたのである。

(一) 江戸の歌人。明和五年歿、年三十。
(二) 織錦齋、又琴後翁と號し、歌文を能くす。文化八年歿、年六十六。
(三) 德川吉宗の諡。
(四) 大阪の僧。國學者。元祿十四年歿、年六十二。

舜庵は、長い間欽慕してゐた身の、ゆくりなき對面を喜んで、豫て志してゐる古事記の註釋に就いて、その計畫を語つた。老學者は若人の言を靜かに聽いて、懇にその意見を語つた。「我も固より神典を解きあきらめんとの志であつたが、それにはまづ漢意を清く離れて、古の眞の意を尋ね得ねばならぬ。古の意を得んには、古の詞を得た上でなければならぬ。古の詞を得んには、萬葉を、よく明らめねばならぬ。それ故自分は專ら萬葉を明らめて居た間に、かくも年老いて、殘の齡いくばくも無くなつてしまつた。御身は年盛で、ゆくさきが長いから、怠らず勉めさへすれば、必ず成し遂げられるであらう。併し世の學に志す者は、とかく低いところを經ないで、すぐに高い處へ登らうとする弊がある。かくては低い處をさへ得ることが出來ぬのである。此の旨を忘れず、心にしめて、まづ低いところをよく固めて、さて高い處に登るがよい。」と諭した。

夏の夜は早くも更けて、家々の門の皆鎖され果てた深夜に、老學者の言に感激して面ほてりした若人は、闇夜の道のいづこを踏むとも覺えず、中町の通を西に折れ、魚町の東側なる我が家の潛戸を這入つた。鄰家たる桶利の主人は律義者でいつも遲くまで夜なべをして居る。今夜もとん〳〵と桶の箍を入れてゐる。時にはやかましいと思ふ折もあるが、今夜の彼が耳には何の音も響かなかつた。

舜庵はその後江戸に便りを求め、その翌年の正月、(一)村田傳藏が中にはひつて、名簿を捧げ、うけひごとをしるして、縣居の門人錄に名を列ねる一人となつた。爾來松坂と江戸との間、飛脚の往來に、彼は問ひ、此は答へた。門人とはいへ、その相會うたことは僅かに一度、唯一夜の物語に過ぎなかつたのである。

今を距る百五十餘年前、寶曆十三年五月二十五日の夜、伊勢國飯高郡松坂中町なる新上屋の行燈の光は、かく相語つた老學者と若

(一) 眞淵の門人。坂大學の通稱。

人とを照らした。而もその仄暗い燈火は、わが國文學史の上に不滅の光を放つてゐるのである。（賀茂眞淵と本居宣長）

五　轡十文字

菊池寛

約の如く、その翌日を初とし、四人は平河町の良澤の家に、月五六回づつ相會した。良澤を除いた三人は、阿蘭陀文字の二十五字さへ、最初は定かには覺えて居なかつた。良澤は三人の人々に蘭語の手ほどきをした。彼は遠に長崎へ留學したことがあるだけに、多少の蘭語と、章句・語脈のことも少しは心得て居たけれども、それも殆ど云ふに足りなかつた。一月ばかり經つと、良澤が三人に教へることは、もう何も殘つて居なかつた。

三人の手ほどきが濟むと、四人は始めて、ターヘルアナトミアの書に向つたが、開卷第一の頁から、たゞ茫洋として、艪も舵もない船

(二) 文學者。京都帝國大學出身。
(三) 前野良澤。
(四) 杉田玄白・中川淳庵・小杉玄適。
(五) 人體解剖書。

の大洋に乘出した如く、何處からも手の附けやうがなく、あきれにあきれて居る外はなかつた。二三枚めくつた所に、あふのけに伏した人體全象の圖があつた。彼等は考へた。人體內景のことは知り難いが、表部外象のことは、その名所も一々知つて居ることであるから、圖に於ける符號と說明の中の符號とを合はせ考へることが、一番取附き易いことだと思つた。彼等は眉・口・唇・耳・腹・股・踵などに附いて居る符號を文章の中に探した。そして眉・口・唇などの言葉を、一つ一つ覺えて行つた。さうした單語だけは分つても前後の文句は、彼等の乏しい力では一向に解し兼ねた。一句一章を春の長き一日考へあかしても明らめられない事が屢〻あつた。四人が二日の間考へぬいて、やつと解いたのは「眉とは目の上に生じたる毛なり。」と云ふ一句だつたりした。四人はそのたわいもない文句に哄笑しながらも、銘々嬉し涙が眼の裡にじんで來るのを感ぜずには居られな

かつた。

眉から目と下つて鼻の所へ來たときに、四人は鼻とはフルヘッヘンドせしものなりと云ふ一句につき當つてしまつた。無論完全な辭書はなかつた。たゞ良澤が長崎から持歸つた小册子にフルヘッヘンドの譯註があつた。それは、「木の枝を斷ちたる迹、その迹フルヘッヘンドをなし、庭を掃除すれば、その塵土聚りてフルヘッヘンドをなす。」と云ふ文句だつた。四人はその譯註を引合はせても容易には解しかねた。

「フルヘッヘンド！フルヘッヘンド！」

四人は折々その言葉を口ずさみながら、巳の刻から申の刻まで考へぬいた。四人は目を見合はせたまゝ、一語も交へずに考へぬいた。申の刻を過ぎた頃に、玄白が躍り上るやうにして、その膝頭を叩いた。

「解せ申した解せ申した。方々斯樣で御座る。木の枝を斷り申した
る迹、癒え申せば堆くなるで御座らう。塵土聚れば、これも堆くなる
で御座らう。されば、鼻は面中に在りて堆起するもので御座れば、フ
ルヘッヘンドは、堆しと云ふことで御座らうぞ。」と云つた。
四人は手を拍つて欣び合つた。玄白の眼には涙が光つた。彼の喜
は連城の璧を獲るよりも勝つて居た。
彼等は難解の言葉に接する毎に、丸に十文字を引いて印とした。
それを轡十文字と呼んで居た。初め一年の間、どの頁にも、どの頁に
も、轡十文字が無數に散在した。が、彼等の先驅者としての勇猛精進
は、總べてを征服せずには居なかつた。一箇月六七回の定日を怠り
なく守つた甲斐はあつた。一年餘を過ぎた頃には、譯語の數も殖え、
章句の脈も明らかに、書中の轡十文字は殘少く搔消されて居た。先
驅者としての苦闘は、やがて先驅者のみが知る喜で酬いられて居

連城の璧　楚……下和
彬山　趙……夜光の玉
奏……十五の城と替へる様な事は
藺相如　趙

た。語句の末が明らかになるに從つて、次第に蔗を嚙ふが如く、その
中に含まれた先人未知の眞理の甘味が、彼等の心に浸附いて居た。
彼等は、邦人未到の學問の沃土に彼等のみ足を踏入れ得る喜で、會
集の期日毎に、兒女子の祭見に行く心地で、夜の明けるのを待兼ね
る程になつて居た。（蘭學事始）

【國語讀本卷十一、十二「畫師の苦心」參照。】
* 名は里恭。大和郡山藩士。繪畫をよくす。寶曆八年歿、年五十六。

六　畫師の苦心

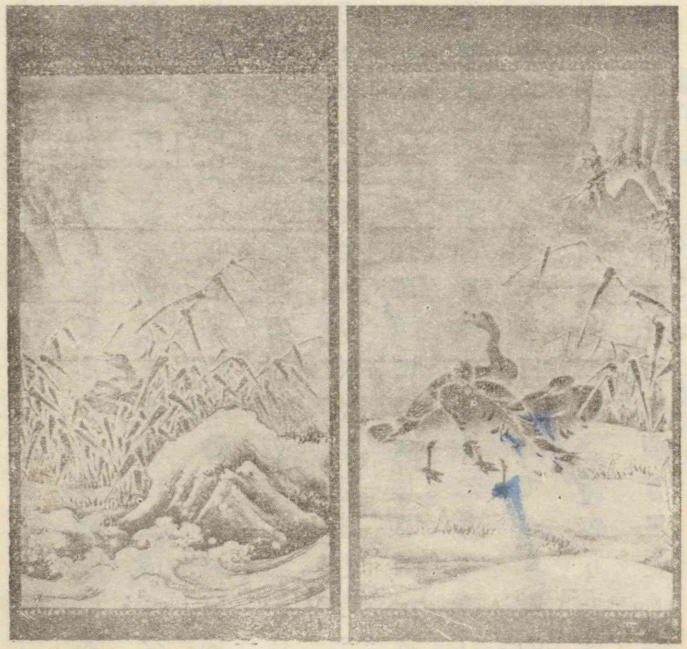
柳澤淇園*

ある人予がもとに來りて、繪に魂を入るゝと申すことは、いかや
うなることをして畫き侍れば、魂は入り候ことぞ。」と問ふ。予答へて
云ふ。「すべて繪にはかぎらず、何ごとにても實心をこめてだに致さ
ば、魂の入らずといふ物あるべからず。他のことはいさ知らず、繪に
魂の入りたりと思ふは、諸國に種々名畫も多かる中に、我が見し泉
州堺の一國寺と云ふ精舍の畫なり。この寺には千の利休もしばら

く居られしことありて、物好きを盡くしたる庭園座敷五間ほどもあり。一間には檜の木一樹をゑがき、一間には臥したる鶴二十五羽ばかりをゑがきてあり。いづれも彩色ありて、古法眼元信の筆といひ傳へたり。

狩野元信

そのかみ此の繪をゑがける畫師、この寺に寓居すること三年ばかりの中に、何一つゑがきたることなく、碁を好みて、只それのみ日毎の樂しみとして、あるはこゝかしこ遊びあるくに、はやく三とせを經たり。一たびだに筆を取りしこともなきはいかにも心得ざる者かなと思ひて、ある時住持の申されけるは、「その許畫をもて一家をなせりといひながら筆を取りたることもなく、圍碁にのみ年月を過ぐさるゝはいかに。われ衣食の費えを厭ふにはあらねど、何處へなりとも遊び給へ。愚老も所用ありて京へのぼり、ことによりては一年も在京せんもはかりがたし。」といふに、彼の畫師聞きて、「それこそいと名殘をしきことに候へ。さあらば年來の謝恩に、何か少しの畫をのこしまゐらすべし。」とて、心がまへのみにて又四五日ほど經るに、住持は何をゑがくと見たくて待てども、絶えて筆をとらず。ある夜小坊主の、住持が居間に夜更けて來り、ひそかに申すやう、「かしこに行き給ひて、そと覗きて畫師のありさまを見給へ。」とさゝやきけるに、やがて小坊主にいざなはは



狩野元信筆

れて畫師が居間をうかゞふに、明障子の腰板に身をよせて、さまざまに姿をかへつゝ寢起するありさまを見るより、小坊主を引きよせ、『こよかし。覗くべからず。はやく臥せよ。』とて、その身も寢間に入りたり。明くれば畫師まだきに起きいで、一間なる障子にゑがくを見れば、みな臥したる鶴なり。畫勢不凡にして、丹精の妙いふべからず。

さあるに、又の夜はいかにとうかゞふに、前のごとく夜もすがら寢ずして、明けなばかくやゑがかんとやせんかくやあらましなど、獨りつぶやきつゝ臥しぬれば、住持も知らぬ顏にて過ししが、十日あまりにしてその鶴およそ二十四五羽をゑがけり。またも夜更けて覗き見るに、こたびは肘をはり足をのべ、手を口にあてつゝ鶴の臥したるさまをなせり。夜明けて彼の畫師がもとに、住持來りて、『けふゑがき給ふ鶴の姿はかやうにやあるべき。』と、よべ覗き見たる姿のさまして見せければ、打驚き、禪師には我がゑがかんと思ひ構へし

心をはやくも悟り給ふは、いかにして知り給へるにか。』と問ふに、『いやとよ、昨夜そのもとの樣子を、そとうかゞひて知りたり。』といへば、畫師それよりして二枚はゑがかずして、杉戸の畫に檜の木一樹をゑがきていで立ちぬるとぞ。

この檜の木をゑがきし後、東國へ下向の折から、東海道箱根の山中にて檜の木の枝の心にかなひたるがありければ、東國へは下らずして再び泉州一國寺へ立越えしかば、住持見て大におどろき、『東國へ行き給ふと聞きしに、又もや來られしはいかなることにか。』といふに、『さきにゑがきし檜の木の枝一枝足らぬところあり。箱根にてその意を得たれば、わざ〳〵立ちもどりたり。』とて、一枝をかきそへ、いとまごひしていで去りぬとぞ。畫に魂を入るゝといへるは、かかるたぐひと思ひぬ。』といへば、ある人も感じてかへりぬ。

（雲萍雜志）

【國語讀本卷十、九、「陶工柿右衛門」參照。】

(一) 酒井田氏。江戸時代初期の人。有田燒の錦彩磁器を發明す。

(二) 本名は源次郎。文學者。早稲田大學講師。

(三) 支那畫の一派。

七　名工柿右衛門の村を訪ふ

吉田絃二郎

長崎線の有田驛に下りたのは朝の九時過でありました。そゝり立つた岩山と岩山の懷につゝまれたやうな古い町は、まだ岩山のために日光を遮られてゐるので、何となしに、濕つぽい空氣が低い軒のあたりに漂つてゐるやうな感じがしました。

迫つた山と山との間を縫つて、狹い川が谿をなして流れてゐます。川床が細かな白い砂であるためかして、一つ一つの小石でも數へられるほど水は澄んでゐました。黑い岩山の上には、赤松が恰も繪のやうな恰好に矗々と聳えて繁つてゐました。

此の町を取圍んでゐる黝ずんだ岩山や松や流の具合はどう見ても南畫式だと思ひます。京都附近の、あの美しい曲線を描いた女性的な山の形が光琳風なのに對して此の附近の山や水はいかにも簡勁な墨繪を聯想させます。私は有田町の香蘭社に行つて花瓶などを購つてから、香蘭社の人に柿右衛門の家を訊ねました。

(四) 尾形光琳を祖とする畫風。

(五) 有田燒の輸出品を量に製造する會社。

「有田町の南の町外れから左に行けば、大村・長崎道になりますから、そつちに曲らないやうに、どこ〳〵までも眞直においでなさい。南川原と云ふ山の中のごく小仕掛の家です。」といつて敎へてくれた香蘭社の人の言葉を思ひ出しながら、私は有田の町を南の方へ下つて行きました。

私はまだ中學時代に、此の町に一度泊つたことがあつたので、其の時泊つた古風な旅籠屋を想ひ出しながら、それらしい家を見て歩きましたが、どう〳〵探し出すことはできませんでした。ちよつと寂しいやうな氣もしました。

黑い岩山の懷には段々になつた畑があつて、畑の周圍には櫨紅

葉や柿の葉が紅く燃えてゐました。緩い勾配の丘には古い墓地があつて、そこには大抵白い山茶花が咲いてゐました。町はづれの掛茶屋に腰を卸して南川原へ行く道を訊ねました。

丁度收穫の時ですから、店の前には、稻扱器械を買つて荷車に積んで行く夫婦の若い百姓が憩うてゐたりしました。日はかん〳〵とまるで夏のやうに烈しく道に照りかへしてゐました。陶土が白く道の面を埋めてゐますので、ともすれば眩くてたまらないやうなこともありました。

道は右手に岩山の黑髪山を眺めて、西ケ岳だの國見峠だのいふ、高い樹の繁つた山の下を伊萬里の方へ坦々として走つてゐるのでした。どの田にもどの田にも、若い男や女たちが稻をこいたり、連枷で稻を打つたりしてゐました。空はどこまでも秋らしく澄んでゐました。

私は此の道を小學時代に七八人の友人と夜どほし伊萬里まで歩いて行つたことがありました。其の時は霧が一面に山も川の面もつゝんでゐました。二十三夜ごろの月が光を投げてゐたこともまだ記憶してゐます。黑髪山を右に見ながら、私は西の方へ白い道を歩いて行きました。黑く繁つた山の腰には紅葉がちらほらと見えました。

私は柿右衛門が錦彩の色を工夫しながら、秋になれば此のあたりの山の色や柿の色をつく〳〵と感に打たれて眺めてゐたであらうなどと想ひながら、美しい白い流に沿うた道を歩いて行きました。

黑髪山には傳說が殘つてゐます。昔、鎭西八郎が此の附近の豪族の邸に身を寄せてゐた頃、黑髪山の大蛇を射殺したといふことです。其の傳說を語つてくれた先生は黑髪山の麓の人でありました

が、先生は其の後ハルピンの方へ行つて居られるといふことを、去年小學時代の友人達と始めてクラス會を東京で開いた時聞きました。

私は其の先生のことなどを思ひ浮かべながら、埃の多い道を歩いてゐる間に、鐵道線路を踏切つて、なほ伊萬里の方へずん〳〵歩いてゐました。私は五六歩先に歩いてゐる籠をかついだ女に南川原への道を訊ねました。

私は南川原へ行く道を、既に可なり遠く通り過ぎてしまつてゐたのでした。

再び鐵道線路まで立歸つて、それから南の方へ小さな山道にはひると、そこに古い石の道標があつてそれには南川原道といふ文字がおぼろげに讀まれるのでした。

道は緩勾配をなして、低い小山と小山との間を登つて行くのでした。こゝにも美しい小川がせゝらぎの音をなして流れてゐました。小川に沿うて草葺の小舍があつて、そこには水車ではないが、小川の水を受けて陶土を搗く仕掛がしてあるのでした。ざあつと水が落ちるたんびに、どしんと小春日和の長閑な感じを喚び起すやうな杵の音が聞えて來るのでした。私はちよつと伊豆の修善寺あたりの山里を聯想しました。恐らく柿右衛門が使つた陶土も此の小川の水で搗かれたのでせう。また此の小川の縁に、彼は幾度か呆然として立竦んでゐたこともあつたでせう。

どこも畑や家のまはりには、丁度赤く熟した柿の實がたわゝになつてゐました。柿右衛門だの澁右衛門だのといふ名が出て來たのも、極めて自然なことのやうに思はれます。

極めて平凡な小山につゝまれた、極めて平和な感じを抱かせられる山里が、名工柿右衛門の南川原といふ村です。

赤い柿の實につゝまれた秋の村には、二十戸か三十戸ぐらゐの古びた家が、爪先上りの道に沿うて一かたまりになつて集つてゐます。家々の前には美しい小川が、溝ぐらゐの大きさになつて流れてゐます。大抵は農家だと見えて、稻などが土間にも庭にも一面に干してありました。柿のほかには、或古い家の庭に美しい石榴が塀の外に枝を垂れてゐるのを見ました。

大抵は同じ家から出たものか、同じ姓の家が幾軒も幾軒も並んでゐました。

「柿右衞門の家は……。」と、私は乳を飲ませてゐた百姓のおかみさんに訊ねました。

「柿右衞門さんの家ですかんた。」と言つて、若い女は山の上を指して見せました。

此の山里の村の一番高地にある家が、柿右衞門の屋敷でした。黑い垣根があつたり、硝子窓の長い新しい建物が鍵形に並んでゐたりしてゐるのは、ちよつと小學校といふ感じを與へました。

門の突當りには昔風の隨分大きな構の家がありました。私はそこに這入つて行つて、主婦らしい三十ばかりの女の人に、名刺を出して來意を告げました。廣い土間一面に、皿だの鉢だの、白い土のままの磁器が列べられてゐました。大きな柱も天井も、餘程古い時代に建てられたまゝだと見えて、黑く煤けてゐました。

若い女は子供を抱いたまゝ、私の名刺を握つて門の外へ走つて行きました。

私は其の間、庭に出てあたりを見ました。表座敷の右手寄りには倉があつて、倉の前には一本の柿があります。小春日和の日光を浴びた柿の木には、枝も垂れるくらゐに赤い柿の實がなつてゐました。私は後に聞いたのでしたが、それが柿右衞門と最もゆかりの深

い柿の木であつたのでした。柿の木の傍には碑がありました。それには柿右衛門が元和三年、豐公の臣高原五郎七に京燒の方法を傳授せられたこと、京燒の質の脆弱なのを不滿に思つて、色々な工夫をしたこと、正保三年苦心の後錦彩磁器を發明したことなどが記されてありました。

蛇が多いと見えて、碑の下に黑い蛇がのたくつてゐました。碑の前には口を裂かれたまゝの蛇が一匹死んでゐました。間もなく品のよい若い男が見えましたが、「折角お出で下されましたが、主人が他出中で、何分詳しいことは私には分りませんが。」と言つて工場の方へ案内してくれました。なるほど廣い仕事場の中はがらんとしてゐて、たゞ二三人の男が白い土を捏ねたり、土を入れた水甕を搔きまはしたりしてゐました。

疊を敷いた隅の部屋では、二三人の女が筆を握つて繪を書いてゐました。そのすぐ傍では蒼い顏色の男が轆轤を廻して壺のやうなものを拵へてゐました。

「あの柿の木の下でお考へになつたさうです、幾年も幾年も。」

柿の木さへ時が來ればあのやうに色づくのに、どうして人間の力で燒物に赤い色が附けられないだらうかと、其の事ばかりお考へになりましたさうで。」

と言つて、若い男は仕事場の窓から表座敷の前の柿の木を指さして見せました。

赤く熟した柿の木の實の下に終日默々としてゐた名匠の俤を、

錦彩磁器（柿右衛門作）

(一) Leonardo, da Vinci 伊太利の畫家・彫刻家・建築家。(一四五二―一五一九)

私は描いて見ました。私の心には、神の力に對して人間の力を試みようとしたレオナルド、ダ、ヴインチの事が想ひ出されました。

赤い實のなつて居る柿の木の下には、小犬がけだるさうに秋の陽を浴びて眠つてゐました。

私は小さな盃を手に取つて見ました。燃えるやうな朱の色が美しく、白い盃の底に輝いてゐました。私は庭の土竈と柿の實とを見比べました。私は土竈を開いて呆然として涙ぐみながら佇んで居た柿右衛門の姿を想像しました。次の刹那に、私は一枚の磁器を抱へて狂喜しつゝ廣い庭の中を飛びまはつた柿右衛門の姿を想像しました。その折の彼の喜の聲がそこいらの建物の間に、まだ響いてゐるやうにさへ思はれるのでした。

盃の底に描かれた小さな花の朱の色を見つめてゐる間に、私は涙ぐましいやうな敬虔な心にならずには居られませんでした。

隱れたる山里に苦しみ惱んでゐた恩惠者、それはたゞ、一條の朱の色を磁器の面に刻みつけるだけの發明であつた。併しそれはいかにも多くの苦惱に値する仕事でありました。彼は少くとも私たちの世界に、美の要素を一つ多く殖してくれたのでした。

人間の世界の美、人間の世界の幸福は、いつでも此のやうな隱れた苦惱者によりて與へられるといふことを、私は尊い心を抱いて考へずには居れませんでした。

柿右衛門が實際に住んでゐた家は、現在の家の裏でやゝ上手の丘の上にあつたといふことでした。今では木が一面に繁つてゐます。其の頃は今の座敷の前の、例の柿の木と松の木との間に土竈があつたといふことです。松もやはり當時からあつたのださうですが、可なり大きな松です。

その松の下では鑄掛屋が頻りと鑄掛けをしてゐました。奥の座

敷で茶でも飲んで行つてくれるやうにと頻りに勸められましたが、何分汽車の時間が氣がかりになつて仕方がなかつたものですから、茶も飲まないで歸ることにしました。柿右衞門の遺物でもあつたら見せて貰はうと思つてゐましたが、時間がないので、それも果さず歸路につきました。

柿右衞門の墓は上の山と下の山にあるさうですが、初代の柿右衞門の墓は下の山にあるといふことを聞きましたので、山を下ることにしました。門を出る時、例の柿の葉があまり美しく紅葉してゐましたので、せめて一枚の葉でもと思つて所望しましたら、家の人は大きな柿の實が二つ附いた枝を手折つてくれました。

門を出てから私は再び同じ道を下つて、蕎麥畑の間を通りながら、村の小娘や畑の中に働いてゐる男たちに訊ねて見ましたが、柿右衞門の墓は見當りませんでした。

振りかへつて見ると、北も南も緩やかな傾斜の秋の小山につゝまれた南川原は、ほんたうに平和な感じをあたへました。東には高い木の繁つた山が聳え、西の一方だけが開いて、そこからは遙かに伊萬里の背後の山が靑く煙つてゐるのが見えました。

そこには富豪らしい大きな邸もなく、又貧家らしい小さな家も見えません。どれもこれも同じくらゐの大きさの農家が、平和な谿の懷に、黃金のやうな柿の實につゝまれて、怠惰な日向ぼつこをしてゐるやうに思はれました。

學校から歸つて行く子供たちの顏は、大抵整つた正しい輪廓を持つてゐました。

私は丘の上の墓場に上つて行きました。そこには御堂があつて、胸に茜木綿の涎掛を掛けた地藏尊の像が一基立つてゐました。隣の堂には、葬の折に村の人たちが使ふ輿がしまつてありました。

私はしばらくその堂のまはりを探して歩きましたが、酒井田柿右衛門の墓らしい墓は、どうも見出しませんでした。小さな龕のやうな形の墓があつて、其の墓の上や周圍には、眞白な陶土の粉が振りかけられてありましたが、或はそれが名工の墓であつたかも知れません。

ともかく汽車の時間が切迫して來たので、私はそこ〳〵にして墓地の横から粟畑に出ました。そして其處に粟を刈つてゐる老人に今一度柿右衛門の墓を訊ねて見ましたが、「柿右衛門さんのお墓は上の山にあります。」と言ひました。私はつひに名工の墓を見ずに歸つて來ました。

伊萬里街道に出てから、私は南川原の東の方に聳えてゐる美しい山の名を學校歸りの子供に訊ねて見ました。

「あの山はなんごらんやま。」といふやうに聞えましたので、「どう書

くの。」と訊ねましたが、少年は含羞みながら笑つて駈けて行つてしまひました。（麥の丘）

八　鬼作左

（一）新井白石

作左衛門重次生年七歳にて贈大納言家に仕へまゐらせしより、徳川殿の御時に至つて、度々の高名數を知らず。永祿八年三河國盡く御手に屬しければ、この年三月七日、始めて奉行職を置かれ、本多重次・高力與左衛門清長・天野三郎兵衛康景三人に仰せて、その職を掌らしめらる。此の時三河國にて、歌に「佛高力・鬼作左・ごちへんなしの天野三郎兵衛。」と謠ふ。重次は恐しげなる男の、己がいひたきことをばありのまゝに打言ひ、いかにも思慮あるべき人とも見えず、かかる職務に堪ふべきものにあらずと見えしに、心正しく、直く、しかも民を使ふに慮ありて、訟を聽分つこと明らかなりしかば、人皆德

（一）名は君美。德川家宣に仕へて輔翼の功多し。享保十年歿、年六十九。
（二）本多氏。
（三）德川廣忠。家康の父。
（四）家康。
（五）正親町天皇の御代の年號。

川殿の御計ひを感じまゐらせしとなり。

天正十二年小牧の役あり。やがて秀吉信雄仲直りし給ひ、信雄について於義丸殿を養君とし給ふ時、重次が子仙千代丸も石川伯耆守數正が子と同じく附けて參らす。抑此の於義丸殿と申すは、徳川殿の御二男、故ありて生れ落ちさせ給ひしより、重次とりて養ひ參らす。此の年御歳十一になり給ふが、都に上らせ給ふことを御名殘惜しく思ひしかば、我が獨子にて愛しける仙千代丸附けて參らせたり。秀吉も上には於義丸殿を養ひ參らするとは披露あれど、内々は人質とし、徳川殿に親しくならん謀にてありければ、「本多は殊に彼の家譜代のおとなり。其の子を參らせしことこそ嬉しけれ。」と悦び給ふこと斜ならず。さるほどに、秀吉正二位内大臣に歴上り、關白の職になつて、於義丸殿にも元服せさせ、秀康と名告らせ、從四位下左少將三河守に任じ、信雄卿を媒とし、徳川殿御上洛のことを勸

(一) 正親町天皇の御代の年號。
(二) 尾張國東春日井郡。
(三) 織田信長の次子。
(四) 秀康の幼名。
(五) 徳川家の世臣。

め給ふこと度々に及べども、上り給ふべしとも聞えず。よつて三河守殿も失はれさせ給ふべしなど風聞す。三河守殿の御母此の事を聞き給ひ、「守殿失はれ給ひて後、一日も世に長らふべしとも覺えず。死なば一所にこそ死なめ。」とて、忍びて大阪に上らせ給ふ。

重次、いや〳〵、仙千代丸都におきて人の疑受けんことも詮なし。たゞ一人ある子失はれんも不便なり。」と思ひければ、「母がいたはりの外に候。暫しの暇を賜はりて、此の世の暇乞をも仕らせばや。」と、守殿へ申して呼び迎へぬ。幾程なく、石川伯耆守數正は徳川殿に背きて、秀吉の御方に參る。さてこそ重次が二心なきところ顯れて、まことに思慮深くは見えけれ。

かくて關白殿の仰にて、「仙千代丸疾く參らすべし。」と、守殿よりの御使度々に及ぶ。重次もせんかたなく、「これもいたはるところの候。且は母が病も、年頃此の子戀ひ慕ひし故なれば、「今更參らすべしと

も覺えず。』と伏沈み歎きぬ。されば息男が身代りに、このもの參らする。」とて甥の源四郎富正を參らす。關白殿「安からぬことなり。本多奴に誑られたりけり。」と怒り給ふこと大方ならず。

かゝりしほどに、また東西の軍起りなんと聞えて宗徒の御家人の中、岡崎(一)の城守るべきものを選ばる。本多佐渡守正信承りて「此の城を枕として討死仕るべきものに仰付けらるべし。」と申しければ、やがて重次召して、岡崎の城を賜はり、數百騎の兵を屬けらる。此の時重次が御暇乞申しし氣色、生きて再び見參すべしとも見えざれば、其の志を感ぜさせ給ひて、息男成重本領安堵の御書をなし下さる。其の御書に「天正十三年十二月八日。」と記され、(二)本多丹下殿へ。」とされけるとなり。

關白殿、いかにもして德川殿と親しうならんと、いろ〳〵に謀をめぐらし、やがてまた其の妹(三)君を德川殿の北の方に參らせられし

(一) 本多氏の城下。
(二) 成重の通稱。
(三) 朝日姫。後に南明院といふ。

かば、德川殿、此の上は見參なくては叶ふまじとて、御上洛あるべきに極る。「御家人等が危く思はんところも侍る故、都に御逗留あらんほどは、それに留めさせ給ふべし。」とて、大廳(四)を下し給ひしかば、岡崎の城に入れ參らせ、重次これを守る。井伊・大久保(五)も同じく御後に留る。

此の時重次下知して、大廳のおはしますほとりに薪を積むこと山の如し。こはそもいかなることぞと驚き、大廳の御供せし女房達、はした女して薪積む下男一人招き、酒など飲ませ、心よくとりて、さて何事にか、このほど日々にかく薪をば積むことぞ。」と問へば「いかなることも下郎はいかで知り申さん。たゞし承るところは、『關白殿の我が國の殿を失ひ給ふか、もしくは留め參らせて返し給はずば、今度都より御下りありて、これにまします御方を盡く燒殺し申さん料の薪。』とかや申して、本多殿の下知として、日々に山林より伐

(四) 秀吉の母なさす。
(五) 名は直政。
(六) 名は忠世。

りて候が、此の本多殿と申すは極めて氣の短き人にて、殿の御歸遲し遲しと待ちかねて、けさ火を附けう、晩に燒きたてうとせられ候を、井伊殿や大久保殿が暫し暫しと制し給へばこそ、今まではかくて候へ。『いたはしや、美しき都上臈の、今の內にも灰土にならせ給はんことの無慙さよ。』と、下郎等は申すことにて候。」といひしを、女房達にかくといへば、「あな悲しや。其の本多といふ男が日々に參りて、恐しげなるこわねにて、『家康よりこゝに附け參らせて候。御用のことあらば承りなんず。』といふを、今思ひ合はすれば、三河守殿の始めて御參りありし時、仙千代丸といふ兒の御供したるを、殿下の御覽じて、『あれは家康が內にて三奉行とかいふ中の鬼作左衞門といふものの子ぞ。』と仰ありしかば、『恐し恐し。鬼も子を生むにや。鬼の子はいかなるものにや。』とて、物越しに人々の見たりしに、其の親の鬼ならばさこそあらめ。さればこそこれへ參る度毎に、『家康歸り候はんと

のことは、未だ御沙汰も聞え候はずや。』と、をこゝひもいひしぞ。昨日も今朝もいひしぞ。待遠にや思ふらん。あはれ、家康疾くして返させ給へかし。」と、泣き口說きて此の由を大廳へ申しければ、大に驚き給ひて、日々に御消息ありて、「德川殿を疾く返させ給へ。こなたの有樣のいぶせさ、いつの世にかは忘るべき。」など、ありしことどもこまごまと仰せ遣はされしほどに、程なく御歸國まし〳〵、大廳歸り上らせ給ひければ、女房達涙を流し、「情なくも御母上を下し給ひしものかな。鬼本多とかやが、かくこそ云うたれ、とこそ計らうて候ひつれ。今は朝日の姫君を參らせ給へば、德川殿の御爲にも大廳は御母上にて候を、いかに鬼なればとて、己が主のこと知らぬことや候べき。それにかく辛き目を見せ參らせて侍れば、はや〳〵德川殿に仰せられて、いかなる罪にもあはせて、大廳の御恨をも晴させ給へ。」と、とり〴〵に訴へければ、關白殿笑はせ給ひて、「家康はよきものども數

多召使ひけり。秀吉も其の如き家人をば欲しきことに候ぞや。」とばかり宣ひて、御座を立たせ給ひしとなり。（藩翰譜）

九　森の繪

吉村冬彦*

※本名は寺田寅彦。東京帝國大學教授。理學博士。

暖い縁に背を丸くして横になる。小枝の先に散り殘つた枯れ枯れの紅葉が目に見えぬ風にふるへ、時に蠅のやうな小さい蟲が小春の日光を浴びて垣根の日陰を斜に閃く。眩しくなつた眼を室内へ移して鴨居を見ると、こゝにも初冬の「森の繪」の額が薄ら寒く懸つて居る。

中景の右の方は槲（カシ）か何かの森で、灰色をした逞しい大きな幹はすく〳〵と立並んで、次第に暗い奥の方へつゞく。隙間もない茂みの緑は霜に稍寂びて、えも云はぬ色彩が梢から梢へと柔らかに移り變つて居る。コバルトの空には玉子色の綿雲が流れて、遠景の廣

遠景
中景
近景

野の果の丘陵に紫の影を落す。森のはづれから近景へかけて石ころの多い小徑がうねつて出る處を、橙色の服を着た豆大の人が長い棒を杖にし、前に五六頭の牛羊を追うてとぼ〳〵出て來る。近景には低い灌木が所々茂つて、中には箒の樣な枝に枯葉が僅かにくつ附いて居るのもある。あちらこちらに切倒された大木の下から、眞青な羊齒の鋸葉が覗いて居る。

寧ろ平凡な畫題で、作者もわからぬ。自分は此の繪を見る度に靜かな田舍の空氣が畫面から流れ出て、森の香は薫り、鶫（ツグミ）の叫を聞くやうな氣がする。その外にまだ、なんだか胸に響く樣な鋭い喜と悲の念が湧いて來る。

二十年前の我が家のすぐ隣は叔父の屋敷、從兄の信さんの宅であつた。裏畑の竹藪の中の小徑から我が家と往來が出來て、垣の向から熟柿が覗けば、こちらから烏瓜が笑ふ。藪の中に一本、大きな赤

椿があつて、鵯の渡る頃は、落ち散る花を笹の枝に貫いて戰遊びの陣屋を飾つた。木の空に「はご」を仕掛けて鵯を捕つた事もある。

叔父の家は富んで、奥座敷などは二十疊もあつたらう。美しい毛氈がいつでも敷いてあつて欄間に木彫の龍の眼が光つて居た。

いつか信さんの部屋へ遊びに行つた時、見馴れぬ繪の額がかゝつて居た。何だと聞いたら油畫だと云つた。其の頃田舍では石版刷の油繪は珍しかつたので、西洋畫と云へば學校の臨畫帖より外には見たことのない眼に、始めて此の油畫を見た時の愉快な感じは忘られぬ。畫は矢張田舍の風景で、ゆるやかな流の岸に水車小屋があつて、柳のやうな木の下に、白い頭巾をかぶつた女が家鴨に餌か何かやつて居る。何處で買つたかと聞いたら、町の新店にこんな繪や、もつと大きな美しいのが澤山に來て居る、ナポレオンの戰爭の繪があつて、それも欲しかつたと云ふ。

家へ歸つて夕飯の膳についても、繪の事が心をはなれぬ。黄昏に袖無を羽織つて、母上と裏の垣根で寒竹筍を拔きながらも、繪の事を思つて居た。その夜薄暗いランプの光で寒竹の皮をむきながら美しい繪を思ひ浮かべて、淋しい母の横顔を見て居たら、急に心細い樣な氣が胸に吹入つて、睫毛に涙がにじんだ。何故泣くかと母に聞かれて、なほ悲しかつた。そんなに欲しくば買つて上げる。男の癖にそんな事ではと諭されて、更にしやくり上げた。母は蟲抑への藥を取出して呑ませてくれたが、あの時の自分の心は、今でも說明は出來ぬ。幼く片親の手一つに育つて餘り豐かでない生活が朧げに胸にしみ、浮世の木枯はもう周圍に迫つて居たから、何かの刺戟はすぐに譯のわからぬ悲しみを誘うたのだ。

あくる日錢を貰うて、先づ學校へ行つたが、教場でも時々繪の事に心を奪はれ、先生に何か聞かれても何を聞かれたか分らぬ樣な

事もあつた。放課のベルを待兼ねて學校を跳び出し、信さんに教はつた新店を尋ねたらすぐにわかつた。店へ這入ると、一面に吊した繪のニスの香に醉うてしまふ。あれも好い。これも氣に入つた。鍛冶屋の煙突から吹出る眞赤な焔が黑い樹に映えて、遠い森の上に青い月が出て居る繪も欲しかつた。が、何となく靜かな此の「森の繪」にきめた。粗末な額緣をはめて貰つて、其の上を大事に新聞で包んで店を出た時は、心臟が高い音を立てて踊つて居た。

歸り途に舊城の後を通つた。御城の杉の梢は丁度此の繪と同じ樣な寂びた色をして居て、お濠の石崖の上には葉をふるうた椋の大木が、枯菰の中の冷たい水に影を落して居る。濠に隣つた牧牛舍の柵の中には親牛と小牛が四五頭、愉快さうにからだを横にゆすつてはねて居る。自分もなんだか嬉しくなつて、口笛をピュッ〳〵と鳴らしながら飛ぶやうにして歸つた。

森の繪が引出す記憶には限りがない。竪一尺横一尺五寸の粗末な額緣の中には、あらゆる幼時の美しい幻が疊み込まれて居て折にふれては畫面に浮かび出る。現世の故郷はうつり變つても、畫の中に寫る二十年の昔はさながらに美しい。外の記憶がうすれて來る程、森の繪の記憶は鮮かになつて來る。

他鄕に漂浪しても、此の繪だけは捨てずに持つて來た。額緣も古ぼけ紙も大分煤けたやうだが、「森の繪」はいつでも新しい。（藪柑子集）

一〇　山鳴

芥川龍之介

千八百八十年五月何日かの日暮れ方である。二年ぶりにヤスナヤ、ポリヤナを訪れたイワン・ツルゲネフは、主のトルストイ伯爵と一緒に、ヴァロンカ川の向の雜木林へ、山鳴を打ちに出かけて行つた。

（一）文學者。東京帝國大學文科大學出身。

（二）Ivan Turgenjew　露西亞の小說家。（一八一八―一八八三）

（三）トルストイ　白樺派の人々

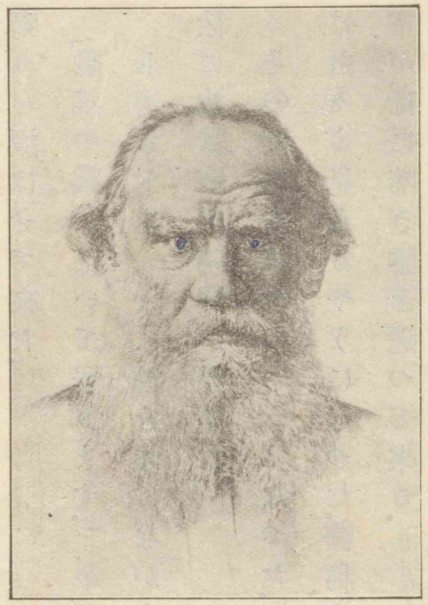
Leo N. Tolstoj 露西亞の文學者。（一八二八—一九一〇）

鳴打ちの一行には、この二人の翁の外にも、まだ若々しさの失せないトルストイ夫人や、犬をつれて子供たちが加つてゐた。

ヴァロンカ川へ出るまでの路は、大抵麥畑の中を通つてゐた。日没と共に生じた微風は、その麥の葉を渡りながら、靜かに土の匂を運んで來た。トルストイは銃を肩にしながら、誰よりも先に歩いて行つた。さうして時々後を向いては、トルストイ夫人と歩いてゐるツルゲネフに話しかけた。その度に「父と子と」の作家は、やゝ驚いたやうに眼を擧げながら、嬉しさうに滑らかな返事をした。時によると、又幅の廣い肩を搖すつて、嗄れた笑ひ聲を洩す事もあつた。

ツルゲネフ

その内に一行はヴァロンカ川を渡つて、鳴打ちの場所へ辿り着いた。其處は川から遠くない、雜木林が疎らになつた、濕氣の多い草地だつた。



トルストイ

トルストイはツルゲネフに最も好い打ち場を讓つた。そして彼自身は、その打ち場から百五十歩ばかりの、遠のいた草地の一隅に位置を定めた。それからトルストイ夫人はツルゲネフの側に、子供たちは彼等のずつと後に、各〻分れてゐる事になつた。

空はまだ赤らんでゐた。その空を絡つた木々の梢が、一面にぼん

やり煙つてゐるのは、もう匂の高い若芽が簇つてゐるのに違なかつた。ツルゲネフは銃を提げたなり、透かすやうに木々の間を眺めた。薄明るい林の中からは、時々風とは云へぬ程の風が、氣輕さうな囀りを漂はせて來た。

「駒鳥や鶸が啼いて居ります。」

トルストイ夫人は首を傾けながら、獨り言のやうに、かう云つた。

徐に沈默の半時間が過ぎた。

その間に空は水のやうになつた。同時に遠近の樺の幹が、それだけ白々と見えるやうになつた。駒鳥や鶸の聲の代りに、今は唯五十雀が、稀に啼き聲を送つて來る。——ツルゲネフはもう一度、疎らな木々の中を透かして見た。が、今度は林の奥も、あらかた夕暗に沈んでゐた。

この時一發の銃聲が、突然林間に響き渡つた。後に待つてゐた子供たちは、その反響がまだ消えない内に、犬と先を爭ひながら、獲物を拾ひに駈けて行つた。

「御主人に先を越されました。」

ツルゲネフは微笑しながら、トルストイ夫人を振返つた。

やがて二男のイリアが母の所へ、草の中を走つて來た。さうしてトルストイの射止めたのは山鳴だと云ふ報告をした。

ツルゲネフは口を挾んだ。

「誰が見つけました？」

「ドオラ*が見つけたのです。——見つけた時は、まだ生きてゐましたよ。」

イリアは又母の方を向くと、健康さうな頰を火照らせながら、その山鳴が見つかつた時の一部始終を話して聞かせた。

ツルゲネフの空想には、「獵人日記」の一章のやうな、小品の光景が

* 犬の名。

ちらりと浮かんだ。

イリアが歸つて行つた後は、又元の通り靜かになつた。薄暗い林の奥からは、春らしい若芽の匂だの、濕つた土の匂だのが、しつとりとあたりへ溢れて來た。その中に何か眠さうな鳥が、時たま遠くに啼く聲がした。

「あれは――？」

「縞蒿雀です。」

ツルゲネフはすぐに返事をした。

縞蒿雀は忽ち啼きやんだ。それぎり少時は夕影の木々に、ぽつたり囀りが途絶えてしまつた。空は、――微風さへ全然落ちた空は、その生氣のない林の上に、だん〳〵蒼い色を沈めて來る、――と思ふと、鳧が一羽、寂しい聲を飛ばせながら、頭の上を翔けて通つた。

再び一發の銃聲が林間の寂寞を破つたのは、それから一時間も

後の事だつた。

「レオ、ニコラエヰッチは鳴打ちでもやはり私を負かしさうです。」

ツルゲネフは眼だけ笑ひながら、ちよいと肩を聳やかせた。

子供たちが皆駈けだした音、ドオラが時々吠えたてる聲、――それがもう一度靜まつた時は、既に冷やかな星の光が、默々と空に散らばつてゐた。林も今は見廻す限り、ひつそりと夜を封じた儘、枝一つ動かす景色もなかつた。二十分、三十分、――退屈な時が過ぎると共に、その暮れ盡くした濕地の上には、何處か薄明るい春の靄が、ぼんやり足もとへ這寄り始めた。が、彼等のゐるまはりへは、未だ一羽も鳴らしい鳥は現れるけはひが見えなかつた。

「今日はどう致しましたかしら。」

トルストイ夫人の呟きには、氣の毒さうな調子も交つてゐた。

「こんなことは滅多にないのでございますけれども、……」

＊Leo Nikolaievich トルストイの名。

「奥さん、お聞きなさい。夜鶯が啼いてゐます。」

ツルゲネフは、殊更に縁のない方面へ話題を移した。

暗い林の奥からは、實際もう夜鶯が朗かな聲を漂はせて來た。二人は少時默然と、別々の事を考へながら、ぢつとその聲に聞入つてゐた。……

すると急に、――ツルゲネフ自身の言葉を借りれば、「しかしこの『急に』がわかるものは、唯獵人ばかりである。」――急に向の草の中から紛れやうのない啼き聲と共に、一羽の山鳴が舞上つた。山鳴は枝垂れた木々の間に、薄白い羽裏を閃かせながら、すぐに宵暗へ消えようとする、――ツルゲネフはその瞬間、銃を肩に當てるが早いか、器用にぐいと引金を引いた。

一抹の煙と短い火と、――銃聲は靜かな林の奥へ、長い反響を轟かせた。

「中つたかね？」

トルストイはこちらへ歩み寄りながら、聲高に彼へ問ひかけた。

「中つたとも、石のやうに落ちて來た。」

子供たちはもう犬と一緒に、ツルゲネフの周圍へあつまつてゐた。

「探してお出で。」

トルストイは彼等に云ひつけた。

子供たちは、ドオラを先に其處此處と獲物を探し歩いた。が、いくら探して見ても、山鳴の屍骸は見つからなかつた。ドオラも遮二無二駈廻つては、時々草の中へ佇んだ儘、不足さうに唸るばかりだつた。

しまひにはトルストイやツルゲネフも、子供たちへ助力を與へに來た。しかし山鳴は何處へ行つたか、やはり羽根さへも見當らな

かつた。

「ゐないやうだね。」

二十分の後、トルストイは暗い木々の間に佇みながら、ツルゲネフの方へ言葉をかけた。

「ゐない譯があるものか！石のやうに落ちるのを見たのだから、……」

ツルゲネフはかう云ひながらも、あたりの草むらを見廻してゐた。

「中つた事は中つても、羽根へ中つただけだつたかも知れない。それなら落ちてからも逃げられる筈だ。」

「いや、羽根へ中つただけではない。確に僕は仕止めたのだ。」

トルストイは當惑さうに、ちよいと太い眉をひそめた。

「では犬が見つけさうなものだ。ドオラは仕止めた鳥と云へば、き

つと啣へて來るのだから、……」

「しかし實際仕止めたのだから仕方がない。」

ツルゲネフは銃を抱へた儘、苛立たしさうな手眞似をした。

「仕止めたか、仕止めないか、その位な區別は子供にもわかる。僕はちやんと見てゐたのだ。」

トルストイは嘲笑ふやうに、じろりと相手の顏を眺めた。

「それでは犬はどうしたのだ？」

「犬などは僕の知つた事ではない。僕は唯見た通りを云ふのだ。何しろ石のやうに落ちて來たのだから。……」

ツルゲネフはトルストイの眼に、挑戰的な光を見ると、思はずかう金切聲を出した。

「しかしドオラが見つけない筈はない。」

この時幸ひトルストイ夫人が、二人の翁に笑顏を見せながら、さ

りげない仲裁を試みに來た。夫人は明朝もう一度子供たちを探しによこすから、今夜この儘トルストイの屋敷へ引上げた方が好からうと云つた。ツルゲネフはすぐに賛成した。

「ではさう願ふ事にしませう。明日になればきつとわかります。」

「さうだね、明日になればきつとわかるだらう。」

トルストイはまだ不服さうに、意地の悪い反語を投げつけると、突然ツルゲネフへ背を見せながら、さつさと林の外へ歩き出した。

……

その夜、主客は一家の男女と共に、茶の卓子を圍みながら、雑談に夜を更かしてゐた。ツルゲネフは出來得る限り、快活に笑つたり話したりした。しかしトルストイは、その間でも相變らず浮かない顔をしたり、滅多に口も開かなかつた。それが始終ツルゲネフには、面白くもあれば、無氣味でもあつた。だから彼は一家の男女に、ふだんよりも愛嬌を振撒いては、わざと主人の沈默を無視するやうに振舞はうとした。しかし一座が陽氣になればなる程、ツルゲネフ自身の心持は、愈〻妙にぎごちない息苦しさを感ずるばかりだつた。いくら雑談の圏内へ誘はうとしても、主人はどこまでも冷然として打ちとけなかつた。

翌朝ツルゲネフはやゝ早めに、特にこの家では食堂に定められた二階の客間へ出かけて行つた。客間の壁には先祖の肖像畫が、何枚も壁に並んでゐる。――その肖像畫の一つの下に、トルストイは卓へ向ひながら、郵便物に眼を通してゐたが、彼の外にはまだ子供たちも、誰一人姿は見せなかつた。

二人の翁は挨拶をした。

その間もツルゲネフは、相手の顏色を覗ひながら、少しでも其處に好意が見えれば、すぐに和睦する心算だつたが、トルストイはまだ氣むづかしさうに、二言三言話した後は、又前のやうに默々と、郵便物の調べにとりかゝつた。ツルゲネフは止むを得ず、手近の椅子を一つ引寄せると、これもやはり無言の儘、卓の上の新聞を讀み始めた。陰氣な客間は少時の間、湯沸のたぎる音の外には、何の物音も聞えなかつた。

「昨夜はよく眠られたかね。」

郵便物に眼を通してしまふと、トルストイは何と思つたか、かうツルゲネフへ聲をかけた。

「よく眠られた。」

ツルゲネフは新聞を下した。さうしてもう一度トルストイが話しかける時を待つてゐたが、主人は銀の手のついたコップへ、湯沸

の茶を落しながら、それぎり何とも口を利かなかつた。

かう云ふ事が一二度續いた後、ツルゲネフは丁度昨夜のやうに、不機嫌なトルストイの顏を見てゐるのが、だん〳〵苦しくなり始めた。殊に今朝は餘人がゐないだけ、一層彼には心のやり場が、何處にもないやうな氣がするのだつた。せめてトルストイ夫人でもゐてくれたら、――彼は苛立たしい肚の中に、何度となくかう思つた。が、この客間へは、どうしたものか、未だに人のはひつて來るけはひさへも見えなかつた。

五分、十分――ツルゲネフはとう〳〵たまり兼ねたやうに、新聞を其處へ抛り出すと、蹌踉と椅子から立上つた。

その時客間の戸の外には、突然大勢の話聲や靴の音が聞え出した。それが皆先を爭ふやうに、どや〳〵階段を駈けあがつて來る。――と思ふと、次の瞬間には、亂暴に戸が開かれるが早いか、五六人の

男女の子供たちが、口々に何かしやべりながら、一度に部屋の中へ飛びこんで來た。

「お父樣、ありましたよ。」

先に立つたイリアは得意さうに、手に下げた物を振つて見せた。

「私が始めて見つけたのよ。」

母によく似たタチアナも、弟に負けない聲を擧げた。

「落ちる時にひつかゝつたのでせう。白楊（ポプラ）の枝にぶら下つてゐました。」

最後にかう説明したのは、一番年嵩（トシカサ）のセルゲイだつた。

トルストイは呆氣にとられたやうに、子供たちの顔を見廻してゐたが、昨日の山鳴が無事に見つかつた事を知ると、忽ち彼の髯深い顔には、晴れ〴〵した微笑が浮かんで來た。

「さうか？ 木の枝にひつかゝつてゐたのか？ それでは犬にも見

つからなかつた筈だ。」

彼は椅子を離れながら、子供たちにまじつたツルゲネフの前へ逞しい右手をさし出した。

「*イヴァン・セルゲエヰッチ。これで僕も安心が出來る。僕は嘘をつくやうな人間ではない。この鳥も下に落ちてゐれば、きつとドオラが拾つて來たのだ。」

ツルゲネフは殆ど恥づかしさうに、しつかりトルストイの手を握つた。見つかつたのは山鳴か、それとも「アンナ・カレニナ」の作家か、——「父と子と」の作家の胸にはその判斷にも迷ふ位、泣きたいやうに喜ばしさが、いつか一ぱいになつてゐたのだつた。

「僕だつて嘘をつくやうな人間ではない。見給へ、あの通りちやんと仕止めてあるではないか？ 何しろ銃が鳴ると同時に、石のやうに落ちて來たのだから。……」

* Ivan Sergeyevich ツルゲネフの名。

トルストイ伝 戰爭と平和 感想

二人の翁は顔を見合はせると、云ひ合はせたやうに哄笑した。

（夜來の花）

一一　繪馬堂

（一）饗庭篁村

神社佛閣に繪馬を奉ること、其の昔は眞の馬を牽き獻げしなるを、後に繪に畫きて奉納したるに、繪馬と字の如く馬の繪に限りたるならんが、其の繪馬より思ひつきて、さま〴〵の繪をも畫きて堂社へ奉納し、信仰奉謝の意を表したることはなか〳〵に古く、太平記の阿保秋山の河原軍の條に、「されば其の頃靈佛・靈社の御手向、扇・團扇のばさら繪にも、阿保繪秋山が河原軍とて書かせぬ人はなし。」とあり。此の御手向とあるは、繪馬の額の類をさしたるなり。

阿保秋山の河原軍は（二）正平年中の事なるが、其の頃とさしたるは直に其の年中の事ならず、太平記の作者の頃とするも、足利中世の

（一）名は與三郎。又竹の屋主人と號す。大正十一年歿、年六十。

（二）後村上天皇の御代の年號。

事なるべし。其の頃より既に靈佛・靈社に名高き武勇の事などを書きて奉納せしこと盛なりとせば、繪馬の額には雪舟（三）・雪村（四）の名畫もありしか知る可からず。されど燒亡に罹り、風雨に曝されて、京都清水寺の繪馬の額にも、天正以前のは無しといふ。繪馬の名畫と云へば、古法眼元信の馬（現に淺草觀世音にあり、清水寺にあり。共に靈ある昔話を傳へたり。）と先づ云はれて、名畫・名筆の名あるものはそれ以後のもの多し。此の繪馬の額を堂社の寶前に掛け奉る趣意は、前にいふ如く、信仰者が祈願奉謝の爲なれど、後には畫工が一世に名を振ひ、末代に蹟をとゞむる名譽の展覽會の如くなり、其の畫に精神を注ぐこと尋常ならず。繪馬は諸國の人の集り來りて見るものなり。一筆、一畫の粗誤ありても、直に指摘せられて其の過を改めがたし。

京都清水寺に最も古しと傳へらるゝ長谷川久藏信春（五）の時致・朝

（三）足利時代の畫僧。名は等楊。山口雲谷寺に住す。永正三年歿、年八十七。

（四）足利時代の畫僧。名は周繼。貞和二年歿、年五十七。

（五）雲舟派の畫人。

比奈草摺引の圖は、天正二十壬辰卯月十七日附ありて、其の勇壯のさま見る人腮を振つて感嘆したるが、或時猪熊の染物屋の下女が、朝比奈の袴の襞の折れたる上にもかまはず、舞鶴の紋を書きたるを見出し、折目も皺もなき繪なりと笑ひしより、都中取沙汰になりしを信春聞きて、一生此の事を苦にわづらひたりといふこと、西鶴の織留(一)に出でたり。此の如く繪馬は萬人の見る所、いづれいづこに如何なる繪難坊あるやも知るべからず。繪馬の額を書きて堂社に掲ぐる事は、其の頃の繪師の死活問題ともいふべきほどの大事なりしなり。

同じ御寺に、延享三年に服部梅信(二)といふ畫工、同じく草摺引の題を掲ぐ。これまた朝比奈が鶴の丸の紋を襞も折目もかまはず書きこなしたり。或人難じて「天正の信春舞鶴を襞に拘らず書きて、一生の悔をなしたり。同じ堂に同じ圖柄を書きて、其の過を再びする事

(一) 井原西鶴。俳人にして小説家。元祿六年歿、年五十二。
(二) 西鶴織留。六卷。
(三) 浮世繪師。

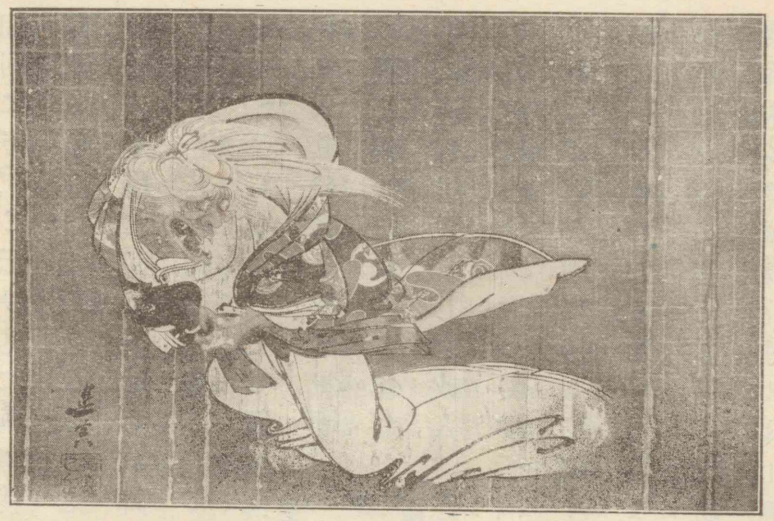
如何にぞや。」と云ひしに、梅信傍を向きて、「是は掛額を描く畫家の法なり。」とのみにて取合はざりしとぞ。信春は古法眼の弟子にして、其の筆法を得たりと稱せられ、舞鶴の非難を氣病みにして終りしといへども其の額は名畫として今に尊重せられ、掛額を描く法を得たりと自ら安んじたる服部梅信は、其の畫系すら定かならずして、見る人其の畫を妙とせず。其の得失は知るべきならずや。

淺草觀音に掲ぐる嵩谷(四)の鵠の額も、はじめ猪の早太は小刀を逆手に持ち居たりしを、或人注意して、「平家物語の本文にも、『落つるところを猪の早太取つて押へ、柄も拳も通れと九刀ぞ刺したりける。』とあれば、刀を順に持ちて刺すやうにありたし。」と云ひしに、嵩谷悅びて、一旦掛けたるを引下して、今の如く書直して、名譽を殘したり。(韓信股を潛る圖の右の手、淺茅が原の兒の頰へあてたる手の形にも同樣の話あれど、長ければ略す。)たゞ掛額を書く畫工の苦心は今

(四) 姓は高、名は雄。德川時代の畫家。文化元年歿、年七十五。

(一)名は順藏。畫家にして蒔繪工。明治二十四年歿、年八十五。

(二)月岡芳年。風俗畫家。明治二十五年歿。



鬼女（柴田是眞筆）

の展覽會に二枚三枚掛持に出す畫工の苦心よりは苦心せしと知れば足れり。）王子稲荷神社の額堂の名畫、柴田是眞翁筆の鬼女圖は天保十一年是眞二十四歳の作にして、また一代作品中の秀逸のものなるが、是眞自身も晩年幾度か此の圖を試みたれど、また此の如く會心のものを作る能はざりきといふ。

予輩また故芳年氏に聞ける事あり。氏は此の是眞の額を欽慕して、時々王子稲荷へ詣りて

(三)名は精一。東京帝國大學教授。文學博士。

これを眺め、密かに此の圖を作りたることあれども、遠く及ばず、筆を抛ちて歎息したること數度なりといへり。名工名工を知るといふべし。此の繪の「國華」に出でし時、瀧(三)文學士に對し、「是眞二十四歳の作とすることは、裏書の年號及び社傳によりて確實なるべきが、後年如何に名大家と崇められしとは云へ、未だ二十四歳の若輩にして此の大題を揮毫せんこと、自ら名の爲にしたりとしても餘りに大膽なり。また祈願主ありて依頼したりとしても、二十四歳の此の時の是眞に、此の桐柾目、金箔置の大額に筆をつけさせんこと、如何あるべきか。」と問ひたるに、「されば大工棟梁にて、王子稲荷の今の社を建てたれば、其の記念ともして、若き甥に此の大畫を託せしならん。是眞も我が技倆を一世に紹介せんとする伯父の慈愛に感じて、畢生の力を籠めしものならん。」と答へられぬ。傳歴を聞けば一段と名畫の趣味を深く感じぬ。瀧の川

の紅葉狩に鬼女といへば緣あり。これは渡邊の綱に切られし腕を取りかへす鬼女の額なり。散策のついでに立寄りて見れば、景色にまさる趣はあるべし。二十四歳にして此の名畫あり。書畫文藝といはず、諸道にたづさはる者仰ぎなば、悚然として怖るゝところあるべきか。そは鬼女の勢の凄じき外に、自ら奮勵感憤するところある故なるべし。繪馬は昔の畫工の大展覽會なり。繪馬は畫工畢生の榮辱の懸るものなり。されば見るに心のあるべきものと言ふべし。

（雀躍）

一二　一萬里を隔てて

（一）正木不如丘

中歐佛蘭西の出來事である。時は西暦千八百六十五年、明治元年の前年である。六月六日にパストール（二）先生は巴里の研究所から南佛に出發した。蠶の病氣の研究の爲である。

（一）名は俊二。慶應義塾大學教授。

（二）Pasteur　佛國の化學者。（一八二二―一八九五）

是より先、十數年來、蠶病は歐洲各國に擴大して來て、蠶絲を主產として居た佛國などは、年々の減收に、已むなくトルコ、或は遠く日本から蠶種を取寄せて、辛うじて蠶業を繼續して居たのであつた。

先生は弟子のヅクレー氏を同伴して、アレー（三）州に出發した。先生にその州長から此の研究の依賴があつた時に、先生は大に狼狽されたさうである。蠶をまだ見た事がなかつたからである。然るに同月二十六日、アレーに到着後十五日目に、先生は既に、雌蝶を一つの箱に分けて產卵させて見て、その蝶の身體に點狀の病所があつたら、その卵を捨ててしまへ。」と發表された。

爾來パストール先生は毎年蠶業の中心地方に出張して、弟子等と共に此の研究に從事された。此の時代はパストール先生に取つては、最も悲しむべき年であつた。先生は既に母と長女とを失つた。そして千八百六十五年にアレー地方に出張さるゝや否や、父親の

（三）Alais

危篤の報を受取つた。その年の九月に又末の娘を失つた。翌年は十二歳の娘を又失はれた。五人の子の中唯二人のみ先生の許に殘つた。かう云ふ一身上の不幸の中を、先生は尙研究を續けられた。ナポレオン第三世がコンビエーニュの宮殿にパストール先生を呼んだ時、「かやうな大發見をしながら、何故その豫防法の權利を取らぬか。金が取れるではないか。」とのナポレオンの問に、「佛蘭西では學者がさういふ事をするのを罪惡と認めて居ります。」と先生は答へた。

千九百六十七年にパストール先生は巴里に歸つた。そしてソロボンヌ大學の化學教授となり、皇帝から生理化學研究所新設の費用を下附された。

極東日本の出來事である。年は明治の初年である。

蠶種の頃になると、非常な活氣を呈して種を產ませて居る。今迄の數倍の產額である。それは歐洲諸國からの大量の注文が、横濱に入つたからである。二三年は何とかして註文に應ずる事が出來た。然るに四年目になると、あまりに多量の註文に應じかねるに至つた。

山間の百姓家も、夜を日に繼いで、厚紙を座敷に擴げて居る。その厚紙に糊をべた〳〵と塗る。その上にはら〳〵と粟を撒く。時には胡麻をも撒く。かうして輸出向の蠶種が製造され、一枚一兩になるのであつた。山間僻地も御維新以來の大景氣である。横濱の倉庫はぎつしりと此の蠶種で滿たされた。

話は又佛蘭西に歸る。一千八百六十八年を中心としたパストール先生の蠶病の研究は大成功に終つた。そして此の發見は先生の產をなすに役立たなかつたけれども、歐洲諸國からの蠶種の檢定を乞ふものは多く、遂に佛國をして產をなさしむるに至つた。

千八百六十八年の十月十九日に、先生はアカデミーで一場の演

説を試みた。そしてその夕暮腦出血を起したが、幸に生命はとりとめた。その翌年に普佛戰爭が始つた。

此の年の秋である。一萬哩離れた日本の横濱では、海岸の倉庫から集めた蠶種を皆燃してしまつた。眞紅な焔が天を焦す程だつたと云ふ。蓋し粟を燒捨てたに外ならぬ。（診療簿餘白）

一三　椰子の實

島崎藤村*

名も知らぬ遠き島より、
流れ寄る椰子の實一つ。

ふるさとの岸を離れて、
汝はそも涙に幾月。

* 名は春樹。文學者。

もとの樹は生ひや茂れる、
枝はなほ蔭をやなせる。

われもまた渚を枕、
ひとり身の浮寢の旅ぞ。

實をとりて胸に當つれば、
あらたなり流離の憂。

海の日の沈むを見れば、
たぎり落つ異郷の涙。

思ひやる八重の潮路、

いづれの日にか國に歸らん。（藤村詩集）

一四　饗宴席上の木乃伊

石井重美

古代埃及人の間には、饗宴の席がだん〳〵亂れて來ると、その席上に、どこからか木乃伊を運びこんで、歡樂に醉ひしれて居る多くの客の注意を無理にもその方に轉ぜしめ、以て紛雜と狂亂とを制する奇習があつたといふことである。それから、毎月々々吾々の夜の世界を美しく照らしてくれる、あの銀盆のやうなみづ〳〵しい月も、實は、今では最早すつかり死にはてて、乾からびた天體の木乃伊のやうなものなのである。

さういふ關係から、マッケーブ(二)が月のことを人生に於ける「饗宴席上の木乃伊」と呼んだのは、面白い言葉であるやうに思ふ。月はほんたうに、あの蒼白い冷たい顏をして、沈んだ、低い、力のない聲で、「お

(一) 理學者。

(二) J.McCabe 米國の理學者。

前達も何時かこんなやうになるぞ。」と吾々に向つて囁いて居るやうに見える。

地球は、その直徑が約七千九百哩あるが、月の直徑はその約四分の一で、二千百六十哩しかない。隨つて月の質量は地球の質量の約八十分の一しかない。

天體の壽命は一般に、形が大きく、質量の大きい者ほど長い。つまり、大きな者は比較的に永く熱を保つて居るが、小さい者はどんどんそれを失つて了ふから、早く冷たくなつて死ぬのである。元來、宇宙創成の上からいふと、太陽も地球も月も、その他總べての惑星などもも、悉く大體殆ど同時に生れたものと見るべきであるが、その中、太陽は最も大きいから、まだあの通り熾んに燃え爛れて居り、地球はそれに比べると、小さいことは甚だ小さいが、それでも月よりは餘程大きいので、その表面だけは冷えて固まつても、中には尙ほ多

くの熱を包藏し、多少の命脈を保つて居るのに、月は著しく形が小さいために、既に全く冷結枯死して了つたと云つてもいゝやうな狀態になつて居る。

總べての天體は、皆絶えず少しづつ冷たくなりつゝある。さうして終には悉く死んだ石塊と化して了ふ。歩み往く道は異なるとも、辿り着くべき境地は皆同じである。其處には一つの例外もない。あるものは、たゞ小さい者が先に、大きな者が後にといふ、時の順序のみである。

さういふ意味から、月は又吾々にとつて、美しいけれども餘り望ましくない、併しながら如何とも致し方のない、現實の指道標であると云ふことができる。

晴れた滿月の夜に、月の面を眺めると、肉眼でも明暗濃淡を異にした、いろ〳〵の形の表れて居るのを見ることができる。或はそれが双つの耳を持つた兎の形に見えたり、或は又若い美しい婦人の顔に見えたりする。その明るい光つた所は、大體月の地面の隆起して居る部分で、暗く蔭になつた所は、低い平たい部分である。

肉眼で見た月の表面は、――書齋の窓や、庭や、田圃や、野原などに、しら〳〵とさして居る月の光は、吾々にたゞ靜かな、さうして又安らかな、一種の美感を與へるだけであるが、一度望遠鏡でそれを覗ふと、吾々は忽ち或不氣味な恐怖の感に襲はれる。

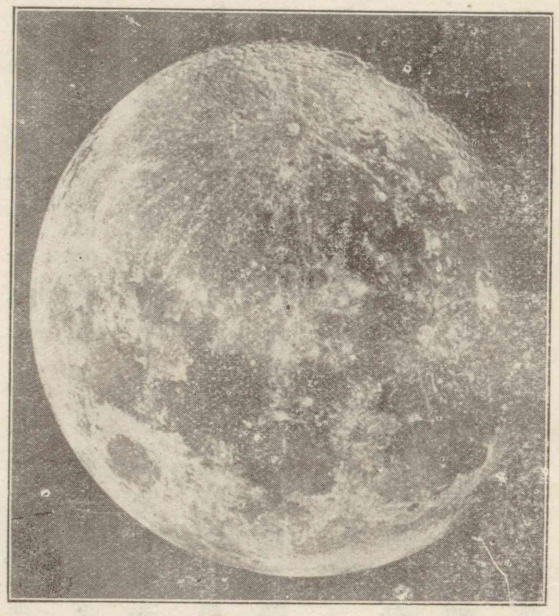
それは何よりも、先づ其處に無數の、天文學者が「噴火口」と呼ぶところの、恰度地球上にも見られる火山の噴火口のやうな形をした物が在るからである。月の表面は、實際さういふ噴火口で全く埋められて居ると云つても差支ないほどになつて居る。

いや、望遠鏡で眺めた月の表面は、單にさういふ噴火口のためばかりでなく、其の他一般の光景が、直にその物の荒廢と死とを思は

せるやうに、如何にも沈み切つた、荒れきつた、すさみきつたものなのである。

月には一般に、現在(少くとも注意するに足るべき程の)空氣も水も無いものと認められて居る。何故といふに、星が月の蔭に隱れる場合を觀察すると、若し月に空氣があれば、その星は月に近づくに從つて、その空氣のために次第々々に光を弱められ、終ひにいよいよ月の後に隱れるに及んで、始めて全く見えなくなるべきであるが、實際は、さういふ星の光度の漸減といふやうなことは起らないからである。尙若し月の周圍に空氣が在れば、星の光はその空氣によつて多少屈折せしめられる故、星が實際月の後に隱れても、その直後しばらくの間は、引續いて吾々の眼底にそれが映らなければならないし、又同じ理窟で、その星は、實際月から外に出ようとする暫く前からも、吾々に見えなければならないのであるが、事實はさ

うでない。卽ち星は、實際月の背後に入ると共に、忽然として姿を沒し、實際それから外へ出ると共に、忽然としてその光を現すのである。



更に、月の世界に空氣や水の無い證據として擧ぐべきことは、月に所謂「侵蝕作用」の形跡の認められないことである。若し月に空氣や水があれば、どうしても、それ等の物の特性として侵蝕作用を起し、長い間には次第々々にその表面を磨削して一種特有な地貌を形成すべきであるが、月の表面は事實いかにも荒々しくすさみはてて居て、噴火口にしても、山

脈にしても、少しも削刻磨碎の痕跡はなく、何れも磊々として嶮しく、初め出來たまゝ、何等の變化をうけないで死滅固結して了つたといふやうな有樣を呈して居る。

現在、月には空氣も水も無いが、恐らくは、最初は矢張是等の物も在つたであらう。併しながらそれは次第に周圍の空氣の中へ、飛散消滅して了つたものであらう。

空氣や水の無い世界、其處には勿論、生物の生命を保存し得べき餘地はない。

瓦斯の分子は、常に非常な勢で運動して居るものであるから、云ふまでもなく、地球の氣層のずつと端の方からも、空氣や水は絶えず少しづつ空間に向つて逸脱しつゝあるに相違ない。

吾々の地球は幸にその形が大きくて、それ等の逃亡者の多くを抑制する力を有つては居るが、併しながら假令少しづつでも、それ

が散佚して行くのは否まれないことである。吾々の地球も、斯樣にして、その餘り多からぬ空氣を亡失しつゝあるのである。

月の自轉は、以前はもつと速かであつたであらうが、恐らく地球の引力のために影響されて、次第々々に緩慢になり、現在ではそれが、公轉(地球の周圍を一回轉する運動)の速度と同じになつて居る。即ち、月の一日は地球の約二十八日に相當し、隨つて又、月は何時もその同一の半面だけを吾々の方に向けて居るのである。

斯樣に、月は約二十八日で一回轉(自轉)をするから、その半分の約十四日間は續いて日光に照らされ、それと同一の期間、夜の闇に閉されるわけである。而も前に掲げたやうに、月には空氣も水もないから、日光は雲や空氣のために遮られることなく、天氣はいつでも晴朗澄明で、晝間は爛れるやうな强烈な日光が思ふまゝにその猛威を揮ひ、夜は又、溫熱が自由自在に空際に放散して、戰慄すべき寒

冷が急激に襲つて來る。

月の世界には空氣がない故、吾々地球の生活者に惠まれて居るやうな、あの譬へがたない夕榮の美しさを見ることはできない。太陽が地平線の彼方に沈むと共に、息詰るやうな漆黑な闇が忽然として四圍を閉して了ふ。さうしてそれから一二時間の後には、溫度はもう氷點以下に下つて行く。

斯樣なわけであるから、學者は月の世界に於ける晝間の溫度は、水の沸騰點ぐらゐにも上り、夜の溫度は之に反して所謂「絕對零」(攝氏の零下約二百七十四度。)にも近くなるであらうと云つて居る。此の絕對零といふのは、星と星との間の宇宙的空間を普ねく支配して居る、甚だしく侵略的な、總べての物を凍結固死せしむる無熱な狀態であつて、恰度生物の體が何かの原因で衰弱して抵抗力を減退せしめると、八方から有害な黴菌が攻擊して來て其處に疾病を

釀すやうに、天體の上に少しでも乘ずべき機會があれば、忽ち襲ひかゝつてそれを征服して了はなければ止まないといふ、非常に怖しい宇宙の魔手なのである。

地球はまだ、その魔手に捕はれて居ないが、併しながら現在でも、それは吾々の立つて居る地面から一百哩以外の空間まで既に進擊して來て居る。何等かの關係によつて、一旦地球のそれに對する防禦の力が衰退するやうなことがあれば、(例へば、地球の空氣の層が著しく稀薄になつたり、太陽からの送熱が減殺されたりするやうなことがあれば)その魔手は更にたちごころに陣を進めて、直接地球の生命を威嚇するやうになるに相違ない。而もそれは只時の問題なのである。

今、月にはこれまで述べた通り、自分自身の光もなく、熱もなく、空氣もなく、また水もない。その上、それは非常な高溫と驚くべき寒冷

とによつて交々見舞はれるやうになつて居る。それ故、月は天體としても、又其處に生存すべき生物(假にそれがあり得るものとして)の立場から云つても、既に全く死滅して了つたものと見做して差支はない。月の表面に、時々色の變るやうな處があるといふのでそれを植物の存在に基因するものと見る學者もあるが、それが果してさうであるや否や、甚だ疑はしい。

現今の高度な望遠鏡を用ひると、月面に於て三百呎ぐらゐの大きさをもつた物は認めることができる。それ故大きな軍隊の運動や示威行列のやうなものでもあれば、それは明らかに見えなければならないわけである。若し又東京のやうな市街でも其處にあれば、それこそあり〳〵と手に取るやうに見らるべき筈である。併しながら、毎年々々澤山の人達が、眼を皿のやうにして、月の世界の觀察を行つて居るに拘らず、勿論吾々は、まだ斯樣な事象なり物象なりの存在を肯定するやうな確たる報告を持たない。

要するに、月はそれに就いて多少の保留をば許しながら、いろいろの點で、既にその生命を亡失した全くの死星であるといふことができる。

先に余はマツケーブの言葉を引き、月のことを「饗宴席上の木乃伊」と呼んだ。さうして又、吾々の地球の進むべき道を示す指道標であるとも云つた。尤も云ふまでもなく、讀者は必ずしも、吾々の地球が、一々上に述べたやうないろ〳〵の狀態を同樣に經驗し、且それに到達するものと考へる必要はない。細點に亙つては、月の採つた經路と、地球の採り、或は採らうとする經路とは、勿論相違するであらう。天體としての個體が異なり、隨つて四圍の關係が互に相違して居るのであるから、固よりさうあるべきが當然である。而も大體に於ける兩者の一致はどうしても認めなければならない。卽ち究

極するところ、地球も矢張月と同じやうに、何の生命もない一箇の荒涼たる石塊と化すべきことは、火を睹るよりも炳かな事柄である。

さういふ意味に於て、月は確に吾々の餘儀ない注意を引くに足る饗宴席上の木乃伊であり、また冷たい運命の神の立てた不氣味な指道標である。（世界の終り）

一五　イソップより

蟹の親子

蟹の婆さんが息子に向つて、「何だつてお前は、そんな風に横ばひに這つて歩くのだね。眞直に歩くものですよ。」といふと、若い蟹は答へて、「かあさん、ぢやあ眞直に歩いて見せておくれ、わたしもそのとほりにやつて見るから。」そこで蟹の婆さんは、一所懸命眞直に歩いて見せようとしたが、だめだつた。そして息子ばかり間違つてゐるといつて責めるのは悪かつたと悟つた。

【訓言】口で教へるより先づ身に行へ。

蟻と蟋蟀

冬の天氣のよい日に、蟻達がせつせと、長雨にしめつた貯への穀物を乾してゐると、そこへ痩せ衰へた蟋蟀が來て、食物を何でも惠んで下さいと頼んだ。「ほんたうにわたしはかつえて死にさうなんですよ。」と蟋蟀は云つた。

蟻達は自分達の主義には反くけれど、仕方なしに暫く仕事の手を休めて、蟋蟀の相手をした。「ぢやあ聞くが、お前さん此の夏は一體何をしてゐなさつたね。此の冬の用意に食物を集めては置かなかつたのですか。」

「實は。」と蟋蟀は答へた。「わたしはあんまり歌ばかり歌つてゐたも

のですから、外の事をする暇がなかつたのです。」「お前さん、夏の間歌をうたつて暮したと云ふのなら、此の冬はまあ踊ををどつて暮すより外に仕方はあるまいね。」かう蟻は答へて、笑ひながら、相變らず仕事にかゝつた。

【訓言】將來の爲に計れ。

樵夫と水神

樵夫が河畔で樹を伐つてゐたが、斧を振上げる手先が狂つて、思はず手を放すと、斧は河の中へ飛込んで了つた。樵夫は河縁に立つて、斧のなくなつた事を嘆いてゐると、水の神樣が現れて、何を悲しんでゐると言つて尋ねた。そして譯を聽くと大層氣の毒がつて、早速水の中へ斧を取りに行つてくれたが、やがて黄金の斧を持つて來て、此ではないかと聽く。樵夫が其ではないといふと、又水の中に潜つて、今度は銀の斧を持つて來て、此でもないかと聽いた。いゝえ

それでもございません。」と樵夫は答へたので、もう一度神樣は水の中に潜つた。そしてなくなつた斧を持つて出て來た。樵夫は品物が戻つたので大喜び、夢中になつて御禮を言つた。神樣は樵夫の正直なのを大層感心されて、外の金と銀との二本の斧も褒美にくれた。

樵夫が歸つて此の話を仲間の者にすると、其の中でも友達の仕合せを羨ましく思つた男が、自分も一番、運だめしをやつて見ようと思ひついた。そこでわざ〳〵河の畔へ出かけて行つて、わざと斧を水の中へ落した。神樣は前のやうに現れて、斧を落した話を聽くと、すぐ中に潜つて、やはり黄金の斧を持つて上つて來た。そして、「此はお前のか。」とも何とも云はないうちに、慾ばりの樵夫は、「それです、それです。」と叫びながら、手を伸ばしてそれを取らうとした。けれども、どつこい、神樣は此奴の不正直を憎んで、決して黄金の斧をやらないばかりか、水の中へ落した斧までも取上げてしまつた。

【訓言】正直は最上の政略。（*楠山正雄譯「イソップ物語」）

*文學者。早稲田大學出身。

一六 俚諺

見やう見眞似。
人は一代、名は末代。
龜の甲より年の功。
一寸の蟲にも五分の魂。
帶に短し、襷に長し。
後悔先に立たず、提灯持後に立たず。
鬼に鐵棒。
金槌の川流。
狼が衣を着たやう。
蓼くふ蟲もすきゞ。

旅は道づれ、世は情。
藝が身を助く。
取らぬ狸の皮算用。
藁苞に黃金。
杓子は耳搔にならず。

一七 兒獅子の話

*マーデン

*Marden 米國の著述家。

或日、兒獅子が母獅子の眠つて居る間に、森の中で獨り遊び戯れてゐた。種々變つたものが氣を引くので、兒獅子は一寸周邊（あたり）を探檢して見ようといふ心になり、自分の住家の外の世界はどのやうなものかを見極めようとした。やがて兒獅子は遠くにさまよつて歸路を見失ひ、何時の間にか迷兒になつてしまつた。
兒獅子は驚いて、氣も狂はしく、八方に走り廻り、悲鳴を揚げて母

を呼んだが、母の答は無い。疲れ果ててせんすべもなくなつた時に、ちやうど此の頃兒を失つた親羊がこれに出遇つた。羊はあはれな啼き聲を聞附けて、兒獅子の近くに來て優しく種々と世話した上、遂に其の兒獅子を我が養子として引取つた。

羊は此の迷兒を能く愛撫して育てたが、其の内にそれが親羊よりも大きくなり、時には何だか薄氣味惡く見える樣になつて來た。其の眼の底には、羊の合點のゆかぬ不思議な光を見る事も度々であつた。

當座の内は、養母と養子と共に幸福な月日を送つて居たが、或日、向の山の彼方に、空を壓して大きな一頭の獅子が雄姿を現した。獅子はふさ〳〵とした鬣を振つて、木魂となつて谿谷に鳴り響くやうな吼聲を發した。母の羊は恐れ戰いて立ちすくんだ。併し此の不思議な音響が兒獅子の耳に達した時に、兒獅子は魔に打たれたやうになり、是迄嘗て覺えない感じがして、全身が活々と跳り上るやうな氣がした。其の獅子の吼聲は兒獅子の心の底の琴線に觸れて、或新しい威力を感じさせたのである。さうして新しい不思議な自覺が發生したのである。

兒獅子は其の獅子の吼聲に應じて吼返した。さうして恐怖と驚愕の念に充ちて慄へながらも、一旦勃然として起つて來た新しい力は抑へ難くて、遂に其の情深き母羊を名殘惜しげに見やりながら、驀地に向の山の獅子の方へ跳び去つた。

迷兒の獅子は自己を發見したのである。此の時まで迷兒の獅子は、母羊の傍に遊び狂つて居た小羊達が爲し得ない事が出來るとか、普通の羊に比して格別勝れた力を持つて居るとかいふやうな事は、夢にも想像しなかつたのである。まして山中の百獸を慴服せしむる樣な威力が己にあらうなどとは想像もしなかつた。彼の考

は只單純な羊の考で、犬が見えたらば逃げ、狼の哮えるのを聞いては戰慄するものとしか思つてゐなかつた。然るに、今は是等の犬や狼が己の姿を見て直に逃げ隱れるに至つたのを知つて、却つて自ら驚いてゐるのであつた。

兒獅子も自ら我は羊なりと思つて居た時には、羊の如く臆病で因循であつた。隨つて羊だけの力と勇氣しか持たず到底獅子の力を出し得なかつたのである。たとへ他から教唆するものがあつても、なか〳〵獅子の力など出せるものか。僕は普通の羊である。普通の羊と異なるところは無い。他の羊の爲し得ぬものは僕にも到底出來ぬのだ。」と云ふに止つた。然るに獅子と云ふ自覺が出來た今日、此の兒獅子は茲に心機一轉して、威風四隣を壓するが如き勇猛の動物となり、遂に山中に於ても、豺と虎の外には競爭するものもない森の大王と成つたのである。自覺は確に彼の力を二倍にし三倍にし、或は幾層倍にしたか分らない。此の力は彼が獅子の咆吼を聞く前の瞬間までは、到底認められなかつたのであつた。

兒獅子は自覺を喚起した。向の山の獅子の咆吼が無かつたなら、兒獅子は永久羊の生涯を續け、遂に自己の內に潛在する獅子の本性を悟らずして終つたのであらう。されば、獅子の咆吼は彼の力に一物をも加へた譯ではない。單に內にあつた其の偉力を喚起し、己に持つて居た其の勇猛を喚び醒したのみであるが、已にかゝる自覺が出來た後は、兒獅子は最早羊の生涯に滿足し得られなかつた。山野は實に彼が意の如くに跋涉する處となつた。（「如何にして希望を達す可きか」に據る。）

一八　感想二題

雜草

阿部次郎*

*東北帝國大學教授。

精神勞働

去年の秋植ゑたばかりで、まだ疎らな芝草の間に、猛烈な勢で雜草が蔓り出した。

まだたけの低いうちは、同じ綠の色にまじつてそんなには眼に立たなかつたが、たけの延びるに從つて、それが眼障りになり出して來た。それで私は毎朝まだ涼しいうちに、朝飯前の運動として草取をすることを思ひついた。此の頃になれば、宵の口からしつとりとおりる露が、朝になつて益〻繁く置いてゐるのを跣足の足うらで踏む冷たさがいゝ心持である。三四十坪ある芝地の片端からそろそろと草を取つて行きながら、考へかけてゐることを考へ進めて行く時、其處には、机の前に坐つてゐる時とは又別樣のリズム（調子）が生れる。固より私の草取は遊戯の一種に過ぎないが、この遊戯は私に、筋肉勞働は――特に土を對手にする筋肉勞働は、一種特別の勞働であることを感じさせる。筋肉勞働だけが勞働でないことは云ふまでもない。併しそれは頭の勞働とは違つた一種特別の勞働である。さうしてトルストイなどが考へたやうに、それはあらゆる人にとつて必要な勞働であつて、或程度までこの勞働と接觸することを怠る時、恐らくその人の生活全體に或種類の報いを齎さずにはおないやうな性質のものである。土を對手にする筋肉勞働には、これを無視する者（少年と思はれる人）の觸れ得ないやうな、健全な喜と苦とがあるであらう。單にこの一點から考へても、土地と農業とを忘れた文化が、本質的に人間を幸福にする力があるかどうかは疑はしい。――私はかういふやうな身の程を忘れたことを考へながら、芝草の間にまじる雜草をぬき捨てて行く。

芝草の間にまじつて最も勢力を逞しくしてゐるのは、葉が芝に似て、もつとたけ高く延び、根の方に少し赤味を帶びた何とかいふ草である。私は一種の憎みをもつて遠慮なしにこの賤者（そそ）を拔き捨

ててしまふ。異臭を持つてゐる「ごくため」も亦私の愛情を受けることが出來ない。併し鐵火箸のやうに謾ひ氣のない莖に、折から淡褐色の花ともいへばいへさうな花をつけてゐる「かやつり」草になると、私の手は前ほど勇敢にこれをむしり取ることが出來ない。さうして愛惜の心をもつて芝の間にまじる雜草を眺めはじめると、其處には何といふ多樣な可愛らしい植物の種類が、この狹い空間にその生を營んでゐることであらう。丸い葉の柔らかなものや、葵の葉のやうな形をして三四葉集つて一つの圓居をしてゐるものや、赤味を帶びた小さい莖を横に這はせながら、芝草の隙間に謙遜な自分の領分を占めてゐるものや、見るにしたがつて新しい種類が目について來る間に、淡紫や黄色の小さい小さい花さへ咲いてゐるではないか。私はこれらの小さい可愛いものをぬき捨てるに忍びなくなつて、彼の憎むべき贋者だけをあさつて、これを退治して

行く。

併しこの贋者を根絶することだけでも容易ではない。大低取盡くしたつもりで一兩日たつと、いつの間にか彼等は又芝より高くそのたけを挺でて、その存在を其處にも此處にも告知してゐる。眞晝の光がぎら〳〵と照つてゐるうちは、凡ての葉が一樣にその光を照りかへしてゐるので、それがそんなにも目立たないが、朝の柔らかな光が草葉に置く露を目立たせてくれる時には、露を宿して白がね色を帶びたその葉は、とても自分を隱すことが出來ない。かくて又私にはその朝の仕事が與へられるのである。

枯れた檜

此の間のことである。門から玄關に入るまでの間に植ゑてある五六本の檜の中、その一本が丁度幹の半ば頃から上にかけて枯れて來たので、不思議だと思つて調べて見た。さうしたら最初に此處

に移し植ゑた時、風に負けぬやうにと、横に竹を渡して結へ付けたその繩が、何時までも腐らずにゐるので、日毎に大きくなつて行くその幹が、自然に成長を遂げることが出來ずに、其處で絞られたやうになつてゐたのである。而も枯れかけたその檜は、特に幹の一番大きくなつてゐるもの、成長の特に早いもの、隨つて絞られ方の最も殘酷なものであつた。私は既に大きくなつてゐるその幹に、棕櫚繩が喰込んだやうに咬みついてゐるのを見て、可哀さうなことをしたと思つた。さうして早速その繩を斷つてやつた。併し時はもう遲かつた。檜はその勢を恢復せずにもうすつかり赤くなつてしまつてゐる。私は二階の窓からこの檜の梢を見る毎に、自分がこの樹に加へた保護の愚かであつたことを思ふ。

成長するものにとつては、凡て現狀維持といふことはあり得ない。生物の取扱に於て現狀維持を企てることは、要するにそれを殺す方針をとるといふことである。況して現在よりも更に小さい過去の箍をこれに箍めることは益〻早く彼を殺すことでなければならない。

社會の指導者たるべき教育家や政治家は、國家と民族の成長の勢を見拔いて、これを更に一歩導き進めるだけの見識を持つてゐなければならない。つまり自然の勢に一歩を進めた先覺でなければならない。

私は自分の庭にある枯れた檜の梢を見ながら、色々のことを思ふ。

これは枯れた檜の後日譚である。私は久しくあの枯れた梢をそのまゝにして置いたが、あまり目障りになつて仕樣がないから、先日植木屋の眞似をして枯れた幹を截り捨ててしまつた。さうした

ら、これまで天に向つて眞直に延上る役目は、あの枯れた梢に任せて置いたかのやうに、横にばかり延びてゐた左右の枝が、いつの間にか上に向つて頭を擡げるやうになつて來た。今、頭を截られた檜は、子供が兩手をあげて萬歳をする時のやうに、その前後左右の枝を肩より上に高くあげつゝある。前に幹を縛る棕櫚繩を斷ち切つた自分は、今度はあの繩に殺された幹を――考へて見れば、可哀さうな幹を切つてしまつていゝことをしたと思つた。如何に同情すべき理由があつても、死んでしまつた者はその處を去らなければならぬ。死んだものが重要な場所を塞げてゐるのは新しき生命の伸長を妨げる。自分は玄關前の檜によつて、生命あるものの成長を縛つて殺すこゝの恐しさとともに、死んだものは早く片付けてしまはなければならぬことをも亦教へられた。死んだ者を厚く葬るのは我等の情愛である。死んだ者を葬つてしまふのは生命に對する我等の愛である。（北郊雜記）

一九　否の一語

中村正直*

人の此の世に處するや、事の次第によりては、否の一語を言ふの勇なかるべからず。何となれば、誘惑の事及び罪惡の事、その始に當りては、甚だ些少なるが如くなれども、その中に陷るに及んでは、遂にその圈套を脱出する能はざるに至る。故に始より毅然として「否」と言ひて之を拒むべし。「否、我は之を爲す能はず。」と言ふべし。然るに、世人を觀るに、能く此の否の一語を言ふの勇氣あるもの少し。

否の一語を言ふ能はざる一種の人あり。他の心に違ふを怖るゝに由るや、他人の心に順ふを欲するに由るや、確に知り難しと雖も、此の人は他人に賴まるゝことを辭せず、或は金錢を貸し、手形に裏書し、或は證人に立ち、遂に之が爲に累を受け、其の身其の家を傾く

*號は敬宇。文學博士。明治二十四年歿、年六十。

るに至るなり。人、當然の時に於て、否の一語を言ふは安全の道なり。蓋し許多の人、否の一語を言ふ能はざるに由りて、其の身其の家を傾くるに至るなり。否の一語を言ふの勇氣あらざれば、罪惡に地歩を占めらるゝなり。

中村正直

歡樂の事、我を誘引せんとして我を試みる時は、直に否といふ決心を有せざる可からず。此の決心は德行をして益〻堅固ならしむ。若し始に於て一歩を讓り、否といふことを怠らば、自己に信賴するの力これよりして退き減ずべし。然るに、否の一語を言ふに、始は其の難きを覺え、大いなる勢力を要すれども、久しき後は、自然に勢力增加して容易となる。怠惰・惑溺、其の他諸の惡習の襲擊を防がんには、否の一語より外は有らず。故に曰く、當然の時に於て否の一語を言ふは、大いなる德行なりと。（西洋節用論）

二〇　林檎の味

三浦修吾*

京都の友人から聽いた、秋田の山の中の爺さんの話である。林檎を御馳走になつた時のこと、友人が爺さんに向つて、「爺さん、死んだらお前どうなるか。」と聽いた。「死んだら土になるだ。」爺さんはかう答へた。爺さんの答はきつぱりしてゐた。當り前だよ、分つてゐるではないかと云ふやうな調子を帶びてゐた。友人は、これには何も云ふことが出來なかつた。「あの爺さんにはいつも參らされるのです。」と友人は私に云つた。

この爺さんの言葉が、私には味はひ深く聽かれる。「死んだら土になるだあ。」この素朴な力强い一語に、爺さんの信念と希望と安心と

* 東京高等師範學校出身。大正九年歿、年四十五。

が鳴り響いてゐるやうに私には聽かれる。爺さんは、この一語より以上には何にも云ひ得ないであらう。けれど、爺さんのこの一語には、云ひ盡くせぬ程の深い意味があると私は感じてゐる。

試みに考へてみよう。私共の口から、「死んだら土になるのだ。」といふ聲が出たとしたら、それはどんなに情ない、絶望的な、悲調を帶びた響であるだらう。「この世は短い、この世で自分の望は遂げられない。この世は辛いことばかりである。たま〳〵面白い事があるにしても、それは一寸の間、名を成したところで、事功を擧げ得たところで、自分はやがて死なねばならぬ。死んだらどうなる、土になるばかりだ。あの冷たい土に。」かうした心持での外「死んだら土になるだ。」とは云ひ得ないであらう。

然るに、この爺さんの聲には、「死ねば極樂に往生する。天國に復活して、神と共に限りなき祝福された生活に入ることが出來る。そこにはもう悲しみはないのだ。苦しみもないのだ、永久に喜があるばかりだ。」と云つて、未來の生活を希望して、安心してゐる信仰の人に等しい、或はそれよりも何處となく底ひゞきのある、きつぱりとした信仰の力が籠つてゐる。

私は中江兆民翁※の「一年有半」を讀んだ時、この無信仰で、無神・無靈魂を主張する人の言葉に、信仰の人に聽くより以上の、底深い靈の力に觸れ得たやうに感じた。兆民翁は、やはり人は死んだら土になるのだと云つてゐる。人は死んだら土になるのだ、馬の糞になるのだ、靈魂などいふものは有るものではない。人の精神意識は、物質の作用によつて生ずるもので、人が死んで、體軀や腦髓を組織してゐた物質が解體すれば、精神意識と云ふものも消えて無くなつてしまふ。來世だの、靈魂不滅だなどいふことは虛妄に過ぎないのだと云つてゐる。

※名は篤介。新聞記者。明治三十四年歿、年五十五。

而して翁自身は、一年の後に死を控へ、病に苦しめられながら、平然寂然として、一日生くれば、一日爲すべき事あり、一日樂しむべき事ありと云つて、「一年有半」の筆を執り、好きな義太夫を聽きに行き、嗜むものをよろこび食つてゐる。そして時期が來て、平然寂然として死んで行つた。

私は、「一年有半」に載せられた翁の筆に、鑛石の中に包まれた金銀のやうな、底深く隱れた靈の光を感ずることが出來たやうに思つた。秋田の山中の百姓爺の言葉と兆民翁の言葉とには、まことに共鳴するものがあるやうに思ふ。

私は、秋田山中の百姓爺さんの心の中に辿り入つて考へて見た。

「死んだら土になるだ。」この一語に、爺さんは、胸一杯、腹一杯の喜を籠めてゐるやうに、私には感じられる。爺さんは小さい時から百姓をして來て、土に親しんで來たのである。四十年も、五十年も、爺さん

は毎日々々土に親しみ、土に接觸して來た。

爺さんにとつて、土は死物では無いのである。無機物ではないのである。爺さんの眼には、土は活きて見える。爺さんのために、土は長い間、友達であり、兄弟であり、母であり、親であつた。否、土は、爺さんのためには神であつた、土なる神であつた。

爺さんは朝早く起きて跣足で地上に立つた。土が蹠に觸れる。ぢり〳〵と土の氣が蹠から爺さんの血管に傳はつて行く。爺さんの身體が溫かくなる。爺さんの腹が滿ち、胸が開け、頭が爽かになり、爺さんの顏が輝いて來、爺さんの兩腕に力がうなつて來る。爺さんは鍬をもつて、畑の中に足を入れる。土は爺さんの鍬に隨つて、爺さんの心のまゝに動く、轉がる、覆へる。爺さんの胸には感謝の念が湧いて來る。あゝ、有り難いことだ。かうして芋種を植ゑておくと、大根の種を蒔いておくと、雨が降つて土を濕してくれる。日光が照つては、

ぬくもりを與へてくれる。そして芋の子が繁殖するのだ。大根が大きくなるのだ。かうして麥も出來るのだ。米も出來るのだ。俺がかうして土の中に立つて、鍬をとつて耕してやり、糞や尿をかけてやると、土が喜んで、それを吸ひとつてくれて、そして芋や、大根や、米や、麥を育ててくれるのだ。俺達はその芋や、大根や、米や、麥やを食べて、かうして生きて居ることが出來るのだ。あゝ人間はみんな土のお蔭で生きてゐるのだ。土が無かつたら、俺達人間は死んでしまはなければならぬのだ。それは天道樣がなければ、雨も降らないし、日も照らないし、土だつてどうにもすることは出來ないのだけれど、天道さまの下では、土が何でも育てあげてくれるのだ。俺達人間をも養つてくれるのだ。

さうだ、林檎が見事に實つた。あのぼうつと、夜明方の空の色のやうな、あの紅い黃色い色、なんといふ美しい色であらう。そしてあの

甘いやうな、酸つぱいやうな味、人間の手にあんな結構な味が出來ると思ふか。都の人がどんなに骨を折り、工面をして、旨い菓子や料理を拵へるからと云つて、あの林檎の味に勝るものを拵へることが出來るものか。日本一、いや〳〵世界一の料理の名人だつて、林檎の味程のものを拵へることができるものか。

それはみんな土が拵へてくれるのだ。俺達は一生土の相手になつて、土の仕事を手傳つて來たのだ。その報酬に、土が俺達にこの旨いものを食はしてくれるのだ。俺達山の中の貧乏者でも、土のお蔭で、土の助勢をしたお蔭で、都の金持と同じやうに、この旨いものを口にすることが出來るのだ。いや〳〵恐れ多いことだが、天子樣と御一統、この旨いものを口にすることが出來るのだ。有り難いことなのだ。

爺さんは鍬の手を止めて、腰を伸ばしてあたりを見まはすと、朝

五穀、米、麥、粟、黍、豆、其の他もろ〳〵

の露に濕つた土が、朝日の光を受けて、きら〳〵と輝いてゐるのが見える。爺さんの胸には、益〻感謝と報恩との念が湧く。爺さんは天地の恩惠の輝の中に立つてゐるのだ。

この一生を、鍬をとつて、土の中に立つて過して來た。長いことであつた。俺ももうやがて死ぬのだ。死んだら何になる。土になるのだ。土になつて、大根や、芋や、米や、麥や、林檎を育てるのだ。そして子孫や、世間の人達を養ふのだ。この皺くちやに干からびた俺の五體が、死ねば彼の土になつて、五穀蔬菜を育て上げるのだ。そして人の生命の糧を拵へてやるのだ。俺のやうな碌でもない爺でも、死ねば土になれるのだ。土になれたら、子孫も養へる。天道さまに御恩返しも出來るのだ。

死んだら何になる。知れてゐるではないか、あの土になるのだよ。あの有り難い土、土樣、土なる神樣になるのだよ。（林檎の味）

二一　茶話三題

薄田泣菫（キウキン）

一

マアク、トエン[1]といへば米國切つての滑稽作家で、この人の著作は、日本では學校の教科書にも使はれて居るし、また飜譯もかなりたくさん出來てゐる。この滑稽作家が、或時政治家のデピユウ氏と同じ船に乘つて英國へ渡つたことがあつた。デピユウ氏は一八六六年頃駐日公使として日本にも來たことのある人で、紐育埠頭（ニユウヨウはとば）の自由の像の除幕式には、わざ〳〵選ばれてすばらしい演說をしたこともあるし、また自分の演說集をも出版してゐるしするから、お喋りの多い米國の政治家仲間でも、演說のうまいので聞えた男である。この二人の評判男が乘合はせてゐるといふことは、船出の初からお客達の噂になつてゐたが、船が海へ乘出して二三日すると、

(一) 名は淳介。文學者。大阪毎日新聞記者。

(二) Mark Twain　米國の滑稽小說家。

誰が言出したものか、この二人を招いて一つお話でも承らうぢやないかといふ相談が持上つた。

會はすぐに開かれた。滑稽作家と雄辯な政治家とは主賓として招かれた。主人側の肝煎役が言葉丁寧に二人の卓上演説を促すと、マアク、トエンはやをら起ち上つて、持前の皮肉や諧謔やを取りまぜて二十分ばかり喋つた。演説はすばらしい出來だつた。皆は手を拍つて笑ひ崩れた。そして口にこそ出さないが、こんな感興の後では、デピュウ氏のやうな場慣れた演説家でも、さぞやりにくいに相違あるまいと思つた。デピュウ氏は起ち上つた。

「御主人役を初め淑女紳士諸君……」この名代の演説家は落着き拂つた態度で口を開いた。「今日お招きにあづかつてこの席に參りまする少し前、私とマアク、トエン君とは、一つお互に演説の取換へつこをしてみようぢやないかと申合はせを致しました。只今マアク、トエン君が申し上げましたのが、紛れもない私の演説でございますが、それに對して皆様から過分な御拍手をいたゞいて、私、身に餘る光榮だと存じて居ります。さてこれからお聽きに達しまするのが、實は名譽ある文學者マアク、トエン君の演説なのでございます……。」

かう言つて、デピュウ氏は演説の草稿を取出さうとするらしく、ポケットへ手をやつたが、急にあわてたやうな素振を見せた。

「甚だ粗忽千萬な次第で申し上げにくいわけで御座いますが實はマアク、トエン氏から戴いてゐた演説の草稿を、この隱しに入れたまゝつい紛失してしまひましたので、この場合何一つ申し上げることの出來ないのは、皆様に對して、また友人に對して、甚だ申譯のないことで御座います。」

かう結んで、この雄辯家は腰を下した。皆は一度にどつと笑ひ崩

れた。この滑稽作家はその場の模樣を見て呆氣に取られて、目をぱぱちくりさせてゐた。

次の日マアク、トエン氏が甲板を歩いてゐると、一人の英國人がつか〳〵と近寄つて來た。

その人は昨夜の席で、一番大きな聲で吹出してゐた男だつた。

「先生、昨夜はお氣の毒でしたな。」

その男はこの滑稽作家をいたはるやうに言つた。「ですが評判と事實とは違ふもので、私はあのデピュウさんがえらい雄辯家だとはかね〴〵聞いてゐましたが、先生のなすつたあの人の演說を聞いて、すつかり失望してしまひました。奴さん、よつぽどこゝが惡いやうですね。」

かう言つて、その英國人は太い指で自分の頭を指して見せた。それを見てマアク、トエンは厭世家のやうに悲しさうな顏をした。そ

して又しても眼ばかりぱちくりさせてゐた。

二

先般の歐洲戰爭で、聯合軍側の大立者は、何といつても英國首相ロイド、ジョージ氏を第一に推さなければならぬ。その大立者のロイド、ジョージ氏が威爾斯生れの身長の低い、やつと五尺そこ〳〵の小男だとは知らぬ人が多い。

或年の春、ロイド、ジョージ氏が南威爾斯のある都市へ演說に出掛けた事があつた。無論戰爭に關する演說で、自惚好きな英國人が、首相の口から直接、獨逸文明の、安物の外套のやうに、裏は襤褸つ片であることを聽く爲の催しであつた。

その演說會の司會者といふのは、大のロイド、ジョージ崇拜者で、この政治家の試みた演說は、どんな詰らぬものでも、みんな新聞を切拔いて手文庫へしまつて置くといふ風の男であつた。だが、これ

* Loyd George 英國の政治家。

まで一度も自分の崇拜する人に出會つた事がなかつたので、其の日は朝から胸をわく〳〵させて待つてゐた。

會場には聽衆がぎつしり詰つてゐた。當日の演說家を案內して、會場へ入つて來た脊の高い司會者は先づ起つて、この名高い政治家を聽衆に紹介したが其の中に次のやうな言葉があつた。

「私はふだんから此の偉人を崇拜して居りましたが、正直に申しますと、身體のもつと大きい、見掛の堂々たるお方だとばかし思つてゐましたので、今日初めてお目にかゝつて、實は驚いたやうな始末で……」

次いで起つたロイドジョージ氏は、小さいが、併し胡桃のやうなかつちりした體軀を演壇に運んだ。

「只今承りますと、今日の司會者は、私にお會ひになつて、甚だ失望せられたやうな御容子で、誠にお氣の毒に堪へません。」

と、首相は脊高の司會者の方へ皮肉な目つきを投げた。

「だが、今承つて始めて氣づいたのは、我々の生れた北威爾斯と此方とでは、人間を測るのに標準が異なつてゐるといふことで、南威爾斯では、人間を頤から下の大きさで測るらしいが、私共の北威爾斯では、反對に頤から上の大きさで大小を定める事になつてゐるのです。」

かう言つて、ロイドジョージ氏は、自慢の大きな頭を肩の上で振つて見せた。聽衆は譯もなく嬉しがつて、頤の下の馬鹿に大きい體軀を搖ぶつて喝采した。

三

詰込み主義だとか、鸚鵡流の教育だとか、日本の教育界でよく論議されることだが、何事にも自由な米國でも、教育だけは別だと見えて、近頃かういふ話があつた。

ある小學校の校長は、毎朝課業の始る前に、定つたやうに生徒を講堂に集めた。そして小高い教壇の上に鉛筆のやうに眞直に突立ちながら、咽喉一杯の聲を張りあげて訊いたものだ。

「皆さん、あなた方はかうやつて大勢講堂に集つてゐますが、萬一ひよつとした事で、この建物から火が出たときには何うしますかね。」

成程學校の建物は、校長が火を氣遣ふやうに粗末な木普請で、そこらの柱などは僂麻質斯でも患つてゐるらしく、イヒチオールのやうな茶色の藥で塗りくつてあつた。

それを聞くと、生徒は讃美歌でも唱ふ折のやうに、一齊に聲を揃へて返辭をした。

「先生、私どもは皆腰掛から立上ります。そして一先づ廊下に出て、遽てないで順々に外へ逃出します。」

校長は滿足さうに、ぐつと顎をしやくつた。彼はかういふ風に教へて置けば、いつどんな事が起つても、生徒は滿足に避難出來るものと信じてゐるのだ。

ある日の事、その學校へヴァン、ダイク博士*が訪ねて來た。博士は聞えた著述家だといふので、校長は生徒のために一寸したお話を賴んだ。

ヴァン、ダイク博士は、いつも校長が鉛筆のやうに突立つてゐる教壇に立つた。そして落ちつきのある聲で言つた。

「皆さん、私は博士ヘンリ、ヴァン、ダイクといふ者です。私が今こゝに立つて皆さんのためにお話をするといつたら、皆さんはどうしますか。」

博士はかう言ひさして慈悲の籠つた眼で、ぢつと生徒を見おろした。

* Van-Dyke　米國の學者。

生徒は家鴨のやうにぎやあ〳〵と聲を揃へて言つた。

「先生、私どもはみんな腰掛から立上ります。そして一先づ廊下に出て、遽てないで順々に逃出します。」

ヴァンダイク博士はそれを聞くと、僂麻質斯に罹つたやうに痛さうに顔をしかめた。教壇の下では、校長が火事に出會はしたやうに、眞赤になつて顫へてゐた。（隨筆茶話）

二二　都市美論

佐藤功一*

*早稲田大學教授。工學博士。

一

海外に遊んだ人の多くは、よく古都市の美を口にするが、新しい市街の美を說く人は少い。日本に於てもまた、人はまづ奈良・京都の美を擧げる。私は此の事に就いて決して異議を挿むものではない。しかしながら是等の都市が旅行者の情操を動かすところの動因は、主として歷史的回想であつて、一般施設の合理性や、立體の集合の美ではない。それにはまた、年代を經た都市であるだけに、永い間人間の手のはひらなかつた「自然」のこれを補ふものが甚だ多い。

およそ壯大な趣を與へる都市は平原から段々と高く盛上つた都市にある。平原都市東京の偉觀は實に丸の內附近に集中せられて居るといつてもよい。殊に馬場先から宮城の眺、左に二重橋と右に本丸の櫓を望んで、其の間に連なつた森の茂みの上に碧瓦の隱見する景觀の美は、誰しも口にするところである。私はそれにもまして三宅坂の眺を喜ぶ。それは櫻田門の見付から始る。幾段にも引かれた穩かな水平線の上に高く腕を突き出してゐる松樹、それ等の綠と白壁との反映、一文字に引幕を引いたやうな此の塗壁の盡きる所、そこから青芝の土堤が緩く高まつて、その石垣の上から正門の屋根が覗かれる振天府のあたりは、土堤の一角がずつと前に

突き出して、頂上の石垣の上にむつくり盛上つた森の繁み、其の石垣の上に長い列を作つた木柵が全體の調子を引締める。此のはつきりした畫面が、綠の濠の水に遙かに倒影を作つて居る。しかし實をいふと、此の濠の風情は寧ろ上から見おろした方がよい。半藏門前の堤上に立つた直下の眺、浮島のやうに汀に密叢した樹々の水にさし出た枝振は、春の若葉によく、秋の紅葉によい、翡翠のやうな水の色に是等の樹々が黑い蔭を宿して、そこには水禽の群が小波を漂はし、折々飛立つては白い翼を見せて居る。中景の松の間に見える裁判所の赤い壁もよく、これと濠を挾んで參謀本部の碧い屋根もよい。

しかしながら此の美觀にも、實は自然の大きな影響を受けて居ることを忘れてはならぬ。

大阪中の島公園、北濱から難波橋を渡りながら、そこの左右の眺

(一) Sky-line

(二) Detail 細目。

(三) Plan 設計。

はまたなく美しいものである。左手の廣場の水に近くコンクリートを以てひらたく固めた築堤の上には、曳き舟の綱を肩にした船頭が通り、それと生垣を隔てた低い樹木の向砂地の清らかな運動場には、兒童が遊戲に餘念もない。此處は洪水の折には水につかつて差支ないやうに設計されて居り、綠の木立を通して一段高まつたところには、赤煉瓦の公會堂、其の背後の白い圖書館、高くスカイラインを破つて抽んでた市廳舍の塔など、悉く人工を以て作り上げられた線の變化と立體の集合から成る美だ。橋の右手に低く突き出した島の尖端にも棄て難い趣があり、難波橋がまた相應に意匠を凝らされたものである。建築的デテールに就いては多少の申分こそあれ、これこそ眞に都市の美觀であることを何人にも頷かしめる。朝の靄によく、晝の光によく、夜の灯によい。洵に世界に於ける都市の美觀の一である。私は此の全體のプランを立てた技術家

の手腕に敬服するものである。其處には何等の歴史的回想もなく、何等の傳説をも容れずに、自由の計畫を表現することが出來た。

しかしながらそれは都市の美であるが、街衢の美ではない。半ばは「自然」を取入れて居ることを否む事は出來ない。私は主として總べてが殆ど人間の手に依つてなされる街衢の美を説かうとするのである。

二

昔は東京の名所は上野と淺草とであつた。然るに今日では近代的、人工的の都市建築を喜ぶやうになつて來た。不定形的から形式的、不規則的から規則的へ進んで來た。しかし震災前の東京に於て、眞に定形的、規則的な都市の美觀を持つた處は、纔かに尾張町の交叉點位のものであつた。しかもそれは人も知る如く、外國の都市に比して甚だ貧弱なものであつた。

歐米各國到る所の都市に於ては、斯くの如き主要な交叉點には意を用ひて居る。其の整頓と美觀とは、都市自身の誇のために、市民の教養と愉樂とのために、都市計畫上に於て極めて重要なものである事を知らねばならぬ。復興の帝都に於ては、東洋第一の市街として恥ぢぬやうに、壯觀な建築美を有する街巷と、整然と計畫せられた廣場が欲しいものである。

湛へられた清冽の水ほど人の心を澄ませるものはない。滑らかに動いてゐる水ほど人の心を柔らげるものはない。勢鋭く噴出する水ほど潑剌たる快感を起させるものはない。噴泉の美は之を木立の間に眺めるよりも、甃や舗石に疊まれた大地に、石や煉瓦の建物を背景として觀るがよい。世界に名ある廣場は殆ど斯くの如き噴泉を有して居る。倫敦より巴里に移つて噴泉の美觀に驚く人は、更に羅馬に遊んで其の驚を深くする。都市の廣場には噴泉は缺く

べからざるものである。殊に暑い國に於て其の然る所以を覺える。晝の賑ひにふさはしいのみならず、夜間人定つて、電燈の下に水滴を聞き飛沫を眺めるによい。

私共の少年時代の小學讀本には、東京の繁華を說くに、電線は蜘蛛の網の如くとあつた。それは當時にあつてこそ物珍しかつたに相違ない。併し今日に於ては、これ等は速かに地下線に改めらるゝ必要がある。更に電車は總べて架空線を廢して、地下線式に、若しこれが不可能ならば、或線路だけでも地下電車に改め、他を自動車を以て代らしむる事である。若し街路を走る自動車の總べてを、不愉快な音響を發せぬ電氣自動車になす事が出來れば、また更にこれに過ぐるものはない。斯くの如くして整理せられた路面を、土瀝青を以て鋪裝し、夜間交通の少き時刻に於て清淨にこれを水洗し、戰前の伯林市街のやうに、鏡の如く人馬の影を路面に投映すること

が出來たならば、どんなに美しい事であらうか。整理と清淨とは都市美觀の重要なる要素である。

三

私は餘りに多く視覺の美を說いた。都市の美に對しては、其所になほいふべき聽覺の美が存する。カンパニーレ(一)から鳴り渡る晚鐘の諧調にアベマリヤ(二)を稱しつゝ寺をのぞんで默禱したのは、中世紀の伊太利市民であつた。ベッフロイ(三)から遙かに漂ふ鐘の響に、町の廣場を指して集つたのは、復興期のニーデルランド(四)の市民である。彼等にとつては此の鐘の音が、何物にも勝つた力强い、そして美しい情緒を心に懷かせてくれたものであつた。しかしながら現代の大都市に於ては、最早斯くの如き事を望むのは不可能である。都市を音に依つて美化するものは、第一に公園地に設置せられる大奏樂堂であらう。東京位の大都市に於ては、少くとも三四個所の大

(一) Campanile　伊太利ピサに在る鐘樓の名。
(二) Abe-maria　キリストの聖母
(三) Beffroy　ニーデルランドに在る寺院。
(四) Niederland　オランダ。

奏樂堂が設けられねばならぬ。戰前の獨逸都市は最も力をこれに注ぎ、毎年夏季には音樂のシーズンが始る。公園内の青葉の影とか、(一)レスタウラントの庭内喫茶所とかで、家族と共に晩餐を取りながら、靜かに美妙な諧音に聽きとれる。それは極めて平民的で、決して浪費的な事ではない。日本の都市も早く斯くあらしめたい。

私は、街路の交叉點に挾まれる主要部分に、市民のために美術的建築の建てられる事を望んで居る。日本の都市に於ては、多くの爲すべき事に追はれて、是等の問題が閑却されて居る。併し都市の美觀は都市生活の重要なる要素である。美は後から附けた修飾であつてはならぬから、その根本計畫に於てこれを度外してはならぬ。(二)アゼンスの全盛時には(三)アクロポリスの美觀に力めた。羅馬が盛であつた當時は、市民は羅馬市の裝飾に全力を盡くした。東洋の諸都市に於ても亦同樣である。伊太利を始として歐洲の諸都市は、中世

(一) Restaurant

(二) Athens

(三) Acropolis　ギリシヤのアゼンス市の中心にあり優れたる建築彫刻等を以て飾られたる處。

紀の後半から殷賑を增し來つて、市民は都市裝飾に意を用ひ始めた。文藝復興期に及んで益ゝ此の傾向が高まつた。さうして漸次に今日に至つたものである。しかも近代科學の勃興と經濟の發達とは、都市の交通と保安と衞生とが重要視せらるゝに至つた故に、獨逸諸都市の如きは、公共藝術や街衢の壯麗を恰も產業の資本の如くに見て、市の美觀を增すことは市の發展上缺くべからざる事として居た。市民は演奏場・劇場・花園・美術館・博物館等に對する支出に不賛成を唱へぬのみか、街路を飾り、銅像を建て、噴泉・時計塔等の增設に努力した。橋梁・停車場其の他の公共建築物は、如何に小なるものと雖も、悉く甚大の注意を以て意匠せられた美術的產物であつた。これに依つて、人口は增殖し商業は發展すると深く信じて居た。又實に斯くの如くにして都市は益ゝ發展し、產業は殷盛となり、地價は上騰し、市の收入は增加し、市民の稅率は低下した。市中は整頓して

観光客を歡ばしむるのみならず、市民に對して慰安を與へ、同時に教化に役立つた。都市の美觀が市民の慰安の上にも健康の上にも、精神的向上の上にも、隨つて風紀の上にも、更に經濟の上にも重要なるものである事に就いては、最早言を費す必要はなからう。

四

此の稿を書き終らうとする日の午後、日比谷の第一中學の前から凱旋道路を通つて、二重橋外の宮城外苑に出て、そこから夕日に輝く丸の内の大建築の集團を眺めて、其の壯觀に魅せられた。こんな美觀を今まで見落して居たのか、それとも今日は頭の具合でさうなのか、長く書齋に籠つて東京の市街の貧弱を心に描いてゐたためか、それともまた、夕日が殊によかつたのか。淡ぼかしの黑煙を背景に、鱗雲の輕くたゞよつた空の下に、廣場の松の上遙かに浮かび出てゐる壯觀を見て、私は思はずも會心の笑みをもらした。若しこれに民族性の豐かな表現があれば一層よいと思つた。しかしそれはいふべくして俄に行ひ難い事であるが、將來櫻田門から霞ケ關臺の議院建築の眺は美しいものになるであらう。櫻田門と議院とを結び付け霞ケ關離宮と陸軍省との間を貫通して大道路が設けられ、其の兩側に諸官省が並ぶ計畫が實行されたら、三宅坂の景觀と相待つて、此處にこそ眞に帝都として耻づかしからぬ東京の壯觀が望み得られるに相違ない。一日も早く其の完成を見たいものである。（中央公論所載の文に據る。）

二三　三人の訪問者

島崎藤村

一

「冬」が訪ねて來た。

私が待受けて居たのは正直に言ふと、もつと光澤のない、單調な、

眠さうな、貧しさうに震へた醜く皺枯れた老婆であつた。私は自分の側に來たものの顏をつく〴〵と眺めてまるで自分の先入主となつた物の考へ方や、自分の豫想して居たものとは反對であるのに驚かされた。私は尋ねて見た。

「お前が『冬』か。」

「さういふお前は一體私を誰だと思ふのだ。そんなにお前は私を見損なつて居たのか。」

と「冬」が答へた。

「冬」はそれから毎年のやうに訪ねて來たが、麻布で冬籠りするやうに成つてからは一層この訪問者を見直すやうになつた。「冬」で思ひ出す。かつて信濃で逢つた「冬」は私に取つて一番親しみは深い。毎年五個月の長い間も私は「冬」と一緒に暮した。けれどもあの山の上では一切のものは皆潛み隱れてしまつて、ついぞ私は「冬」の笑顏といふものを見たこともなかつた。十一月の上旬といへばはや山々へは初雪が來た。そして暗く寂しい雪空に日のめを仰ぐことも稀な頃になると、淺間の煙も隱れて見えなかつた。千曲川の流ですら氷に鎖された。私の周圍には降積る深い溶けない一面の雪があるばかりであつた。その雪は私の舊い住居の庭をも埋めた。どうかすると北向の緣側よりも庭の雪の方が高かつた。軒に垂れる劍のやうな氷柱の長さは二尺にも三尺にも及んだ。長い寒い夜なぞは凍み裂ける部屋の柱の音を聞きながら、唯もう穴に隱れる蟲のやうに小さくなつて居た。

此の「冬」が私には先入主となつてしまつた。私はあの山の上で七度も「冬」を迎へた。私の眼に映る「冬」は唯灰色のものだつた。巴里の方で逢つた「冬」はそれほど雪深いものではなかつたが、でも灰色な色調に於ては、信濃の山の上に劣らなかつた。私は遠い旅から歸つて、

久しぶりで自分のところへ訪ねて來て吳れたものの顏を見た時、それが「冬」だとはどうしても信じられないくらゐに思つた。

遠い旅から歸つて三度目の「冬」を迎へた年ほど私も常磐樹の若葉をしみ〴〵とよく見たためしはなかつた。今まで私は黃落する霜葉の方に氣を取られて、冬の初に見られる常磐樹の新葉にはそれほどの注意も拂はずに居た。あの初冬の若葉は一年を通して樹木の世界に見る最も麗しいものの一つだ。「冬」はその年も槇の綠葉だの、紅い實を垂れた萬兩などを私に指して見せた。萬兩の實には白もある。あゝいふ濃い珠のやうな光澤は冬季でなければ見られない。あの槲の樹を御覽と云つて「冬」がまた私に指して吳れたのを見ると、黑ずんでしつかりとした幹や、細くても强健な姿を失はないあの枝は、まるでゴシック風の建築物に見る感じだ。おまけに冬の日をうけた槲の若葉には言ふに言はれぬ深い輝があつた。

「冬」は私に言つた。「お前は是までそんなに私を見損つて居たのか。今年はお前の小さな娘のところへ土產まで持つて來た。あの兒の紅い頰桁もこの私の心ざしだ。」と。

二

「貧」が訪ねて來た。

子供の時分からの馴染のやうな顏附をした此の訪問者が、また忸々しく私の側へ來た。正直に言ふと、この足繁く訪ねて來る客の顏を見る度に、私は「冬」以上の醜さを感じて居た。「お前とは舊い馴染だ。」とでも言ひたげな此の客に對したばかりでも、私の頭は下つてしまつた。とても私には長くこの客を眺めては居られなかつた。その私が自分の側へ來たものの顏をよく見て居るうちに、今まで思ひもよらなかつたやうな優しい微笑をすら見つけた。私は以前に「冬」に言つたと同じ調子で、この客に尋ねて見ずには居られなかつ

た。

「お前が『貧』か。」

「さういふお前は私を誰だと思ふ。そんなに長くお前は私を知らずに居たのか。」

と「貧」が答へた。

「めづらしいことだ。今まで私はお前の笑顔といふものを見たこともない。お前にそんな笑顔があらうとは、思つて見たことすら無い。私はお前が笑はないものだとばかり思つて居た。稀にお前に笑はれると、私は身が縮むやうに厭な氣がしたものだ。唯、私はお前に忸れたかして、お前が側に居て呉れると、一番安心する。」斯う私が言ふと、「貧」は笑つて、

「私に忸れてはいけない。もつと私を尊敬して欲しい。よく私に清いといふ言葉をつけて、『清貧』と私を呼んで呉れる人もあるが、ほ

んたうの私はそんな冷やかなものでは無い。私は自分の歩いた足跡に花を咲かせることも出來る。私は自分の住居を宮殿に變へることも出來る。私は一種の幻術者だ。斯う見えても私は世に所謂『富』などの考へよりは、もつと遠い夢を見て居る。」

三

「老」が訪ねて來た。

これこそ私が「貧」以上に醜く考へて居たものだ。不思議にも「老」までが私に微笑んで見せた。私はまた「貧」に尋ねて見たと同じ調子で、

「お前が『老』か。」

と言はずには居られなかつた。

私の側へ來たものの顔をよく見ると、今まで私が胸に描いて居たものは眞實の「老」ではなくて、「萎縮」であつたことが分つて來た。自分の側へ來たものは、もつと光つたものだ、もつとありがた味のあ

るものだ。

しかし此の訪問者が私のところへ來るやうになつてから、まだ日が淺い。私はもつとよく話して見なければ、ほんたうに此の客のことは分らない。唯、私には「老」の微笑といふことが分つて來ただけだ。どうかして私は此の客をよく知りたい。そして自分もほんたうに年を取りたいものだと思つて居る。

まだ誰か訪ねて來たやうな氣がする。それが私の家の戸口に佇んで居るやうな氣がする。私はそれが「死」であることを感知する。恐らく私が以上の三人の訪問者から自分の先入主となつた物の考へ方の間違つて居たことを敎へられたやうに、「死」もまた、思ひもよらないことを私に敎へるかも知れない。（飯倉だより）

二四　微妙な心境

相馬御風*

*名は昌治。文學者。早稲田大學出身。

「六七尺も積つてゐた雪が、いつの間にかすつかり消えてしまつた。解けた雪は解けるあとから殆ど全く人間に氣付かれずに、或は蒸發し、或は大地に吸ひこまれ、或は流れ去つて、どうして無くなつたか分らぬやうに、無くなつてしまつた。」――私は嘗てこんなやうな事を何かのついでに書いたやうに記憶する。まつたく深く積つた雪は、不思議なほど穩かに靜かに消えてゆくものである。いつの間に消えてしまつたのだらう。」――こんな驚を年々新しく感じないでは居られぬほどに、それは人間の目に觸れぬ靜けさ、穩かさを以て消えて行くのである。

雪の多く降らない地方の人達の口から、私達はよくこんな質問を受ける。

「こんなに澤山の雪が一時に消出したら、大變なことになりませんか。毎年こんなに澤山雪が積つて、それでよく洪水にならないも

のですね。」

いかにもこれは尤な疑問である。經驗のない人の眼で見たら、さうした不安の伴なふのも無理はない。けれども、雪國に住慣れた人達は、そんな不安を夢にも感じたことはない。彼等はそれほどまでに安んじて自然に信頼してゐる。

北國の雪

これは雪の降積るのに對しても同じである。冬になつて、始めて雪が七八寸も積ると、毎年同じやうに、私達は慌ててそれを掻分けて道をつけたりするが、一尺積り、二尺積り、だん〳〵深くなつて行

くに連れて、私達の心も日一日と雪に對して平氣になつて行く。どうにもしやうがないと云ふ氣になり、「いくらでも降りたいだけ降り、積りたいだけ積るがいゝさ。」と云ふ氣になる。本當の冬籠りらしい落付いた氣持のして來るのも、さうなつてからである。そしてもう其の頃になると、誰一人「寒くて困る。」とか、「こんなに雪が積つてどうなるのだ。」などと云ふ者がなくなる。寧ろ人々は雪のおかげで屋内の生活に落付の出來たことを喜んで、「いよ〳〵これからが本當の休養期だ。」と云つたやうな氣持になる。良寛和尚の歌の

さよふけて岩間のたきつ音せぬはたかねのみゆきふりつもるらし

かう云ふ寂しい安らけさも、往來の道の跡も絶える程に、どつしりと雪が積つた上でなければ、得られないのである。

「こんなに深く雪が積つてしまつては、もうどうにもしやうがな

※俗名は小川作左衛門。天保二年寂、年七十四。

い。」――さう云つたところまで行つて、始めて人々の氣持が、本當に冬籠りらしい安らけさを得る。家の內部が急にほの〴〵とした溫かさを呈して來る。天候の險惡や、寒氣の烈しさなどが問題にされなくなる。毎年のことではあるが、私はさういふ氣持の推移に限り無い興味を覺えてゐるのである。そしてそのことについて、何かと考へさせられもするのである。

今も私はそのことについて、いろ〳〵のことを考へてゐるうちに、ふと數年前此の地方が海嘯といつてもよいほどの激浪に襲はれた當時のことを想ひ出した。そしてその頃、東京の或友人へ宛てた手紙に、左の如き意味のことを書いたのを想ひ出した。

「……先頃此の地方一帶が、恐しい海嘯に襲はれた當時のことは、君も新聞や何かでほゞ知られたことと思ふ。僕も生れて初めて、あんな猛烈な風浪に出遭つたので、一時はひどく愕かされた。交通機關や通信機關は一時全く杜絶したので、他の地方の樣子は知れなかつたが、僕のところだけでも、隨分すさまじい光景だつた。浪は町中へまでもぶち込んだ。川といふ川は全部出口が砂で埋つたので、山寄りの方からは、洪水が攻めかけて來た。避難の途は全く塞がれてしまつた。電燈は二晩と云ふものは全くつかなくなり、ランプも火災の危險があるので、點火することが出來ず、眞暗な家の中で、辛うじてつけられた蠟燭の明りの周圍へ、家族一同が頭を集め、身を縮めて、二晩といふものは、全く眠らずに夜を明かした。絶間のない暴風雨に、家は今にも覆されるかとばかりに、物凄い響を立てて搖れ續けた。子供や女や老人は、外へ出ようにも出られなかつたが、若い男女はそれでも急設の防波工事のためや、浪と洪水との模樣を見るために、戸外へ出て働いたり、見廻つたりした。事態は刻々に危險に瀕して行つた。併し策の施

しやうはなかつた。それでも始のうちは皆、うろたへ廻つたり、叫んだりして、たゞ〳〵恐怖の擒となつてゐたのであるが、いつとなしに人々の心には、一種の沈んだ靜かな諦のやうな落付が出て來た。泣きわめいて居た子供等さへも、晝はすさまじい響と動搖との中に遊び戯れ、夜は物凄い暗黑と怖しい動搖との底に眠るやうになつた。かうして荒れ狂つた世界のうちに、一種の嚴肅な靜けさが、いつとなしに感じられるやうになつた。此の靜けさは、戸外へ出て浪と嵐とに對して働いてゐる者にも、いつとなしに感じられるやうになつた。人々はあわてなくなつた、あせらなくなつた、怖れなくなつた、愕かなくなつた。」

その動亂の底に感じられた一種の嚴肅な靜けさ――あの折私の得た體驗が、私の心に稀有な深い影響を與へた事を、私は否むことは出來ない。避難の途の全く絶えてしまつた、あの怖しい自然の威嚇の下にありながら、どうして私達はあのやうな靜かな安らかな氣持に住することが出來たのであらう。常時にあつてさへ、時には一寸した事を氣にして眠ることの出來ない夜のあるやうな私達が、あれほどの危險に瀕してゐながら、どうしてあのやうな穩かな睡眠を得られたのであらう、何がそのやうな力を私達の心に與へたのであらう。

私は更にあの場合、こんなことをも友達に書き送つた。

「僕は嘗て此の地方の人々には、一體に現世の勞苦に對する根强い忍從性と、運命に對する不思議なほどゆつたりした一種の悟に近い辛捧强さとが、著しい特性を示してゐると云ふ事を云つた事があるが、それは取分け此の邊の漁夫の間にきはやかに見られるやうだ。彼等の間からも、無論生れた土地を離れて行く若者などが、年々多少はあるけれども、概して云へば、彼等は此の荒

海を相手として生活を持續して行くことに、一種の愛着を感じてゐるやうにさへ見える。先頃のあの海嘯の後をうけて今年の冬ぐらゐ海荒れの日の續いた年は、此の數十年一度もなかつたと云はれたのであるが、さういふ永い不漁期に遭遇しても、彼等は一向に海に對して愛想をつかさなかつた。『時にはこんなこともあるものだ。』と云ふやうな落付いた態度で、狼狽へずに凪を待つだけの心の根强さを彼等の多くは持つてゐる。併しそれは必ずしも、あがいても、もがいても、仕方がないと云ふだけの消極的な引きずられ方ではないやうである。僕は彼等のさういふ心持に、少からず僕などの學ぶべきものがあるやうにも思つたのだ。」

まつたく、自然に對するさうした根强い心の力は、どこからどうして出て來るのであらう。何がそのやうな力を彼等の心に養つてくれるのであらう。私は此の問題に逢着するごとに、いつも運命と人間との關係、自然と人間との關係のいみじさを今更の如くに痛感せずには居られぬのである。

人間生活の現象は宿命的なものであり、決定的なものであるとか、又はそれは自由意志的なものであるとか云ふやうに、運命と人間との關係や、自然と人間との關係を一方へ片付けた觀方で考へることは、私には出來ない。或時は、私は自分の生活はすべて宿命的であるやうにも思ふ。而も又或時には、あらゆる生活現象は自分の意志一つでどうにでもなるやうにも思ふ。運命が、自然が、私達に向つて働きかける力は、私達の力ではどうにもならない。而も其のどうにもならない自然に對して、私達はそれをどうにもならないとして一切を投出す時、不思議に私達の心は何物にも亂されない安らけさを得て來る。それは自分が運命に屈伏されたのでもなければ、又自分の方から運命を征服したのでもない。一種不思議な微妙

な心境である。（對山雜記）

二五　俳句評釋

沼波瓊音(一)

俳句といふものは、どうも初の中は何だか分らない。テニヲハ等も省いてありますし、片語のやうでもあり、判じ物のやうでもあり、或は謎であると云ふやうな感覺を誰も持つものでありますが、決してさうでないのです。俳句を味はふのにはさつぱりと理窟を除けて仕舞つて、二と一を加へれば三であると云ふやうな、さういふ理窟は除けて仕舞つて、時に依れば二と一を加へて五になると云ふことも認識しなければならぬ。詰りさういふやうな實際の理窟に於てでなくて、直覺的の感情を基として、作りもし、又味はひもするものでありますから、其の御心持で御聽きを願ひたい。

梅一輪一輪ほどのあたゝかさ　嵐雪(二)

(一) 名は武夫。東京帝國大學講師。

(二) 服部氏。俳人。蕉門十哲の一人。寶永四年歿、年五十四。

是は名高い句でありますが、「一輪ほど」であるか、「づつ」であるか、何方が宜しいかは、人がよく疑ふのであります。「一輪ほど」が宜しいのであります。此の句はよく小學讀本などにも出て居る位で、非常に有名な句であります。能く分り易い句であるのです。春の初の景色でありまして、昨日梅が一輪咲いた、今日見たら又一輪咲いて居つた、昨日よりは今日が大分暖くなつた、又明日も更に暖かになると云ふ、段々段々と徐に溫度が增して暖かになります春の初である。梅も一輪一輪づつ咲いて行く、梅の咲くのと溫度の增すのとが相並行して進んで行く所の春の初の景色を寫したのであります。斯ういふ句は梅が一輪咲いた、さうしたらば溫度が三度なら三度進んだ、又一輪咲いたら、今度又三度進んだと云ふ風に、下手に詠みますと理窟に陷つてしまつて面白くないものになりますが、此の句などは少しもさういふ嫌がありませぬ、さういふ瑾がない。すらり

として居りまして、「梅一輪〳〵ほどの暖かさ」何の苦もなく詠んでありまして、さうして如何にも春の有様を感ずるやうな心持がするのです。

大原や蝶の出て舞ふ朧月　丈草[1]

大原の春の夜の景色であります。朧月夜に蝶が出て舞つて居るのです。朧月夜に大原の景色を見ると、一面に霞んで居る朧月で、ぼうつとして居る所に蝶が舞つて居る。蝶の色も何も能く見えない。唯朦朧たる中にちら〳〵蝶が舞つて居る姿が見えると云ふ景色であります。此の句を芭蕉が見まして、成程是は佳い句であるらしい。併し蝶が舞ふと云ふことは何うであらうか。今の言葉で云へば、夜蝶が出ると云ふことは不自然ではないかと云ふことを芭蕉が言ひました。所が、丈草の申しますには、現に私は大原を通つて夜蝶が出て舞つて居るのを見ましたと言つたのです。さうしたら芭蕉

(一) 内藤氏。俳人。蕉門十哲の一人。寶永元年歿、年四十五。

が、それならば此の句は實に秀逸だ、實に佳い句であると云つて賞めたさうです。是は丈草が實際見たと云ひますから、夜蝶が出て舞ふことがあるものと見えます。夜蝶が出て舞つて居るといふ事が神韻縹渺たる趣を成して居ります。

春の水山なき國を流れけり　蕪村[1]

所謂舊派の人は、蕪村の句を好かぬのでありますが、此の句の如きは舊派の人にも賞められて居るのであります。「春の水」と云ふのは俳句の一つの題になつて居ります。春の水は、春の河でも、春の湖でも、何でも宜しうございます。溫かさうに流れて居る春の水を總稱して春の水と云ひます。此處では川でありませう。春の川が廣い廣い限りなく廣い平野を遙かに遠く流れて居る所を見渡した景色であります。「山なき國」と云つてあるが、若し之を廣き野原としたらどうでせう。「春の水廣き野原を流れけり」見て居る景色は同じで

(一) 谷口氏。又與謝氏と稱す。俳人。天明三年歿、年六十七。

ありますが、「廣き野原」と「山なき國」とは感じに非常な違がありますの。實際描いて居る景色は同じでも、言葉の遣ひ方で大變違ふ。此の方が大變強い感覺を與へます。

痩蛙負けるな一茶これにあり　一茶(一)

例の通り一茶の滑稽的の俳句であります。一茶と云ふ人の生涯は涙の生涯であります。幼少の時に母を失ひまして、非常に苦しい慘酷な家庭に育つた人であります。江戸の昌平黌の小使にも來て居つたと云ふ話であります。非常に難儀をした人でありますから、弱い者に大變同情を持つて居る人である。殊に孤兒などに大變同情を持つて居る。廣く子供といふ者に同情を持つて居る。進んでは動物にも同情を持ち、植物にも同情を持つて居ります。ですから、此の句なども、單に滑稽のみでなく、裏面には一茶の溢れる如き同情が見えるのであります。是は蛙合戰が始つて居る、その中に痩せこ

(一) 小林氏。別號は俳諧寺。文政十年歿、年六十五。

けた蛙が出て、それが非常に苦戰に陷つて居る、其處で例の同情心で、一茶が痩蛙の肩を持つて、負けるな、負けるな、俺が此處に居ると云つて頑張つて居る所であるのです。一寸したポンチ繪のやうな有樣が目に浮かびます。何だか一茶までが痩せた人であるらしくも思はれます。

卯の花に月毛の駒の夜あけ哉　許六(一)

是は綺麗な極彩色の土佐畫か何かのやうな景色であります。卯の花の所に月毛の駒が居つて、さうして其の時が夜明であるといふ、活動は餘りないですが、綺麗な句であります。此の句に就いて面白いことがある。去來が斯ういふ趣向を前から考へて居つて、句にしようと思つて居りました所が、「有明の月に乘りこむ」と作つて、其の後がどうもうまく考が付かない。「月毛馬」とやつて見たが、工合が惡い。「葦毛馬」と云つてもをかしい。では、「の」の字を入れて見ようかと

(一) 森川氏。蕉門十哲の一人。正德五年歿、年六十。

云ふので「月毛の駒」「葦毛の駒」と云つて見たが、どうも工合が悪い。どう考へても出來なかつたものですから、終に其の句を棄てた。其の後に許六が同じ趣向で、此の「卯の花に月毛の駒の夜明かな」と、何の苦もなく作つたのを見て、自分は短才であると云ふことを悟つたと云つて、自白して居ります。

(一)榎本氏。蕉門十哲の一人。寛永四年歿、年四十七。

其角

聲かれて猿の齒白し峯の月

これは深山の月夜に猿が啼いて居る。其の猿は啼いて啼いて啼きしはがれて聲が高く立たないやうになつて居る。其の猿の齒が月に映じて眞白に見えると言ふ、其の凄味を詠んだのであります。かういふ景色は「巴峽秋深、五夜之哀猿叫月。」などと能く詩などにもあります。其角は其の詩の趣から、此の句を取つたのでありませう。猿の齒を取立てて白いと云つた所に、其角の強みが現れて居ります。(三)俳諧古選の評には「渾雄、惜哉不令此老從事於詩。」と言つてあります。

(二)瑤臺霜滿、一聲之立鶴唳天。巴峽秋深、五夜之哀猿叫月。(和漢朗詠集)

(三)三宅嘯山著。

す。

言水

木枯の果てはありけり海の音

木枯が長く長く吹續いて居る。非常な音をして吹いて居る。其の内に暮方にでもなりましたらうか、其の木枯が止んだのです。世間が靜かになつた。さうすると、向の方でごうつと云ふ音がする。それは海の浪が未だ騒いで居るのであります。さういふ所を詠んだのであります。詰り木枯が非常な勢で吹いて、吹き鎭つたが、其の結果は海の音となつたと云ふことである。此の句は當時大變評判な句でありました。今日讀んで見ても矢張よいやうであります。其の爲に作者は木枯の言水と云ふ異名を附けられたと云ふことであります。いつぞや竹冷子などが開かれました俳諧溫古展覽會に、言水の書きました此の句の短册が、何でも三つか四つか列んで居りました。傍の人は皆眞筆らしいと云ふことを言つて居りました。自分

(四)池西氏。享保四年歿、年七十二。

(五)角田眞平。大正八年歿、年六十四。

も此の句を得意になつて書散らしたものだと見えます。

旅に病んで夢は枯野を駈廻る　芭蕉(一)

これは芭蕉が病氣になつて、――最後の病氣です――その病中の吟であります。芭蕉は元祿七年十月の十二日に歿して居ります。此の句の出來たのは八日です。芭蕉の最後の句であります。此の句意は、旅行中に病氣になつて、それが大變重くなつて、心も確でない。夢うつゝの境に彷徨うて居る。其の時夢心に枯野を駈廻るやうに感ずると云ふのです。重い病氣をやつた方は心持がむしやくしやして、物が分らなくなつて、非常に煩悶するやうな場合に、かういふやうな感覺の御經驗があるでせう。此の句は、初には、

旅に病んで枯野を廻る夢心

と、かうしましたが、いろ〳〵側に居る人と相談をしたり、自分も考へて、「旅に病んで夢は枯野を駈廻る」と直したのであります。其の重

(一) 松尾氏。俳諧蕉風の祖。元祿七年歿、年五十一。

患に罹つて苦しんで居る中にも、此の最後の句をさういふやうに推敲して居つた。如何に此の詩人が斯道に忠實であつたかと云ふことが分ります。

雪の降る晩に、誰か訪ねて來た。とん〳〵と門を叩きますから、應應とこちらで返事をして居る。返事をしても尙頻りに叩くと云ふ句意であります。此の句は家の中に居つて應々と云つて居る人から詠んだ句である。其の叩くのは寒氣に堪へかねて叩くのでもありませうし、又雪の爲に聲が聞えませぬから、それで頻りに叩くのでもありませう。謠曲鉢の木にも、「餘りの大雪に申すことも聞えぬげに候。」とある。非常に雪が降ると、聲が聞えませぬ。それで叩く。兩方の意がありませう。大雪の態をよく現して居ります。此の句に就いて俳諧蒙求にこんな話が載つて居ります。去來が嵯峨に居つた時

應々と云へど叩くや雪の門　去來(二)

(二) 向井氏。蕉門十哲の一人。寶永元年歿、年五十三。

(三) 岡西惟中著。

に、此の句が出來た。非常に大得意で、絶唱だと自分も思つた。雪でも降らないか知らんと思つて居たが、其の日の夜になつて大雪が降つて、一尺ばかりも積つた。是は好い鹽梅だと思つて、木節(一)と云ふ俳人がありますが、早速其處へ訪ねて行つた。戸を叩いてもなか〳〵開かない。是は故意に聞えぬやうに叩いたかも知れませぬが、頻りに叩いて、遂に中へ這入つて此の句を出した。さうしたらば、「木節大に驚き手を打つこと數十、跳り上りて狂するが如し。近來の耳を洗へり。絶唱々々と稱す。去來も自負して、蕉翁死後此の句を得て、生前に耳を驚かさゞること口惜しといひき。」と云ふことが出て居ります。此の話の眞僞は兎に角、餘程面白い句であります。（俳諧講演集）

(一) 芭蕉の門人。醫を業とす。

二六　天杯下賜

天杯御下賜。

母上様、おめでたう存じます。遙かに御祝ひ申します。御大禮に就いて、八十歳以上の高齢者に天杯御下賜の御沙汰のあるといふことが新聞紙上に傳へられますと、私は飛立つやうに喜びました。あなたも今年は八十歳、必ず御沙汰には洩れられまいと、取敢へず兄様に御悦を申し上げて置きました。すると、兄樣の御返事に、滿八十歳に六個月不足するため、殘念ながら選定に洩れられたとありました。私は落膽してしまひました。ところが翌朝の新聞に數へ年で宜しいから調べ直せとの恩命があつたといふ記事が出たのを見まして、私は全く蘇生の思を致しました。

蘇生と申せば、私は想ひ出します。一昨年の夏、あなたが九死一生の御大患にお罹りになつた時、私はあなたの許に駈附けて、あなたの枕に取りついて、「お母様、あなたは私の力です。」と無我夢中に叫びました。其の聲が昏睡狀態のあなたの耳に響いて、此の皺くちやの

老婆を子なればこそお前は力とも思つて居るかと、それから御心の中に再生を氏神様に御祈願になり、奮發して藥も召上り、お粥もお啜りになり、そしてあれほどの大患から御回復なさつたと、斯う後日あなたから承りました。私は彼の刹那、何と申し上げたか記憶は御座いませんが、併し母上様、今もあなたは私の力ですよ。

ふる里に老いたる母のいますなりいたくな吹きそ秋の夕風

子の至情です。

あなたは片田舎に名も無く御暮しになつてゐても、陛下の御慈しみの露はかゝりました。愛撫の御手はあなたの御頭に及びました。私は感涙に咽びました。それと共に慙汗は背を濕すのです。これ迄の永い間に、私は葉書一枚で濟むのに御機嫌を御伺ひすることを怠り、十分で事足るのに、多忙に口を藉りて御音信を缺いた事が、どれだけあつたでせう。そんな時でも、あなたは唯「いやな夢を見たが、達者で暮してゐるか。」と御尋ね下さいました。何といふ不孝でせう。今度といふ今度、始めて私は親に事へる道に目が覺めました。どうぞ行末長く御達者でゐて下さいませ。あなたは私の力です、私の生命です。

別封、少額ながら御祝に差上げます。一部で氏神様に御神酒を上げて下さいませ。その餘りで、御友達や御近付の方々に御祝に一杯差上げて、そして陛下の萬歲を御祝ひ下さいませ。

御大禮の前々日　（八波則吉の文に據る。）

二七　橋辨慶（謠）

西塔辨慶
從者
シテ（前後）
トモ
子方　牛若

＊第五高等學校教授。

【國語讀本卷二、四、「ウシワカマル」參照】

（能樂）（素謠）

シテ詞「是は西塔のかたはらに住む武藏坊辨慶にて候。我宿願の仔細有つて、五條の天神へ、丑の時まうでを仕り候。今日滿參にて候程に、唯今參らばやと存じ候。如何に誰かある。トモ詞「御前に候。シテ「五條の天神へ參らうずるにてあるぞ。其の分心得候へ。トモ「畏まつて候。又申すべき事の候。昨日五條の橋を通り候處に、十二三許りなる幼きもの小太刀にて切つて廻り候は、さながら蝶鳥の如くなる由申し候。まづ〳〵今夜の御物詣は、思召し御止りあれかしと存じ候。シテ「言語道斷の事を申すものかな。譬へば天魔鬼神なりとも、大勢にはかなふまじ。おつ取りこめて討たざらん。トモ「おつ取りこむれば不思議にはづれ、敵を手元に寄せ付けず。シテ「手近く寄れば、トモ「目にも、シテ「見えず。地「神變奇特、不思議なる化生のものに寄せ合はせ、かしこう御身討たすらん。都廣しと申せども、是程の者あらじ。げに奇特なる者かな。

橋辨慶

シテ詞「さあらば今夜は思ひ止らうずるにて有るぞ。いや辨慶ほどの者の聞逃げは無念なり。今夜夜更けば、橋に行き、化生の者を平げんと、地「ゆふべ程なく暮方の雲の氣色も引きかへて、風すさまじく更くる夜を、遲しとこそは待ち居たれ。

牛若「さても牛若は母の仰の重ければ、明けなば寺へ上るべし。今宵ばかりの名殘なれば、五條の橋に立出でて、川波添へてたちまちに、月の光を待つべしと、一聲「ゆふ波

の氣色はそれか、夜嵐の夕べ程なき秋の風。地「面白の氣色やな、そゞろ浮立つ我が心。波も玉散る白露の夕顔の花の色、五條の橋の橋板をとゞろ〳〵と踏みならし、音も靜かに更くる夜に、通る人をぞ待ち居たる。

シテ詞「既に此の夜も明方の、山塔の鐘もすぎまの雲の光かゞやく月の夜に、着たる鎧は黒革のをどしにをどせる大鎧、草摺長に着なしつゝ、素より好む大長刀、眞中取つて打ちかづき、ゆらり〳〵と出でたる有樣、如何なる天魔鬼神なりとも面を向ふべきやうあらじと、我が身ながらも物賴もしうて、手に立つ敵のこひしさよ。

牛若「川風もはや更け過ぐる橋の面に、通る人もなきぞとて、心すごげに休らへば、シテ「辨慶かくしとも白波のたち寄り渡る橋板をさもあらゝかに踏みならせば、牛若「彼を見るよりも、すはや嬉しや、人來るぞと、薄衣猶も引きかづき、側に寄りそひ佇めば、シテ「辨慶彼を見

附けつゝ、言葉をかけんと思へども、見れば女の姿なり。我は出家の事なれば、思ひ煩ひ過ぎて行く。

牛若「牛若かれをなぶつて見んと、行違ひざまに長刀の柄元をはつしと蹴上ぐれば、シテ「すは痴者よ、物見せんと、地「長刀やがて取直し、いで物見せん手並の程と、切つてかゝれば、牛若は少しも騷がずつつ立ち直つて、薄衣引きのけつゝ、靜々と太刀拔放つて、つゝ支へたる長刀の切先に太刀打合はせ、つめつ開いつ戰ひしが、何とかしたりけん、手元に牛若寄るとぞ見えしが、疊み重ねて打つ太刀に、さしものの辨慶合はせ兼ねて、橋桁を二三間、しざつて肝をぞ消したりける。あら物々し、あれ程の小姓一人を切ればとて、手並にいかで洩すべきと、長刀柄長くおつ取りのべて、走り懸つてちやうと切れば、背けて右に飛びちがふ。取直して裾をなぎ拂へば、踊りあがつて足もためず、中を拂へば頭を地に付け、ちゞに戰ふ大長刀、打落されて力

なく、組まんと寄れば切拂ふ、すがらんとするも便りなし。せん方なくて辨慶は、希代なる少人かなとて、呆れはててぞ立つたりける。ロンギ地「不思議や、御身誰なれば、まだいとけなき姿にて、かほどけなげにましますぞ。委しく名乘りおはしませ。牛若「今は何をか包むべき。我は源牛若。地「義朝の御子か。牛若「扨汝は。地「西塔の武藏辨慶なり。互に名乘り合ひ、降參申さん、御免あれ。少人の御事。我は出家。位も氏もけなげさも、よき主なれば賴むなり。麁忽にや思し召すらん。さりながら、是又三世奇緣の始、今より後は主從ぞと、契約堅く申しつつ、薄衣かづかせ奉り、辨慶も長刀打ちかついで、九條の御所へぞ參りける。（謠曲）

二八　長柄堤の訣別

坪内逍遙(一)

晨雞再び鳴いて殘月薄く、征馬連りに嘶いて行人出づ。は

(一) 名は雄藏。早稻田大學名譽教授。文學博士。

や分れゆく横雲の、殘の星を一つづつ、鐘が消しゆくいなのめの、(二)長柄堤に秋たけて、一むら蘆に風黑く、ありあけすごき大川水、ゆきて歸らぬ涙の音、狹霧にむせび白けゆく、千草が蔭の蟲の聲、哀はいとどまさるらん。(三)片桐市正且元は、居城茨木へ立退かんと、從ふ郎黨一百餘人、深更に邸を立つて、大阪城をあとになし、列を正してしづ〳〵と、長柄堤にさしかゝる。（中略）

後には何か一思案、寂然として駒たつる、長柄堤の有明がた、塒に囀る小鳥の聲、川霧やうやう霽行けば、遠樹模糊として幹を分ち、ほの見えわたる賤が屋に、一筋のぼる朝煙、くだかけの聲勇ましく、生氣溢るゝ東の、空には似ぬや入りかたの、月すさまじき柳蔭、枯葉枝まばらにして風飄々、見る目も昏し遠方に、おぼろ〳〵とあらはるゝ、名に大阪の四衢・八街、

(二) 大阪府西成郡豐崎村を流るゝ長柄川の堤。長柄川は一名中津川とも云ひ、淀川の一支流なり。
(三) 秀吉の臣。攝津茨木二萬五千石を領す。元和四年歿、年六十。

悄然としてさびしげに、一棟高く聳えしは、

市「おゝ、あれこそはお天守ぢやなあ。南山不落と祝はせられ、千萬年の後迄もと、築かせられし大阪城、(一)故殿下かくれさせ給ひて後、まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ〳〵、とりわけ加藤肥州逝去の後は、思慮ある者には堅節なく、義勇を存ずる者才略乏しく、阿附・黨同して相鬩げば、(二)大政所の御方さへ、當家を餘處に見そなはし、浮世はなれし御ありさま。脣齒已に亡ぶ。今にもあれ事起らば、金城湯池もその甲斐なく、

いひかけて聲くもらせ、

市「須彌より重き御遺命、夢いさゝかも忘れざれど、御運の末か情なや。この旦元がすること爲すこと、いすかの嘴とくひちがひ、兩家を繋ぐ絆にもと、迎へ奉りし千姫君は、東西不和の導火となり、毘盧舍那佛の御胸にも、大慈大悲は宿らざるか。お家とこしなへに康かれ

(一) 豐臣秀吉。
(二) 清正。
(三) 秀吉の妻。
(四) 秀忠の長女。慶長八年七月秀頼に嫁す。

と祝ひし文字が元となり、降つて沸いたる難題(五)は、只前門の虎にして、後に不慮の豺狼あり。かゝる仕宜となつたること、御運の末とはいひながら、

こらへず馬より飛下り、かなたに向ひ平伏なし、

市「これしかしながら不肖旦元、愚昧にして先見無く、姑息因循して大事を誤り、空しく關東の罠にかゝり、仰せつけられし御遺命に、背き奉るけふの仕合せ、不忠とも言ふ甲斐なしとも思しめさん。それを思へば旦元が、この腸はちぎるゝばかり。償ひがたき不臣の罪は、あの世で御わび仕らん。お許しなされて下さりませ。

在すが如く兩手をつき、人目なければ稍しばし、不覺の涙に暮れにけるが、やゝあつて心付き、

市「あゝ、我ながら不覺の至。わが大罪の御わびよりも、さしかゝるお家の安危。長門守には如何にせし。心元なきことどもぢやなあ。

(五) 京都大佛殿の鐘の銘に「國家安康」の文字ありて、家康より難題起れり。

すかしながむる折こそあれ。遙かに聞ゆる蹄の音。程もあらせず只一騎、殘霧つんざき一散に、汗馬に宙を走り來る、木村長門守重成。

本「市正殿に候な。市「長門殿待ちかねしぞ。

いふ間にかけ寄るくつわづら、右手におりたち顔見あはせ、言葉はなくてそゞろにも、まづ袖ぬるゝ朝露や、風飄々たる枯柳の枝、入りかたの月ゆらめきて、老いゆく秋のさびしさを、長柄堤にとゞむらん。

本「もはや豐臣の御社稷も、いよ〳〵末となつたるか。棟梁と頼む足下まで、佞人讒者の毒舌に、逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるゝとは。それがし圖らぬ事よりして、端なくも御母公の御嫌疑蒙り、出仕を遠慮のその間に、思ひがけぬ珍變あり。つゞいて足下に御討手と、昨朝承り、大に驚き、すぐにお表へ參入すれば、城内議論沸くが如く、織田入道殿日ごろに似氣なく、激論の末、席を蹴たて、只今退座ありしとばかり、後は亂脈無法の評定、御母公の威を笠に被る大野・渡邊等が我意暴慢。この上は是非に及ばず、かれ等を一刀に斬つてすて、腹かつ切らんと、二度まで刀の柄に手はかけしが、貴殿が日ごろの教訓を、思ひ出して、無念を忍び、冤を知つて忠臣を、救ひ得ざりしいふ甲斐なさ。

悔むを且元おしなだめ、

市「いしくも堪忍せられしぞや。かねても屢〻申ししごとく、お家の大仇は彼等にあらず。鼠輩の爲に命を落すは、大忠臣の所爲にあらじ。某とてもこの度の一條、遺恨骨髄に徹すと雖も、今更繰返すは愚癡の至。大切なるはお家の後事。それがし退去のこと關東に聞えなば、破綻生ぜんこと治定なるに、きのふまでは去就を定めざりし織田殿の、已に心を變じ、京表へ退身せられしからは、城内の祕密悉く漏

(一) 秀頼の生母淀君。
(二) 織田信雄常眞入道。
(三) 大野治長。
(四) 渡邊尚。

れ、年來の苦心皆うれたかた。大亂破裂せんは目前なり。この上は只ひとへに籠城の計畫こそ肝要なれ。本「して籠城の計畫とは、何を以て先とすべきか。市「されば今御城に兵糧・金銀は乏しからず。まつた猛卒・勇士にも事かゝねど、得難きは智謀の將なり。それがしこれを慮り、萬一の備をなし置きたり。本「してその智謀の將とは。市「今九度山に隱れ忍ぶ信州上田前の城主、眞田安房守が二男、左衞門佐幸村こそ、故太閤の恩を思ふ智勇兼備の良軍師。關が原の一戰以來、關東の跋扈を怒り、蟄して世の態を窺ひ居るを、先年お身方となし置いたり。この事起らば上使を以て、急ぎ彼を招かるべし。合戰の進退は一切かの人に任せられよ。その他關が原の一亂以後、浪々なせし長曾我部盛親、まつた黑田家の浪人後藤又兵衞基次、いづれも得易からぬ良將なるが、かねてちなみはつけ置きたり。御上使を以て招かせられなば、心を傾け馳參ぜん。これ第一の手配りなり。本「して又籠城

(一) 紀伊國伊都郡高野山の北谷にあり。

となつたる曉、敵を防がん手配りは。市「その儀もかねて地利を考へ、出丸なくては協ふまじと、前年、紀州の山々より、材木あまた切りいださせ、商業の爲と僞り、紀州川の川上より浪速津に押流させ、御船入に積み置いたり。まつた港口の御庫には、年頃力めて購ひ置きたる數萬俵の糧米あり。籠城數年に亙るとも、なほ支ふるに餘りあるべし。本「それに加へて故殿下が、貯へおかれし數萬の金銀、近年御出費かさむと雖も、なほ若干の餘財あり。市「甲冑・兵具も乏しからず。本「城は名に負ふ南山不落。市「眞田後藤の智勇をもつて、この堅城にたて籠り、忠臣悉く心を一にし、ひとへに君家を守護するときんば、本「たとひ關東の老奸雄利をくらはせ諸大名をなづけ、六十餘州の兵を盡くし、四方・八面より攻寄すとも、市「なか〳〵三年・四年がほどには、攻落さんこと難かるべし。本「まつた若年には候へども、いよ〳〵軍始りなば、われまた一方をうけたまはり、速水・御宿・和久等と共に、

(二) 德川家康。
(三) 速水守久。
(四) 御宿正倫。
(五) 和久宗是。

忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとより鴻毛の、吹飜さん白旗は、祖先佐々木が四つ目結、君臣將士心を一にし、千變萬化の手を盡くさば、金石も亦透りぬべし。利欲に集る關東勢、なに退くるに難かるべきや。この上は仰に從ひ、このこと君に言上なし、直に軍の手配りせん。御心安かれ市正殿。市「ほゝ頼もし、頼もし。唯、大切なるは上下の一致、必ず忠勤勵まれよ。とはいひながら往時に照らし、成行くすゑを鑑みれば、本「淀の御方の御氣質、社鼠にひとしき大野渡邊。市「上御發明にわたらせらるれど、本「讒佞これを蔽ふがゆゑ、市「地の利はあれども人の和なく、本「故太閤が御威武にをのゝき震ひ打伏しし、六十餘州の民草も、市「天の時にや大御所の、おのづからなる德風に、いつしか靡く世の有樣。本「如何なればかくまでに、御運傾く西天の、市「有明の影うすれつゝ、本「東天紅と八面に、かしましく鳴くくだかけは、市「新日東天に昇るといふ、本「世の成行の、二人「影なるか。

是非もなき世の有樣と、入るかたの月詠め入り、しばしは愚癡にをかた寺、耳驚かす鐘の聲。夜はほの〴〵と明けにけり。（桐一葉）

二九　愛國心

大島正德*

*東京帝國大學助教授。

人は社會を成して生活するのが本能であるとすれば、人が其の住むところの社會乃至國家を愛するのも亦本能であると云へる。如何なる國民もその國を愛せぬものはない。その方法、その程度には多少の差異はあらうが、國を愛すると云ふ心に於ては、何れの國民も變りはない。その家族・朋友を愛し、その鄉土を愛し、延いてはその民族團體を愛するのは、蓋し人情の自ら然らしむる所である。

併し、國を愛する心があつても、たゞ盲目的にこれを愛すると云ふ譯には行かない。各〻の國民はその國家に就いてそれ〴〵自覺す

る所がなければならぬ。それ故に、我々日本人はこの愛國心を全うする爲に、立國の大義を明らかにし、國體の特徴を辨へ、而して國體の精華を永遠に發揮する事に努めねばならぬ。我々日本人は、此の日本と云ふ國家を離れ、日本の國史を離れては、日本人たるの意味をなすことは出來ない。我が國が君主國體として、萬世一系の天皇を戴き奉り、血族親愛の關係に於て萬國無比の國を成せることは、我々國民の光榮であつて、此の天壤無窮の國運を扶翼する事は、實に我々臣民の本分であり、且又我々の祖先の遺風を顯彰する所以である。

併し、愛國心に就いて聊か注意すべきことは、それが徒に國自慢となり、排外心とならぬことである。如何なる國もそれ〴〵精神的道德的存在なる人格者を要素として成立つて居るものであるから、如何なる國家も、又道德的人格的なる一大存在である。隨つて相互の國家の間に互に敬意を拂ふべきは當然である。自國を尊ぶべきが故に、他國を卑しむべきではない。それ故に、今度の平和宣言の大詔にも、「進ンデハ萬國ノ公是ニ從ヒ、世界ノ大經ニ仗リ、以テ聯盟ノ實ヲ擧ゲンコトヲ思ヒ。」と宣はせられたのである。我々は日本國民として我が君主國體の最も美しき、最も貴きことを信じ、我が國家の隆盛發展を圖ることに努力すべきは當然であるけれども、それだからと云つて、他國の國體を猥りに非議し罵詈してはならぬ。米國人はその民主共和の國體を米國人に取つて最も良きものとして之を大切に思ひ、英國人はその君主國體を英國人に取つて最も良きものとして之を尊んで居ることを否認すべきではない。それ〴〵の國家にはそれ〴〵の歷史があり、特徴があり、又それ〴〵の國民がそれ〴〵の國家を愛する念慮に於て變るべき筈がないからである。恰もどの家の子も、その家を愛する念に於ては變りが

ない筈であるやうなものである。

故に互に各〻その家を愛する心を尊重するが如く、お互にその國を愛する心を是認し、尊重すべきである。それ〴〵の國家は、歴史を異にし、事情を異にし、民情を異にしてゐる。かの獨逸が一敗地に塗れて再び立つことの出來ぬやうになつたのは、獨逸國民が餘り國自慢になり、排外的になつたことに原因することを忘れてはならぬ。

又啻に國自慢に陷らざるのみならず、國民はその長所特質を自覺し、尊重すると共に、その缺點・短所に就いても十分に自省し、自警する心掛がなくてはならぬ。何事につけても自ら顧み、己の短を知つて改めて行くものは、必ず自己向上の途に進むことの出來る如く、一國民としても、その國民生活に就いて長所・美點を自覺してゐる上に、缺點・短所を互に悟り、互に戒めるのは、又その國民生活を向上せしむる所以である。

かやうに考へて來ると、我が國民の道德意識に就いて、今後大に反省し、改造すべき點はないであらうか、我が國民の風俗・習慣・生活法に就いて改善を施すべき餘地はないであらうか。或は立憲政治に關する諸般の問題に就いて、或は產業組織に關する諸種の事項に就いて改造を要すべき點は無いであらうか。此等の事柄に就いて深く省み、深く戒め、進んで改めるところがなければならぬ。又學問・技藝に關して、從來我々國民の間から如何なる大思想・大發見・大發明が生れたか、世界文明の上に如何なる貢獻をしたらうか。この邊に就いても大に熟考し、發憤せねばならぬものがある。我々の從來の文明は、多くは外國の模倣であつて、我々の創意に係るものは極めて少いと云はれて居る。例へば文明の利器と稱せらるゝ汽車・汽船・電信・電話・飛行機等は何人によつて發明されたかを思へば、我

等は從來餘りに模倣的であつたことを顧みて、深く自ら戒めなければならぬ。成程西洋と交際をして、彼等の文明に接したのはまだ日の淺いことであるから、これまでの模倣生活は已むを得なかつたとしても、既に五十年餘の歳月を經た今日に於ては、我々は自ら發奮努力して、進んで世界の文明に寄與するの覺悟がなくてはならぬ。農業商業・工業及び教育・學問等の何れを問はず、凡百の方面に於て、熱心に研究を重ね、修養を積み、努力をして行かなければならぬ。希望は未來にあり、青年は未來に生きる。此等の責任は皆青年の双肩に懸つて居る。大に奮勵しなければならぬ。（公民道德）

師範國文新選　卷二　終

（ビ書簡文）

※印ハ文中ノ一部分ニ含ムモノ

巻一
一　ハナ　韻大日本
二　ハト　中村君
三　ミノ　韻長き行列
四　正月　書ゑはがき
五　韻ユキ　モチノマト
六　ユキダルマ
七　ハナサカヂヂイ
八　カゲエ
九　ナゾ
一〇　オクスリ
一一　目ト耳ト口
一二　オヤ牛ト子牛
一三　コレカラ
一四　韻ヒカウキ
一五　大江山

巻三
一　イマハ　韻世界
二　ハヤオキ　※横濱
三　ヒヨコ

巻五
一　韻冬の夜
二　萬じゆの姫
三　磁石
四　けんやくと義捐
五　賀茂川
六　メリンス
七　氷すへり風
八　神
九　象
一〇　千早城
一一　韻記念の木
一二　芽
一三　書伊勢參宮

巻七
一　鶯
二　餅つき
三　韻町の辻
四　看板
五　塙保己一
六　書アメリカだより
七　コロンブスの卵
八　稅
九　水の力
一〇　啞の學校
一一　名古屋市
一二　韻廣瀨中佐
一三　冑とからだ
一四　分業
一五　書人を招く手紙
一六　乃木大將の幼時

巻九
一　書京城の友から
二　炭坑
三　輸出入
四　韻登校の道
五　言ひにくい言葉
六　文天祥
七　溫室の中
八　書手紙
九　韻日光山
一〇　捕鯨船
一一　太宰府まうで
一二　たしかな保證
一三　平和なる村
一四　進水式
一五　兒島高德

巻十一
一　國旗
二　リヤ王物語
三　韻鳴門
四　まぐろ網
五　間宮林藏
六　法律
七　釋迦
八　奈良
九　青の洞門
一〇　トマスエヂソン
一一　電氣の世の中
一二　書舊師に呈す
一三　韻港入
一四　勝安房と西鄕隆盛
一五　我が國民性の長所短所

尋常小學 國語讀本教材研究（その二）文體一覽表（韻文及ビ書簡文）

※印ハ文中ノ一部分ニ含ムモノ

		巻	
一	ハナ	一	
二	ハト	一	
三	ミノ	一	
四	カラス	一	
五	ウシウマ	一	
六	ハサミ	一	
七	オヤ	一	
八	イヌ	一	
九	ネコ	一	
一〇	サルカニ合戰	一	
一一	アメアガリ	一	
一二	韻カタツムリ	一	
一三	アニトアネ	一	
一四	ホタル	一	
一五	ハス	一	
一六	ヘチマ	一	
一七	ハコニハ	一	
一八	アヒル	一	
一九	ヒケシ	一	
二〇	韻ガン	一	
二一	アサガホノエ	一	
二二	ユフガタ	一	
二三	韻ホシ	一	
二四	韻※モモタラウ	一	
二五	……	一	
二六	……	一	
二七	……	一	
二八	……	一	
		巻	
一	イマハ	三	
二	ハヤオキ	三	
三	ヒヨコ	三	
四	韻うちの子ねこ	三	
五	お花	三	
六	ゆびのな	三	
七	かんがへもの	三	
八	わらびとり	三	
九	竹の子	三	
一〇	韻きやうだい	三	
一一	五一ぢいさん	三	
一二	右と左	三	
一三	まはりつこ	三	
一四	うらしま太郎	三	
一五	四方	三	
一六	私ノ村	三	
一七	一口ばなし	三	
一八	なのたうふ	三	
一九	セミ	三	
二〇	さ舟	三	
二一	水デッパウ	三	
二二	虫ぼし	三	
二三	カウモリ	三	
二四	十五や	三	
二五	韻ふじの山	三	
二六	はごろも	三	
二七	……	三	
二八	……	三	
		巻	
一	韻大日本	五	
二	中村君	五	
三	大蛇たいぢ	五	
四	松太郎の日記	五	
五	金鵄勳章	五	
六	鯉のぼり	五	
七	大賣出し	五	
八	韻※ツバメ	五	
九	私のうち	五	
一〇	遠足	五	
一一	熊襲征伐	五	
一二	一口話	五	
一三	蠶	五	
一四	雨	五	
一五	養老	五	
一六	カチ屋	五	
一七	日本三景	五	
一八	韻虹	五	
一九	峠から町へ	五	
二〇	用水池	五	
二一	八幡太郎	五	
二二	書水見舞	五	
二三	郵便函	五	
二四	韻一足々々	五	
二五	ブダウ	五	
二六	熊のさゝやき	五	
二七	東京停車場	五	
二八	……	五	
		巻	
一	世界	七	
二	韻長き行列	七	
三	横濱	七	
四	書※潮干狩	七	
五	養雞	七	
六	動物ノ色ト形	七	
七	五代の苦心	七	
八	ナイヤガラの瀧	七	
九	若葉の山道	七	
一〇	雨將軍の握手	七	
一一	韻水師營の會見	七	
一二	物ノ價	七	
一三	書弟から兄へ	七	
一四	老社長	七	
一五	麥打一、二、	七	
一六	軍艦生活の朝	七	
一七	東京から青森まで	七	
一八	いもほり	七	
一九	安工場	七	
二〇	木下藤吉郎	七	
二一	海の生物二、一、	七	
二二	マリーのきてん	七	
二三	二百十日	七	
二四	韻助力	七	
二五	加藤清正	七	
二六	書手紙三、六、	七	
二七	彼岸	七	
二八	書※水兵の母	七	
		巻	
一	今日	九	
二	書トラック島便り	九	
三	弟橘媛	九	
四	養雞	九	
五	動物ノ色ト形	九	
六	五代の苦心	九	
七	ナイヤガラの瀧	九	
八	若葉の山道	九	
九	雨將軍の握手	九	
一〇	韻水師營の會見	九	
一一	物ノ價	九	
一二	書弟から兄へ	九	
一三	老社長	九	
一四	麥打一、二、	九	
一五	軍艦生活の朝	九	
一六	東京から青森まで	九	
一七	いもほり	九	
一八	安工場	九	
一九	韻石	九	
二〇	星の話	九	
二一	白馬岳	九	
二二	初秋	九	
二三	北風號	九	
二四	書手紙三、六、	九	
二五	書※水兵の母	九	
二六	選擧ノ日	九	
二七	……	九	
二八	……	九	
		巻	
一	太陽	十一	
二	孔子	十一	
三	上海	十一	
四	韻遠足	十一	
五	のぶ子さんの家	十一	
六	裁判	十一	
七	賤嶽の七本槍	十一	
八	瀬戸内海	十一	
九	植林	十一	
一〇	書手紙	十一	
一一	畫師の苦心	十一	
一二	ゴム	十一	
一三	ふか	十一	
一四	北海道	十一	
一五	人と火	十一	
一六	無言の行	十一	
一七	松坂の一夜	十一	
一八	貨幣	十一	
一九	韻我は海の子	十一	
二〇	遠泳	十一	
二一	暦の話	十一	
二二	リンカーンの苦學	十一	
二三	書南米より	十一	
二四	韻孔明	十一	
二五	自治の精神	十一	
二六	ウエリントンと少年	十一	
二七	ガラス工場	十一	
二八	鐵眼の一切經	十一	
		巻	
一	ウンドウクワイ	二	
二	オキヤクアソビ	二	
三	韻※キクノハナ	二	
四	ウシワカマル	二	
五	カンガヘモノ	二	
六	犬ノヨクバリ	二	
七	たぢさんのうち	二	
八	私どもの町	二	
九	ユフヤケ	二	
一〇	月	二	
一一	クリヒロヒ	二	
一二	韻木ノハ	二	
一三	日と風	二	
一四	フクロフ	二	
一五	山びこ	二	
一六	すすはき	二	
一七	ミヨチヤン	二	
一八	ネズミノチエ	二	
一九	書※かるた取	二	
二〇	オ正月	二	
二一	書※はがき	二	
二二	お話二つ	二	
二三	モチノマト	二	
二四	韻しぴの木とかし	二	
二五	ユキ	二	
二六	大工小屋	二	
二七	ユキダルマ	二	
二八	扇のまと	二	
二九	ハナサカヂヂイ	二	
三〇	山がら	二	
三一	カゲエ	二	
三二	ナゾ	二	
三三	ナゾ	二	
三四	オクスリ	二	
三五	一本杉	二	
三六	汽車の旅	二	
三七	目ト耳ト口	二	
三八	オヤ牛ト子牛	二	
		巻	
一	お祭	四	
二	柿	四	
三	十月三十一日	四	
四	韻麥まき	四	
五	白ウサギ	四	
六	たぢさんのうち	四	
七	私どもの町	四	
八	山びこ	四	
九	フクロフ	四	
一〇	日と風	四	
一一	すすはき	四	
一二	かるた取	四	
一三	書※はがき	四	
一四	お話二つ	四	
一五	しぴの木とかし	四	
一六	大工小屋	四	
一七	扇のまと	四	
一八	山がら	四	
一九	ナゾ	四	
二〇	一本杉	四	
二一	汽車の旅	四	
二二	ヒナマツリ	四	
二三	韻春が來た	四	
二四	曾我兄弟	四	
二五	……	四	
二六	……	四	
二七	……	四	
二八	……	四	
		巻	
一	俵の山	六	
二	日本の高山	六	
三	ヤクワントテツ	六	
四	ビン	六	
五	きのこ取	六	
六	韻※一、二、なぎけ	六	
七	くりから谷	六	
八	霜	六	
九	虎と蟻	六	
一〇	町の朝	六	
一一	弓流し	六	
一二	書入營した兄から	六	
一三	笑ひ話	六	
一四	鮭	六	
一五	韻冬の夜	六	
一六	萬じゆの姫	六	
一七	磁石	六	
一八	看板	六	
一九	けんやくと義捐	六	
二〇	賀川茂一	六	
二一	書アメリカだより三、二、	六	
二二	メリンス	六	
二三	コロンブスの卵	六	
二四	氷すへり	六	
二五	稅	六	
二六	神風	六	
二七	水の力	六	
二八	象	六	
		巻	
一	山の秋	八	
二	犬ころ	八	
三	競馬	八	
四	武將の幼時三、二、	八	
五	揚子江	八	
六	吳鳳	八	
七	韻霧	八	
八	パナマ運河	八	
九	開墾	八	
一〇	陶工柿右衛門	八	
一一	銀行	八	
一二	傳書鳩	八	
一三	鉢の木	八	
一四	書京城の友から	八	
一五	炭坑	八	
一六	輪出入	八	
一七	韻登校の道	八	
一八	言ひにくい言葉	八	
一九	文天祥	八	
二〇	溫室の中	八	
二一	書手紙二、一、	八	
二二	韻日光山	八	
二三	捕鯨船	八	
二四	太宰府まで	八	
二五	たしかな保證	八	
二六	平和なる村	八	
二七	進水式	八	
二八	兒島高德	八	
		巻	
一	韻明治天皇御製	十二	
二	出雲大社	十二	
三	チヤールスダーウイン	十二	
四	新聞	十二	
五	蜜柑山	十二	
六	商業	十二	
七	韻鎌倉	十二	
八	書※ヨーロッパの旅	十二	
九	月光の曲	十二	
一〇	我が國の木材	十二	
一一	十和田湖	十二	
一二	小さなねぢ	十二	
一三	國旗	十二	
一四	リヤ王物語	十二	
一五	まぐろ網	十二	
一六	韻鳴門	十二	
一七	間宮林藏	十二	
一八	法律	十二	
一九	釋迦	十二	
二〇	奈良	十二	
二一	青の洞門	十二	
二二	トマスエヂソン	十二	
二三	電氣の世の中	十二	
二四	書舊師に呈す	十二	
二五	韻港入勝安房と西郷隆盛	十二	
二六	我が國民性の長所短所	十二	

大正十三年十月十　九日印刷
大正十三年十月二十二日發行
大正十四年一月十　七日訂正印刷
大正十四年一月二　十日訂正發行

師範國文新選（全六册）

定價	
卷一、二、各金四拾七錢	卷三、四、各金四拾八錢
卷五　金五拾參錢	卷六　金五拾貳錢

大臨時正四年度定價	
卷一、二、各金八拾五錢	卷三、四、各金八拾六錢
卷五　金九拾五錢	卷六　金九拾四錢

編者　垣内松三
東京市神田區錦町一丁目十番地

發行者　株式會社明治書院
取締役社長　鈴木友三郎
東京市神田區雉子町三十四番地

印刷者　綾部喜久二

不許複製

發行所　東京市神田錦町一丁目
（振替東京四九九一番）
株式會社明治書院
電話大手五八四五番

山口縣師範學校

Yamaguchi Normal school

T. Hirokane

広島大学図書
2000301850